
緋弾のアリア ~血濡れた銀狼~

モンキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア → 血濡れた銀狼(アリア)

【NZコード】

NZ9560Q

【作者名】

モンキー

【あらすじ】

大切なモノを盾に公安の犬となつたフィアナは武装探偵を養成する東京武偵高校通信科に在籍していた。鉄火場には出無いが後方支援に特化した単位を持ち、平均Aランクのフィアナは多くの仕事を熟していたが、二年次の編入と言う事もあり、遠山キンジと同室になつてしまつ。叶わなかつた世界をキンジに見ながら生活する中で、アリアという少女が現れた事により静かだった世界は一変した。

デュランダル編以降、原作を軽く……しようかなと考えてます。

まあ、キンジハーレムを崩したくないからだつたり……まあ、時系列はそのままです！

頭の中にはカナヒロインとか、粉雪ヒロインとかあります。まあ、何に転ぶかは分かりませんが……

その頃、あひと姫から少女が降つて來ていたのだ（前編）

キンジの口調が不安です！

その頃、さうと空から少女が降つて來ていたのだ。

「トコトコト……鍋が煮立つ音だけが台所に鳴り響く。

小皿に掬い取り、味見をしてその出来に納得すると、その女性は食器に朝食を盛り付けて行く。

そして、三人分を用意した所で田覚ましのベルの音で同居人が目を覚ました。

「おはよ……って、別に毎日作ってくれなくてもいいんだぞ？」

田の前にいる遠山キンジの言葉にエプロンを脱ぎ正座して来るであらう来客を待ちながらその女性は微笑んだ。

「いえ？ 一人分増えた所で手間はかかりませんから。それに、わざわざ独り身だつた所に押しかける形になつてしまつた以上はそれなりの責任の取り方をするべきだと思います。多分、そろそろチャイムが鳴りますね」

そう言つて、その女性は最後の食器にして飯を盛り付けた。

そして、その女性が言つた通りチャイムが鳴り響きキンジが向かう事になる。

「はあ……少しばかりその青さは羨ましくありますね……。もしも、半年前に貴方と出会えていたなら違つた結末を迎えていたのかもしれません……」

玄関へと向かうキンジの背中にポソリとその女性は呟くがその言葉

は誰にも届く事は無かつた。

そして、来客がリビングに来る頃には先程纏っていた暗い気配は消え去りその来客に挨拶をする。

「おはよひ〜ぞこます。白雪さん。」

「お、おはよひ〜ぞいますー・フィアナ先生ー。」

なぜか、ペロペロと頭を下げる白雪に苦笑いをしつしまつフィアナにキンジは助け舟を出す。

「白雪……フィアナも苦笑いしてからその辺りにしてやれ……」「キンちゃんがそう言つなり……あのーまた、料理教えて下さいー」「別に構いませんよ？それよりも、ご飯にしましょつ。遅刻してしまこますから……」

一人のやりとりを微笑ましく何処か遠い世界のような眼差しで眺めながら料理に箸を向けた。

白雪とキンジは美味しいと言つてくれているが、フィアナの口には何の味もしていなかつた。この場所はフィアナには余りにも眩し過ぎる場所なのだ。確かに武装探偵は日常と非日常の間の職業だ。しかし、そんな世界でもフィアナの田には眩し過ぎた。気付くと、食器を洗おうとする白雪を先に送り出し学校へと向かうキンジの自転車の背中に居た。そして、横に田を向けるとコニーを乗せて走るセグウェイが田に入った。

『そのチャリには爆弾が仕掛けられてありやがりますー。』

『だそうですよー。どうあるんですか？キンジさん？』

まるで他人事のように焦りもせずに笑つフィアナに必死にペダルを漕ぎ続けるキンジは懇願する。

「頼むから逃げないでくれ！爆発するから！そして、爆弾をなんとかしてくれないか！」

キンジの懇願に耳を傾けながら、フィアナの長い母親譲りの銀髪が揺れた。

「ようは、減速や降りずに爆弾とシニエを駆逐すればいいんですね？って、通信科の人間に出来る仕事ではありませんね」

そう笑いながら告げるフィアナに必死になるキンジは泣きたくなつた。

確かに狙撃科、諜報科、尋問科、車輛科、鑑識科、通信科、情報科、衛生科、救護科と鉄火場に関係無い資格がズラリと並んでいる。しかも、通信科Sを筆頭に平均Aランクを誇る優秀な人材だ。因みに、Sランクは通信科のみなのだが……。

「鑑識科で爆弾の解体とかやらないのか！」

「あつ！終わりましたよ！では、後は頑張れキンジ君！」

そう告げるとキンジを見捨てて解体した爆弾を抱えて追走するセグウェイを破壊して自転車を飛び降りた。

何かキンジは叫んでいるが完全に無視して学校へと向かう。ただ、こんな非日常に居ると心が落ち着く。

そんな事をしていると、携帯が鳴り響いた。

その番号を見て、フィアナは苦虫を噛んだような表情になる。

そして、無視しようとするが数コールを待った後に出了た。

「おはよっございます。大変でしたね」

機械じみた声に苛立ちを隠せないフィアナは携帯を握り締めギシリと携帯から嫌な音が鳴り響く。

「死ね！ヒマなんだな！公安の課は！あれか？公務員だからか？」
「今の言葉は聞かなかつた事にしましょう。アレがどうなつてもしりませんよ？」

電話相手の言葉に近くの壁を殴りつけると壁に亀裂が走つた。

「何の用だ！そんな下らない事を言う為に電話してきたのか！」
「神崎アリアが貴方と同じクラスに入る筈です。彼女の“監視”をお願いします。」
「たかが、ガキ一人の監視も碌に出来ない程お忙しいんだな。公安は……」

フィアナは最大限嫌味を込めて電話相手に告げるがそれに何の反応も無くブツリと通話は切れた。
相手の用件がすんだからだろう。

公安の犬……それが、今のフィアナの立ち位置だった。大切なモノを盾に首輪を握られる狼……

それが、フィアナ シュトレーザという存在だった。

電話を地面に叩きつけたい衝動に駆られるがそれを押さえ込むとポケットへと戻す。

そして、先程壁に叩きつけ、血の滲む片腕を治療すると何事も無かつたように学校に向かった。

その頃、あいつ窓から少女が降つて来ていたのだらう（後書き）

感想待つてます！

因みに不定期です www

フイアナは学校に着くと教室へ行く気分には慣れず、通信科へと足を運んでいた。

上からの命令で神崎アリアの監視をする前にある程度の情報を搔き集める意図もあつたがそれ以上に、クラスに入つて笑つていられる自信が無かつたのが一番の要因だった。

通信科に入ると、やはり時間的に誰も居らず自前のコーヒーメーカーを使いコーヒーを淹れる。

コーヒーをカップに注ぐと、自らの席で機密文献を表ルートで回覧していく。

本来なら回覧禁止の文書や個人データを開示出来るのは犬としての特権だった。

「神崎・H・アリア？ Hか……見てて腹が立つわ……優秀で未来有望……私とは正反対ね……」

そんな事を呟きながら経歴のカーソルを下げる家族構成の部分で指が止まつた。

神崎かなえ……その項目に目を通すとフイアナは深い溜息を吐いた。
「完全な冤罪か……本当に下らないわね……世界なんて下らない……いつそ、誰かが壊してくれないかしら？」

そんな物騒な事を呟きながら、コーヒーに口をつけるが一言、「苦いわね」と呟くと口を離した。

あらかた読み終わり、席を立とつとすると後ろから声をかけられる。

「フイアナさん早いですね。もう、昼食食べられたんですか？」

その言葉に振り返るとそこにはいたのは中空知だった。そして、時計を確認すると四時間全てをバックれた事になっていた。

「 フィアナからすれば、卒業など興味が無いので進級意識が全く無い。その為、バックれた所で別に気にしないのだが休み明けという事もあり担任に呼び出しが確定だらうと溜息を吐いた。

「 美咲さんもコーヒー飲みますか？それとも、紅茶がいいですか？」

「 なら、紅茶を……でも、迷惑じゃないですか？」

「 迷惑？別に迷惑なんかじゃありませんよ……どうせ淹れなおす所でしたから……」

そうして、淹れられた紅茶を受け取ると中空知はフィアナに尋ねた。

「 今朝のチャリジャックの写真に[写]っていたのはフィアナだよね？」

朝のチャリジャックと言われて首を傾げそうになるが、記憶の片隅に葬り去った出来事を掘り起こした。

確かに今朝のチャリジャックは何かしらの疑惑を感じた。わざわざ、なぜ遠山きんじの自転車なのか？それなり、もっと大きい標的を狙うべきでは無いのか？そう考え始めると、今までの武偵殺しの殺り方をリストアップして検証し始めた。

「あの……フィアナさん？」

心配そうに覗き込む中空知を他所に片つ端から武偵殺しに関する情報を開いていく。

そして、行き着いたのが神崎かなえと遠山金一だった。

「 点と点は見えたけど、大事なピースが抜けて繋がらない……ただ、

まだ続くかもしれませんね」

「チャリジャックですか？」

「いえ……東京武偵高校の生徒を狙つた武偵殺しがですよ……」

その結論にファイアナから笑みが漏れた。確かに不謹慎だが実に自らしい事件の臭いがしたからだ。

「大変じゃないですか！他の科に協力を！」

慌てる中空知をファイアナは溜息混じりに諭す。

「現時点では内部犯の可能性もありますし、まだ推論を出ません。それで人を動かすには危険過ぎます。少し調べるので先生には体調が悪いので早退したと伝えて下さい。」

そう中空知に告げると、返答を待たずに部屋を後にした。

本来なら、鑑識科の資料を読むのが定石だが内部犯を疑うのならそれすら信用出来ない。

そこで、一度武偵殺しの線に戻り、調べて見る事にしたのだった。

「幾つか質問があるので、一人にして貰えませんか？」

神崎かなえに面会に来たファイアナは看守に微笑む。しかし、看守も仕事の為に引く訳にはいかない。

「仕事ですか……」

「二人にして、カメラも切つて下さい。」

「無理です！」こは刑務所ですので！」

「やれ……命令よ？聞けないのかしら？私の存在が記録に残つてはいけないの……そこまで言えば分かるわよね？」

記録に残つてはいけない……それは、公安の課などの裏の公務員達の事だ。あくまでも、裏だ。表の記録に残つてはならない。それを目の前の子供が言つているのだ。ビビらない筈が無かつた。そして、逃げ出すようにカメラを切り退出する看守の後姿を確認すると神崎かなえに向き合つた。

しかし、神崎かなえは当然と言えば当然なのだがフィアナを警戒してしまつていた。

それ程までに公安の課は忌み嫌われているのだ。

「別に取つて食べたりしませんから……ただ、武僧殺しについて聞きたかっただけです。」

「話す事はありません……免罪ですか。」

「なら、話を変えましょう。神崎アリアについてです。」

フィアナの言葉にかなえが明らかに動搖した。

「アリアは！アリアは関係無い筈です！あの子に何をするつもりですか！」

叫びガラスを叩くかなえに溜息を吐きながら説明していく。

「別件ですよ……たまたま、神崎アリアが関わっていた。ただ、もしも神崎アリアが事件に関わった事が必然なら貴方まで必然が繋がつてもおかしくはないですよね？それで、お話を幾つか聞きたいと

思いました……神崎アリアについて……

「娘を売るような真似はしません！帰つて下さい！黙秘します！」

「武偵殺しの目的がアリアさんにあるとしてもですか？」

推論の域を出ない妄言だ。しかし、それを少しでも信じさせる事が出来たなら事件に関する手掛かりを掘める所う考えてだつた。しかし、逆に墓穴を掘る結果を招いてしまう。

「貴方は本当は何者なの？公安の課の人間というのは嘘よね？」

「嘘ではありませんよ……彼等の犬ですから……だから、使い捨ての駒扱い……出来る限り情報が欲しいんです。些細な事でも構いませんから……」

「イ・ウー」

「伊・ウー？潜水艦ですか？と、なると原子力……いや、秘密建造船の可能性も視野に入れると……」

「違うわ……私に冤罪被せた相手よ。アリアが自分から関わるならその組織が関わってる筈よ」

「意外ですね……すんなり情報を頂けるとは」

フィアナは意外そうな顔をしてかなえを見た。

「貴方も私と似た感じがしたからかな？一見、自由に見えて鎖で雁字搦めに縛られてる。確かにさつきから本当の事は語つていなければ、嘘は吐いていいのは分かったわ」

かなえの言葉に笑いが込み上げてしまつ。目の前にいる女性は資料だけ見ると自分と同じ場所にいるのかと思っていた。しかし、違つた。まだ、帰るべき場所があるのだ。待ってくれている人がいるの

だ。その事が、フィアナの胸を締め付け、自分の滑稽な道化っぷりに反吐が出てしまう。これ以上話をする、本当に戻れなくなる。そう警報を鳴らす頭に従い、足早にそこから逃げ出した。ただ、彼女の様子から看守に不当な扱いを受けている事が明白に分かったので釘を刺すのを忘れなかつた。それは、届かぬ場所に対する想いを捨てきれない甘さのかも知れない。だが、今のフィアナが正常に動作し続ける為には必要な事だつた。

外に出るともう夕暮れになつており、嘘だらけの居場所に帰る為に重い足をあげた。

そして、家に付くと目の前の光景に頭を痛くするのだった。

神崎（後書き）

感想待つてます

新たなる同居人

フイアナはかなえとの面会の後、夕食の食材を買い帰宅したのだが、すぐに扉を閉めた。

それがエチケットだと考えたからだつた。

ただ、一応連絡位は入れるべきだろうと内心苛立ちを隠せない。しかも、玄関前の廊下で乳繰り合つなどもつての外だ。

男性としての性欲はあるにしても、そこはやはりダメだと考える。そして、携帯に手を延ばして白雪とある電話番号に電話をかけようとするが、いきなり電話を奪われそうになる。

「待ちなさいよ…キンジ！」

「話は後だ！それよりも、先に処理せねばならない事があるんだ！」

そう言つてキンジはフイアナに掴みかかるが、簡単に投げられてしまう。

その流れるような動作にアリアは賞賛の声をあげた。

「へえーなかなかやるよね？あんた、名前は？」

「名前を尋ねるならまず、自分から名乗るのが礼儀なのでは？」

フイアナの言葉にアリアは素直に頷くが、それを無視してキンジを引部屋に引き摺りこむ。

そして、お茶をいれると一人に正座をさせて話を聞き始めた。

「それで？今の状況を分かるように教えて貰えますか？」

「待て！勘違いだ！俺とアリアはそんな関係じやない！」

「キンジさん？私はそんな事聞いてませんよ？それに、キンジさん

も年頃ですから一人や二人で怒る訳ありません。ただ、事前に連絡を入れていただけると嬉しいだけ……」

話し方は丁寧だからそれに反して目が全く笑っていない。
その雰囲気にアリアはキンジに耳打ちで尋ねた。

「だ、誰なのよ？あれは？」

「フィアナだ。同居人で通信科Vだし、あいつを奴隸にしたらどうだ？」

「通信科……それなら、あんた達一人とも……」

「フィアナ！あんたも私の奴隸になりなさい！」

アリアの言葉にフィアナは理解出来ず首を傾げた。

「奴隸……ですか？遠慮させて貰います……その……そういうのに他人を巻き込まないで下さい。明日から私とキンジさんは赤の他人！話しかけないで！」

冷たい視線をキンジに浴びせるフィアナだが、内心はチャンスという思いが大きかった。

ただ、直接関わり合いになるのだけはあの時の二の舞になるかもしれないという思いがあるのだが、それだと公安の思つ壇になるのは癪に障る。

「おい！誤解だ！俺は潔白だ！」

「さつき、廊下で裸の神崎さんに抱き付かれてましたよねー変態ー」

「なんで、私の苗字知ってる訳? キンジはアリアとしか言つてないわよね?」

その言葉にフィアナは内心動搖するが、表情にはまずに笑いながら答えた。

「学友の顔と名前くらい入つてますよ。」

「けど、あんたは今日学校で教室に来てないわよ?」

フィアナはアリアの言葉に返答を迷つが、溜息を吐くと一言だけつげた。

「ですが、学校で色々してましたから……チャリジャックの件についても調べてましたし、然るべき報復の後に法によつて裁かせて頂こうかと……」

その言葉にアリアはフィアナを睨んだ。

「つまり、私が犯人と言いたい訳?」

「あくまでも可能性の話です。貴方の過去についてです……
「巫山戯無いで! あれは冤罪よ!」

アリアはフィアナに掴みかかるが、フィアナはたんたんと告げる

「まあ、それは置いておき、晩御飯にしましょうか……アリアさんもどうですか？まあ、キンジさんはドックフードでよろしいですね？」

ただ、聞き捨てならない事を聞いたキンジはフィアナに恐る恐る尋ねた。

「なあ、俺がアリアより下なのはなんでだ？」

「えつ？当然じゃないですか？奴隸＝人間の尊厳を放棄した犬畜生なんですよね？」

フィアナの言葉にキンジは固まるが、この後弁解するも、フィアナは信じる気配は無かつた。

そして、なし崩し的にアリアが不順異性交友をしないに限りここに住む事をフィアナが許可するのだが、それがこの部屋での順列がフィアナ アリア キンジと決定した瞬間だった。

新たなる同居人（後書き）

感想待つてます。

バスの中心で不幸と叫ぶ

アリアが押しかけてきて2日が経つが何事も無いまま日々が流れている。

ただ、その日は運悪く最後のバスに乗ってしまいます。
それが、地獄への片道切符だとは知らずに……

「あれ？珍しいな！ フィアナがこんなギリギリなんてな！ まあ、キンジは乗り損ねたけどな！」

たまたま乗り合っていた武藤に存在を気付かれてしまう。フィアナ自体、距離感の掴みにくい武藤のようなタイプは苦手としており、あまり自分から話したりはしないのだが、日本という訳で黒髪が多い中ではどうしても銀髪が目立ってしまうのだった。

「私だって色々と忙しいんですよ…… 通信科は鉄火場には出ませんが各方面と連携して隨時情報を更新しなければなりませんから……ふあ～…… 昨日はあまり寝てないので話しかけないで下さい……」

そう言って小さく欠伸をして見せるフィアナに武藤は若干、顔を赤らめながら謝った。

「悪いな！ それより、この前のサボリ先生怒つてたぜ？」

「仕事ですから…… 私はなぜか外部にも回されて大変なんですよ…… 事後処理もして置かなければなりませんから……」

そんなわいな会話をしているとバスの一画で突然、騒ぎが起こる。

その騒ぎが尋常では無い事を感じ取つた武藤はその女生徒の方へ向かうがフィアナは相変わらず小さな欠伸をして近くの棒によりかかっていた。

「このバスには爆弾を仕掛けやがりました！十分起きに3km増やさないと爆発します！」

チャリジャックの時に聞いた某合成音声だった。

フィアナはその音声に先程まで演じていた眠気を払うと盛大な溜息を吐いた。

そして、カバンに常備してあるインカムを使い、先んじて用意しておいた秘匿回線を用いて通信科にいるであらづ中空知に連絡を取つた。

「フィアナさん！今、どこにいるんですか？教務科が探してましたよー！」

中空知の言葉に頭を抱えてしまう。つまり、このバスジャック事件はそれだけ大きな事件なのだ。ただ、こうなると上の判断を仰がずに独断で動ける事が唯一の救いだつた。それに加え、犯人の可能性がある人間のリストからほぼ犯人を特定する事にも成功した辺り、犯人側は此方を舐めているのだろう。

「残念ながらバスジャックの車内です。お願ひがあるのですが、救出に来る人間と通信を繋いで貰えますか？それから、今、学園内にいる生徒の名簿を用意しておいて下さい。」

「通信に関しては了解しました。しかし、名簿ですか？」

中空知が首を傾げているのが声で分かるとフィアナはインカムに力

を込めて告げた。

「やり方がキンジさんがあつたチャリジヤックと同一です。確かに同一犯以外の愉快犯の可能性もありますが、神崎アリア及び、遠山キンジの身近な人間が犯人と考えるのが妥当でしょう。何より、このバスに遠山キンジが乗り損ねているようですしね。」

「ですが、それが必然では無く、偶然なようにも感じますが……」

中空知の疑問も最もだが、そんなもの可能なのだ。内部犯なら、キンジの時計の時間を狂わせるなど容易いはずなのだ。

「ですが、調べたという事実は犯人への牽制になります。私はこれより爆弾の撤去を試みますので、そちらでの補助をお願いします。」

そう告げると、カバンの中に入っていたロープを柱に結び、窓を開けた。

開け放たれた窓からは雨粒が入つて来てフィアナの顔に当たる。

「おい！ フィアナ！ 何するつもりだ！」

「私が爆弾の撤去を試みます！ 減速すると爆発する以上、スピードを増やし続けなければなりませんが、雨で道が濡れています。その意味を車輌科の武藤さんなら理解出来るでしょー！」

自身で爆弾の撤去を試みようとするフィアナを止めようとするが、この雨でスピードを出し続けるとなると、いつスリップにより転倒して爆発してもおかしくないのだ。その意味を理解すると、武藤は頷くと運転席の方を目指した。

「分かった！ 運転の方は俺に任せろ！ 時間は最大限に稼いでやるー！」

武藤の言葉を合図に雨が冷たく降り注ぐ世界へとフィアナは身を投げ出した。

そして、バスの底を覗き込むと確かに爆薬が存在した。しかし、それは繩をつけたまま入り込める場所になど無かつた。

「爆薬の種類から判断して、チャリジャックと同様です。ただ、バス一台の爆破には余りある爆薬量のようです。」

たんたんと中空知にフィアナはインカムを通じて事実を告げて行く。

「もうすぐ、神崎アリア、遠山キンジ、レキさん三人がバスジャックの救出に到着するは……」

そこで、インカムからの通信は途切れた。咄嗟に体を捻つてかわしたのだが、チャリジャック同様にIMエウージーによる銃撃を受けたのだった。

その銃声にバス内の生徒は慌ててフィアナのロープを引っ張りあげるが人の重さなど無く途中で何かに切断されているだけだった。

「フィアナさん? フィアナさん! 聴こえるなら応答願います!」

中空知は必死に呼びかけるがインカムからは雑音が聴こえるだけだつた。ただ、最後に聴こえた音がIMエウージーによる銃撃だった以上、解体に移ろうとした際に……

そう、頭に過るともう一方の通信から応答が入った。

「さつちで何かあったの？」

通信科の慌ただしい状況にアリアが質問をする。
それに対して、中空知は事実のみを告げた。

「単身で爆弾の解体を試みていたフィアナ シュトレーゼとの通信
が断絶しました。最後に聴こえた音から判断するにエムエウージー
による銃撃を受けたと考えられます。」

「おい！フィアナは無事なのか！」

同居人として短い時間が過ぎてしている以上、キンジは心配になり
中空知に尋ねるが中空知からは沈黙以外には
帰つて来なかつた。

「落ち着きなさいキンジ！死んだと言わない以上は死んでいない可
能性もあるわ！なら、より一層迅速な行動が必要になるわよ！怪我
人の救出も加わるんだから！」

そう言って雨の降りしきる中で、アリアとキンジはヘリからバスへ
と降下していく。

バスの中心で不幸と言ふ（後書き）

感想待つてます！

哀しみの雨の中で

アリアとキンジがバスに乗り移る少し前に遡る。

「はあ……はあ……もう少しで漬れてたわ……」

ファイアナはロープを切られるも、なんとかバスの車体にしがみついていた。しかし、次の銃撃がある以上はそこで休んでいる訳にはいかない。インカムを失った以上は外部からの情報は遮断されてしまった。ならばこそ、一人で状況を開けるしかなかつた。そして、雨で張り付く髪を避けると姿勢を変えて車体の下を再び確認する。今度は位置のみの確認の為にすぐに起き上がる。そして、そこで違和感に気付いた。

「無い…………髪留めが…………」

先程の銃撃をかわす際に、外れてしまったのだった。安物のビーズで出来た髪留めだったが、ファイアナと“彼女”を繋ぐ最後の品だった。探しに行きたい気持ちが頭を支配しようとするが、打ちつける雨がファイアナを現実へと引き戻すのだった。冷たい雨が頬を伝い、零れ落ちる。それは徐々に量を増していくた。

「なんでかな…………いつも、私の手からは大切なモノが…………守りたいモノが零れ落ちる…………本当…………何してるんだろ…………」

そんな言葉と共に囁いが込み上げて来た。いつまで経っても何も変わっていない自分自身に……ただ、唯一違うのは隣に誰もいない事だろう。しかし、その背中にバスの乗客の命を背負っている事に変

わりは無かつた。そして、決心を固めると狭いバスの車体の裏へと侵入する。少しでも気を緩ませれば、頭を道路に強く打ち付け死は免れない。そんな状況の中なのだが、余計にフィアナの心は落ち着いていた。死という明確に存在する終わりがフィアナの頭に対して冷却剤として働いているのだった。

「まずは、配線を……」

口にペンライトを咥えて配線を確認して行く。一瞬の気の緩みが死に直結する状況で、行動一つ一つに息を飲みながら慎重にこなしていく。ただ、このような状況に慣れている筈の心臓は張り裂けるほどに鳴り響き、手からは冷や汗が止まらなかつた。そして、配線を確認して終えると片手で鍼を持とうとする。しかし、突然の車体の揺れの際に解体ように持っていた鍼をなんとか掴む事が出来た。しかし、その際に無理な体制の変更で右腕を道路に押し付けてしまい、右腕は血塗れになつていた。フィアナはなんとか鍼を掴み取り体制を立て直すが、血塗れになつた右手が活動に対して支障を来たすか判断する為に解体作業を中断した。本来なら、車体の裏から出一度、応急処置を施したい所なのだが、ここから這い出ると絶好的以外に他ならない以上はここで出て行くよりも作業を続行して解体を終える方を選んだ。

「右腕を負傷したのは痛いわね……神経は無事だけど、握力が弱まつてる……出る時も一苦労しそうだわ……完全に時間との戦いね……」

フィアナの言葉に誰も返しはしないが、時間が経てば立つほどに流れ出る血によつて体力が奪われて行く。細心の注意を払わなければならぬ解体作業にとつてそれは命取りだ。その上、時間が経てばこの体制を保つことすら難しくなるだろう。決心すると、右手で鍼

を持ち迅速に配線を選択して切断して行く。ハリーアップに仕掛けは変更されているが爆弾の基本構造は同一の為に問題なく解体が進むように思えた。

しかし、神はフィアナを味方しなかつた

「えつ？」

フィアナの口から漏れた言葉と共に鍔が右手から零れ落ちたのだ。流血により緩んでいた握力が限界に達したのだった。そうなると、体制を立て直すのは難しくなる。右腕を使えない以上、

身体を左手で支えながら脱出しなければならない。解体直前の最後の一本の赤いコードを切れず脱出する自分に苦虫を潰したような表情になってしまふ。

そして、なんとか脱出して車体の屋根に手を伸ばし、掴むが再びエミウージーの銃撃により体制が崩れて手が滑り離れ地面に飲み込まれて行く。いつもの自分ならなんて事のない作業の筈だった。そんな事を思いながら、血塗れになつた右腕を無理やり動かしてナイフを車体に突き刺す。

「まだ……まだ、死ぬ訳には行かないんだよー。どんなに生き恥を晒
そうが……」

そう叫ぶと、怪我により震える右腕を酷使して再び屋上に手をかけたのだった。

哀しみの匂の中へ（後書き）

感想待つてます！

繋がれた手

だが、血に濡れている手は屋根から滑り落ちてしまう。そして、フイアナはゆっくりと地面に飲み込まれて行こうとしていた。

「間に合つた！」

そう言つてフイアナの右腕を掴んだのはキンジだった。

骨に異常があるのか、徐々に脳内麻薬の分泌量が減り現実へと帰還するとキンジに掴まれた右腕に激痛が走った。

キンジがフイアナをひっぱり上げるとアリアは一言だけつげた。

「ここからは私達の仕事よ。あんたは引っ込んでなさい。」

アリアの言葉に右腕の状況を確認して戦力外である事を実感する。だが、フイアナはアリアの言葉を無視して右腕に応急処置を済ませるとアリアに尋ねた。

「断ります。一度関わった以上は、最後まで関わらさせて貰います。それで、インカムを貸してもらえますか？」

フイアナの答えに納得がいかない様子のアリアだが、何も言わずにフイアナにインカムを手渡した。

それを受け取ると、待機のレキ、通信科の中空知に回線を開く。そして、通信が繋がったのを確認するとフイアナが状況を説明し始めた。

「美咲さんー救急車の手配をお願いします。」

「わかりました。念の為に衛生科の人間を配備して置きます。それより、大丈夫なんでしょうか？IMIウージーに撃たれたようですが……」

中空知の心配に右手を軽く摩るとフィアナは笑ながら答えた。

「大丈夫よ。銃弾による怪我では無くて、爆弾解体の際に体制を崩して地面に押さえつける形になつて右腕に擦過傷を負つただけですから……本当に面白ありません……それで、状況なのですが、爆弾はハリー・アップとなつており、濡れた路上ではいつスリップして転倒、爆発という流れになるか分からぬ為、時間があまり残されていません……ただ、解体は後一步の最後の配線で止まっています。爆弾の量からバスだけでなく周囲にも危険を及ぼす可能性があります。」

フィアナの説明を聞いてアリアは動き出そうとするが、それをフィアナが止めた。

「私がその最後の配線を切れば終わりじゃない？それで終わりですよ？」

「それよりも、先にあの無人自動車に乗ったウージーをどうにかすべきかと……」

先程からフィアナは何度か銃撃を受けている無人自動車を指差した。

「あの自動車を潰さなければ乗きやー！」

パンといつ音とともにバスが傾く。

その数瞬の間にバスのタイヤがパンクした事を悟った。

「おい！不味いだろ！パンクなんて！」

キンジだけでなく、アリアの表情にも焦りが見え始めた。

つまり、時間は数分……いや、一分もないかもしれない。その短時間で爆弾解体を行わなければならなくなつたからだ。ただ、唯一の救いはファイアナが先行して殆んど爆弾解体を終えており最後の配線を切るだけだという事ぐらいだろう。

ファイアナはそんな状況に頭をフルに回転させてこの危機的状況を開する為の手段をリストアップする。一番安全なのはレキによる狙撃ではあるが、爆弾を吹き飛ばして爆発させると他のモノを巻き込まないとも限らない。そうなると、現状ではアリアの言うように潜つて最後の配線を切るというモノだつた。色々と問題は山積みだが、やらなければ助けられない以上は、ファイアナも休んでいる訳にはいかず、怪我をしている右腕にムチを打ち立ち上がるのだった。

「遠山さんは、右手に無人自動車が来た場合に備えて下さい！私は左手を守ります！」

「おい！お前、右手使えないだろ！」

キンジはファイアナの怪我を指摘するが、ただファイアナは笑うだけだった。

「時間も無ければ、余裕もありません！なら、怪我人だらうが関係ないんですよ。アリアさん援護します！」

そう告げると左手でS&W M686を抜き取つた。そして、接近する無人自動車のタイヤに向けて発砲するが片手では不安定で上手く的が絞れず僅かに目標を逸れてしまう。

それだけでは無く、車体の下は大きな問題が発生していた。

「嘘でしょ！人が入れる隙間なんて無いじゃない！」

フィアナが入れたのは片側のタイヤがパンクしていなかつたからだ。しかし、パンクしてしまい車体の高さが低くなつてしまつた以上は上手く人が入れるスペースがなくなつていた。

「おい…どうする…時間無いぞ…」

キンジ達は焦りで思考が上手く回らなくなる中でフィアナはレキへと通信を繋ぐ。

「レキさん…狙撃で残つてている赤いコードだけを切れますか…」「私は一発の弾丸…射程にさえ入れば可能…」

レキの言葉に頷くと武藤に繋いだ。

「何かようか！フィアナ！」

「車体を浮かせられますか！パンクで解体が出来ないんです！」

「待て！浮かせられたとしても十数秒が限界だぞ！」

フィアナは武藤の言葉に叫んだ。

「今はそれしか方法がありません！選ばずにここで爆死するか、私を信じるか選んで！」

「くそったれ！タイミングはそつちに合わせるぞ…これで、俺も晴れて免停だぜ！畜生！」

そう叫ぶと武藤は運転手から運転を変わつた。

同じ頃、アリアが屋根に上がつて来る。

「不味いわね！爆弾を解除出来ない！そつちは！」

「神崎さんは左側をお願いします！合図をしたら、一人ともしつかり何かに捕まつていて下さい！」

そうファイアナは叫ぶとビルとビルの間から見え隠れするヘリとバスの間に存在する弾道を逆算してタイミングを測る。

チャンスは一回きりだ。本来なら博打以外の何物でもないが、類稀なる射撃センスを持つレキなら可能だという確信がファイアナの中に存在していた。

「今です！」

ファイアナの合図で車体が傾いて行く。

「私は一発の弾丸……」

レキの持つドラグノフ狙撃銃がその咳きと共に火を吹いた。

そして、その銃弾は真っ直ぐに赤いコードを切り、道路へと着弾する。

しかし、バスはそのまま横転してしまった。

「はあ……奇跡的に重傷者、死者は共に無しつて訳……」

アリアが呟くとキンジも頷いた。

実際に今回の事件は一つ判断を間違えれば誰一人助かつてはいなかつただろう。

その点でアリアはフイアナの状況判断能力を評価していた。

ただの通信科と侮っていた評価は既に訂正されており欲しい手札に加えられていた。

ただ、アリアやキンジがバスの横転で負傷した傷の応急処置を受けている間にフイアナは姿を消していた。

しかも、誰も応急処置をしていないというのだ。そして、その後近場の病院を片っ端から調べるがフイアナが治療を受けたであろう病院は見つからなかった。

繋がれた手（後書き）

感想待っています

救護科の治療を受けられなかつた理由は後々明かされます

闇に潜む者達（前書き）

私はこの暗い路線で進む事を決意しました。
完全に禁書のアクセラレータみたいなキャラに憧れます。
まあ、木原が好きなんですがwww

間に潜む者達

フィアナはキンジとアリアが治療と報告をしている隙に事件現場から逃走していた。

本来なら早急に治療が必要だが、現在のフィアナには身分証が存在しない。あるのは架空の名義のみで、それを偽造と判断されるのは“あいつ”的にも不味かつた。二人を繋ぐ髪留めは失われたが、絶対に見捨てる訳にはいかなかつた。

そして、右腕を押さえながら路地裏に入ると壁に寄りかかっている場所に通話する。

見てたんだろ！医者を寄こせ！」

—衛生科で治療を受けねばいいかと

巫山虚るな！分かって言つてんだぞ！今の俺には奥分が存在した
いつてな！」

苛立ちを紛らわす為にファイアナは近くのゴミ箱を蹴飛ばした。

「受理しかねます……では、通信を遮断します。」

その機械的な声はそれを持つて聞こえなくなつた。
それを合図にフイアナは壁を滑り落ちる。

卷之三

死ねってか？ああ！糞が！まだ……まだ、死ねないんだよ！あいつを救うまでは……」

自分の立場を嘲笑つと、頬から自然と涙が伝つて来た。

持つていたS & amp; W M686を頭に突きつける。

そして、引き金を引いた。

「ツイでねえ……弾切れかよ……」

「あら？ ついてるわよ？ まだ、生きられるんだから」

「博愛か……何をしに来た？ 嘲笑いにか？」

路地裏に現れた白衣には見向きもせずに、ドンよろと曇った空を見上げる。

そして、雨が体温を奪つて徐々に体温が下がる中で痛みだけが自身の存在を告げていた。

「あんた……これ……右腕使い物にならなくなるわよー。」

右腕の状態を確認して博愛はフィアナに叫んだ。
だが、フィアナは騒うだけだった。

「あいつはあんたを待つてんじゃないの？ なのに、こんな所でくたばつていい訳？」

「本当に奴らがあいつを生かしてると思つか？」

その言葉に博愛の治療の手が止まる。

確かに、可能性は低い。ここは死んだと考えた方が楽だ。

唯でさえ、今の公安のTOPは容赦無いのだ。否定出来る筈が無かつた。

「………… 繆乱は筋は通すが、あいつは飛ばされた…… 殆んど叶う見込みの無い儂い妄想だろ…………」

「一応、治療は済んだわ…… 骨には異常は無い…… 包帯を定期的に変えて消毒することよ…… それに、まだ死んだと決まつた訳じやないなら最後まで諦めない方がいいわ…… 諦めたらもう戻れなくなるわよ」

それだけ告げると、博愛はフィアナに見向きもせずに消えた。フィアナはその後、ゆっくりと立ち上ると寮では無く、ノロノロと武僧高を田指すのだった。

「それで、報告は以上なんだな？」

バスジャック事件に関する報告を聞いた逆辻は大声で笑い出した。

「また、生き残りやがった！だが、そつ何度も生き残れると思つたよ

「あ、あの…… 例の件は、彼女に伝えないとしようつか？」

逆辻に女性捜査官である叶が尋ねる。

すると、逆辻は叶の頭にコルトバイソンを突き付けた。

「ああ？あいつは社会の『ゴリ』なんだよー。『ゴリ』をどう使い潰そうが俺の勝手だろ？最期に絶望する様を見せてくれるんだろうなー…それで、何か言つたか？」

「いえ！何も」

「そつか……良かつたな……俺の部下だとお前、死んでたぞ！」

笑いながら銃を退ける逆辻に叶は恐怖した。

目の前の男が気まぐれを起こさなければ、ここで叶は死んでいた事を理解したからだ。

もしも、情から繚乱の知人である博愛にフィアナの治療を依頼した事が知れれば確実に命は無いだろう。

それを確信すると、何も言わずに自分のデスクへと戻るのだった。

「大丈夫ですか？叶さん？」

同期の加藤が先程の様子に心配して話しかけて来る。

半年前のとある事件で繚乱が左遷されて以降、誰も逆辻に逆らえないのだ。

叶や加藤がここにいるのはただどの派閥にも属していなかつたからに過ぎない。

「ええ……少しね……彼女はあの子が死んだ事を知らないまま使い潰されると思うと……」

「フィアナ シュトレーゼ……純血の暗殺者ですよね……腕だと繚乱さんと互角だとか？それを逆辻が火力と兵力を用いて鎮圧した……本来なら被害が小さかった筈なのに……それを全部繚乱さんにな

すりつけて……

加藤の言つ事は事実だつた。

だが、それを口にするのは自殺行為でしかない。誰にも聞こえていない事を確認すると加藤を睨んだ。

「死にたくないなら余計な事を言つるのは慎みなさい。」

加藤に忠告すると、廊下に出た。

廊下に出ると力強く壁を殴りつける。

何も出来ない自分を呪い、ただ強権にへつらつ自分に腹が立ち……

闇に潜む者達（後書き）

感想待つてます！

「コレタ人形のワルツ

「ここにちわ」

「フィアナが通信科に訪れる中、空知が振り向いてその怪我に驚く。

「その怪我！なんで、入院しないんですか！」

「病院は嫌いなの……それで、ファイルは？」

フィアナが言葉に少し出し渋るがすぐに手渡した。それをパラパラ捲るとそれを机に投げた。

そして、自らの椅子に座ると何処かへ電話をかける。

「もしもしし？峰さん？フィアナです……少し相談があるのですが、今日の夜お会い出来ないでしょ？」

「えっ？う、うーん。その時間は用事が……」

「お耳に入れておきたい情報もあるんですけど……まあ、その時に話しましよう。来なければ後悔しますよ？」

それだけ告げると、峰の返答を待たずに切る。そして、S&W M686を取り出すとそれを机にしまい、新たにレイジングブルを取り出した。威力だけならレイジングブルが上だが携帯する事を考えるとM686の方が好きなのだが……

それを腰に収めると通信科の出口へと向かった。

「ああ……美咲さん？一つお願ひしても宜しいでしょうか？」

「なんですか？」

「多分、ここに神崎アリアが来ると思ので彼女の応対は任せます。私は彼女に会うつもよりも話すつもよりも無いので取り繕がないで下さ

いね？

中空知には何故かその背中が何処か遠い場所に見えてしまった。

「じゃあ、 もよつなり…… なんてね」

そう告げるとフイアナは暗い廊下へと姿を消した。

夕闇に街は染まり始める。

そんな夕闇の中でフイアナは一人、 ホテルの一室の椅子に腰掛けていた。

椅子はちょうどリアに向けられており、 それに寄りかかりながら鼻歌を歌う。

そんな事をしていると、 突然部屋の扉が開いた。

「フイー！ 私だって忙しいんだよ！」

「すいません。 わざわざ呼びつけてしまつて……」

そう告げるとフイアナは峰理子に椅子に座る事を勧めた。

そして、 座った事を確認すると理子の頭にレイジングブルを突きつけた。

「あの？ フィーー？ なんなかな？ これは？」

「なんだと思いますか？」

「じゅ、銃です……」

いきなり頭に銃を突きつけるという予想外の行動を起こしたフィアナに峰は慌てふためく。しかし、フィアナは冷静に引き金に手をかけた。

「わざわざ呼びつけたのは、貴方が指定した場所だと黙がある可能性があるからですよ？ 武偵殺しさん？」

フィアナの言葉に理子の纏う雰囲気が変わった。

「いつ気付いた？ お前は私が武偵殺しだって！」

「神崎、遠山……彼らを観察し過ぎて注意を怠りましたね……今日のバスジャックの際に貴方は学校に居なかつた……」

「それは証拠にならない筈！」

「そうでしょうか？ 私からすれば貴方が犯人だと分かれば証拠など必要ないでしょ？ 私達の世界はそんな世界の筈ですよ？ ああ、これは4／5で弾ができますから精々、神に祈りなさい？ そうしたら、もしかしたら助かるかもしませんよ？」

そうして、フィアナは表情を変えずに引き金を引いた

「弾がでなかつた……」

その場に倒れ伏せる理子にフィアナは一言告げた。

「空ですよ？ 最初から弾なんて入つてませんから」

「騙したなー私を！」

自分がフィアナの手のひらに居た事が気に食わないらしく理子はフィアナを睨みつける。しかし、フィアナはあまり気にした様子を見せなかつた。

「お前? 何者だ!」

「貴方方と同類……いや、貴方方が見ている世界よりも腐つた世界にいる人間ですかね……?」

相手の出方を確かめようとする理子にフィアナは溜息混じりに告げた。

「ああ、神崎アリアに関しては私は関わる気はありませんし、殺して構いませんよ?あの手の馬鹿を見ると腹が立ちますから……それに、キンジさんにもいい勉強になるでしょう。」

「意外だな……誰かを殺すのを躊躇わないので?」

レイジングブルを机に置くとフィアナは一言だけつぶやいた。

「私は生きていませんから、生者がなにをしようが興味はありません……ただ、眩しいだけですから」

「あははははははは……それじゃあ、キー君といふのなんて針の山を歩くような物じやない!」

「そうですね……死ねたらどんなに楽か……」

フィアナの眩きに峰は笑うのを止めた。
そして、フィアナに尋ねた。

「イーウーに来ない?」

理子自身、なぜそんな事を尋ねたのか分からぬ。

ただ、その言葉が後々に一つの悲劇を招くとはこの時誰も予想していなかつた。

「まあ、考えて置きます……犯人も判明しましたしここからは傍観者とならせて頂きますので停戦という事で」

「つまり、互いに何も見ていないし、何も知らない」と？」

その言葉にフイアナは深く頷いた。

「コレタ人形のワルツ（後書き）

感想待つてます！

ハイジャックの裏で

「はあ、今日の“仕事”も終わりですね」

峰との会合から数日が経っているが、右腕には未だに違和感が残つていた。

ただ、左手に持つナイフからは血が滴り落ちているのに対して、服に一滴も返り血を浴びていない辺り全快には程遠いが支障が無い事が見て取れる。

ナイフから垂れる血を拭き取ると、真っ赤に染まる水溜りにその赤く染まつたハンカチを投げ捨てた。

「お疲れ様……って、言つべきじゃないわね……」

「死にに来たの? 叶?」

そう呟くと何時の間にかフィアナは背後から叶の首にナイフを突き付けていた。

しかし、すぐに解放すると僅かに滲み出てナイフに付着した叶の血を舐め取る。

「やつぱり、やめね……」ここであんたを殺してもつまらないもの

まあ、そこで転がるクズどもと一緒になりたいんなら話は別だけど?
?」

フィアナはそう呟くと血の海に漂う臓物と肉片の山を指差した。
その光景に叶は吐き気を催す。

それと同時にこの異様な光景の中で普通に笑つて見せるフィアナの異常性に恐怖心を抱かずにはいられなかつた。

「じゃあ、私は帰りますね？」

そう告げて雨の降る屋外へと出ようとした所で立ち止まつた。

「まだ、何があるの？」

吐き氣を必死に抑えながら叶はフィアナに尋ねる。すると、フィアナは一言告げた。

「肉片一人追加か……」

そう呟くとナイフを収めて一気に見えない敵に向けて走り出した。

「フィアナ先輩が人殺し……夢よね？こんなのだだの夢よね？」

一年の門倉 愛紗がこの場に居合わせたのは偶然だった。

たまたま、単位集めで受けた依頼がこの近くで、何やら怪しい人物を見掛けて正義感で着けてしまつっていたのだ。そして、この光景に出来喰わしたのである。

台風が近付いており、雨が徐々に強くなる。そんな中で愛紗は必死に逃げていた。

追いつかれれば殺される

あそこに転がっていたアレみたいに！」

ただ、愛紗は一つ氣になつていていた事があった。

フィアナ先輩の近くにいた女性の服が公安の物だつたといつ事だ。しかし、今はそんな事を悠長に考えている余裕などある訳が無く、必死に前へと足を進めた。

けれど、足を滑らせて転んでしまう。その際に足を捻ると、つ運の悪さだ。

「まあ、よく逃げたわ…………」

その言葉が背後の闇から聞こえてきた。
愛紗は必死に体を引き摺りながら前へと逃げようとするが、フィアナに踏みつけられる。

「まあ、運の悪さを恨むのね…………」

そう叫びると、愛紗の頭に「M&M」を突き付けた。

そして、正き金に手がかけられる。

だが、神は愛紗を見捨てなかつた。

突然、場違いな最近の電波ソングと呼ばれる類いの着メロが響き渡る。

逃げ出した鼠を捕まえて、処刑しようとした所でフィアナの携帯が鳴り溜息混じりに着信を拒否しようとした所で手が止まる。何か第六感めいた物がそれに出ると告げていた。

そして、電話に出ると何やら言い合いが聞こえてくる。

『羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ。』

『俺あ武藤剛気、武偵だ！！600便は燃料漏れを起こしてる！！飛べて、あと10分なんだよ！！代替着陸なんてどっこにもできねえ、羽田しかねえんだ！！』

その意味が理解出来ない言い合いでいきなり参入させられたフィアナは頭を抱える。

『防衛大臣ねー……てか、ここからなら羽田空港まで三分だから自衛隊を無力化すればいいの？それとも、防衛大臣を失脚させる？』

フイアナの物騒な発言に一瞬、場が凍り付く。
そこへ追いついて来た叶から携帯を取り上げると記憶していた番号に電話をかける。

『はい！えつと、まあ……自己紹介はいいわね！命令よ？自衛隊を引かせなさい』

『貴様！誰だ！私は』『賄賂に、汚職、根回し、政治家って大変ね？叩けば埃が出ちゃうわ！』

『そんな脅しには屈しない！』

『なら、まあ……いか！今からあんたの首を飛ばすから！..』

『何を！』

『まあ、いいじゃない？乗客を殺した最低最悪の大臣になるのよ？良かつたわね！』

『もしも、あの飛行機が東京で墜落したら大惨事だぞ！それを理解しているのか！』

『まあ、確かに言つてる事は正しいけど……命は足し引きじゃないわ……まあ、政治家としては正しかもしないけど助かる可能性がある人間を見捨てるのは最低の屑野郎よ！あの飛行機の中で今も生き残ろうと戦っているわ！なのに、あんたは最初から逃げ出す訳？あんたは本当に人間の屑だったようね……』

そつ告げると防衛大臣との通話を切った。

そして、フイアナは武藤の開いた回線にこいつ告げる。

「私を信じてそのまま羽田空港を田指しなさい！私が羽田を開港させやー！」

そう告げると、フィアナは叶の車にあつた端子から大臣の通信網を乗つ取り、嘘の命令を流す。
そして、その回線を数時間は使えないよつて封じると運転席を指差す。

「せつせと、羽田に急ぎますよ！…それから、そこの人？もしも、バラしたら貴方がバラバラになりますからね？」

叶はフィアナの促しに、愛紗を放り出して車を出した。
少し進むと、叶は運転をしながら横目でフィアナを睨んだ。

「貴方！自分のやつた事、分かつてるの？犯罪よ？」

叶の言葉にフィアナは溜息を吐ぐ。

「あなたはあのガキを死なせたくなかつた！私は、飛行機を墜落させたくなかつた！それだけですが？」
「つまり、見逃せって？あの子を見逃した見返りに……」
「まあ、悪くない取引ですよね？」

叶はその時、逆辻の言つていた事を告げよつとしたが、躊躇つてしまつた。

もしも、この子を繋ぎとめる最後の一線を切つてしまえば悪い予感しかしなかつたからだ。

「どうかしましたか？」

「なんでもないわ……時間も余り無いし飛ばすわよー。」

そう告げて誤魔化すと腹を探る様にフィアナは見詰めるが何も無かつた様に前を向いた。

銀の狼が見た夢

「間に合つたわね……どうするの？」

羽田空港に着くと飛行機が離着陸する光景が見えて来た。だが、フィアナは助手席から降りようとしなかった。

「行かなくていいの？心配だから来たんでしょう？」

「私にはあそこに入る資格はありませんから……」

そう呟くと、フィアナはジッと自分の手を見詰めた。

「私は“あの子”の為に全てを諦めた……なのに、彼処で笑う資格なんて存在しない……」

それに、こんな血塗れのワタシが彼らの前に立つなんて無理なのよ……

「……」

その言葉に叶はハンドルを握り締めた。

何も言う事は出来ない。

守りたかった少女すら既に本当はこの世にはいない……

ただ、利用されて潰される消耗品……

そんな、フィアナの在り方がどうしようもなく悲しかった。

「今なら……分かるわ……あの子が夢を見ているようだつて言

つた意味が…………私にはあの場所に立つてると本当にコメを見て
いるみたいに思えるから…………早くこんな残酷なコメなら醒
めて欲しい…………

雨が窓ガラスに当たる音だけが響き渡る。

「ねえ？なんで……そつまでして歩み続けるの？」

僅かに口から零れた叶の問いにフィアナはこいつ答えた。

「私が諦めたら終わりですから…………あの子は私を信じて待つている
筈なのに、私が諦めていい訳がないじゃないですか…………」

無事に飛行機が着陸したのを見届けると、フィアナは車から降りた。

「会いに行くの？」

その言葉に静かに首を横に振る。

「少し、雨に打たれたいだけです…………雨が枯れ果てた私の代わりに

泣いてくれますから……さつき、貴方は私を化物みたいに見てましたよね……なんの感情も抱かずに入を殺す私に……」

「違う！私は」

「それで良いんです……私は血に溺れた化物ですから……ヒトの力が被つたね……」

だから、貴方はそれでいいと思います——ただ、忘れないで下さい……その甘さも優しさも他人を傷付ける刃になる事を……」

そう呟くと豪雨の中にフィアナは消えて行つた。

残された叶はただ、握りこぶしを作りハンドルに叩きつける。無力な自分が嫌になり……

誰かを救いたくて公安に入った筈なのに

目の前でボロボロになっていく人間に何もしてあげられない現実に確かに、全てを救うなど不可能だと分かっていた。

命は足し引きじゃないのも理解していた。

ただ、そんな現実に慣れていく自分が堪らなく嫌だった。

「ユメなら醒めて欲しいか……」

豪雨の中でフイアナは一人呟いた。
理解していた。あの場に居場所など始めからないと……
あの時、本当ならあの下級生を殺すべきだった。
いや、殺す事が正解だった筈だ。

「私はあの子を救う為に他の全てを諦めた……なのに、なんで見逃
しちゃうかな？本当に私ってバカだ……」

結局は、峰を見逃したのも下級生を殺さなかつたのも今の現実に未
練があつたからに過ぎない

見る事しか許されないユメの続きを
届かぬ空に手を伸ばすように……

惨めつたらしく執着しているのだ。

だが、武偵として有り続ければ有り続ける程に自分の口コロは口ワ
レテイク

たつた一つの……

薄い希望にしがみ付くと決めたあの日にそれを手放すと誓つた筈な
のに……

何より、そんな希望にしがみつけばより大きな絶望へと沈む事を理
解している筈なのに……

彼らが本当のフイアナを知れば蔑み、罵る筈だ

両手には他人の血が滴り、感情すら失つた上つ一面の仮面を被り続け
る殺人鬼……

「本当に私つてバカだ……届かないなんて分かつてん癖に……手を
伸ばせばもしかしたら……なんて、幻想を抱いてしまう……本当に

救い様がない愚か者だわ……

再び、電波ソングが着信を知らせるが、フイアナは何も見ずに電源を切った。

「ちゃんと、助かったのよね……」

今回の一件は未然に防ぐ事も可能だつた。

峰が犯人だと気付いた時点で潰しておけば……

そんな私が彼らにどう顔向けて出来るのか？なんと声をかければいいのか？

フイアナはただ一人、ネオンの中へと消えて行つた

銀の狼が見た夢（後書き）

多分、次のデュランダルに粉雪を先に出します。
感想待つてます

風の始まり（前書き）

粉雪登場！

なんか、どんどん靈行きが盛りへなっています。

嵐の始まり

フイアナは寝込んでいた。

台風の中、空港から寮までの長い道程を徒步で歩いたからなのだが、ここまで抉らせたのは、その後が大きかった。

部屋に辿り着くが鍵が無くなつており外で凍える体のまま野宿する事になる。

本當なら、隣の部屋からでもタオルを借りたりすればいいのだが、バレると色々と不味い事がありすぎるのぞそれすら出来なかつた。特に返り血は浴びていなが靴のルミノール反応を調べられあら弁解の余地はない。

まあ、そんなこんなでキンジが帰つて来た所で緊張の糸が解けたのか、倒れたのである。

もしもここが職場ならそんな一瞬の氣の緩みが命取りになる。

この平和な日常に緩みきつた自分に喝を入れると布団を覆い被せた。何やら布団の外の世界では銃弾が飛び交う戦場らしい……

頭がクラクラして何がなんだか分からなが、料理器具の賠償はアリアと白雪にしようと決めると、更に腰を落とし体勢を低くする。そんな中で携帯が鳴り響いた。

「やつほー！こんばんわ！あつ！そつちは朝か！元気？」

風邪で頭痛がする中で聞きたくない声がしたので即座に電話を切り着信拒否にする。

何の用なのが知らないが、あの繚乱にこの状態で関わるのは口クな目に遭わない。ただでさえ、体力が有り余る時ですら翻弄されるのだ。風邪でダウンしている時に関わるのは死にかねない……。そう考へると、電話の電源を切り、水分補給の為に台所へ向かう。

リビングに入った所で、アリアの弾が頬を掠めた。

その状況に、空気が凍りつき一同固まってしまう。ファイアナは真っ赤にした顔のまま作り笑みを浮かべる。

「貴方達？ 戦争なら他所でして下さい……」

突然、目眩に襲われて倒れそうになるが、キンジに支えられる。その様子に、白雪も怒りがどこかへ飛んで行き即座に土下座を始めた。

「『ごめんなさい！ ファイアナ先生！ 申し訳ありませんでした！』

その必死の土下座にアリアも興が削がれたのかコルトガバメントを収める。

「あんた……病院行きなさいよーそこまで酷いなら……」

「病院には行かなくて大丈夫です……」

そう言つと自力で立ち上がるとするがキンジに止められてその場で寝かされる。

そんな中で玄関のチャイムが鳴る。

そして、白雪が応対して戻つて来ると白雪の背が縮んでいた。

「田までおかしくなつたみたいですね……白雪さんが豆雪さんになつてしましました……これじゃあ、アリアさんといいフグふあ……」

横になつているファイアナの顔面に勢い良くポカリが振り下ろされる。

体調の悪いフイアナの顔面にめり込むとそれはフイアナね意識を奪つていった。

「それで? 粉雪は何の用で来たんですか? 星伽からは何も聞いてませんが?」

白雪の言葉に一度、礼をすると汚い物を見るような目でキンジを睨むと白雪に話し始めた。

「星伽の占いでお姉様に危険が迫つてると伝ましたので護衛です。」

「占いか~当たるの? 所詮、占いでしょ?」

目を覚ましたフイアナは占いと言ひ言葉に反応して白雪に尋ねる。初対面の時から超能力を否定しているフイアナを知っているだけに、白雪は苦笑いを浮かべるが粉雪は実家の威儀を守らうと必死に訂正を求めた。

「星伽はだいだい日本政府の吉凶を占つたりしてきましたよ! 所詮、占いではありません!」

「白雪さん……なら、サイロを振る前から出る目が分かりますか? それと同じですよ……それが出来るのは神のみの特権ですよ……」

諭すような口調で叫びかぶるフイアナに言い返したいが何を言い返せば

いいか分からず唸り始める。

「あの……義妹の粉雪です……」
「…………」

「あれ？白雪さんが一人？なんで？あれ？といつといつ頭がおかしくな
ったのかしら？」

白雪と粉雪の二人に正常な思考では無いフイアナはオーバーヒート
を来たす。
頭から湯気がで始めて、その場に倒れ込んだ。

「あんた、本当に大丈夫？寝てれば？」

流石に、このテンパリよつは普通ではないと判断したアリアとキン
ジはフイアナをベッドに運ぶとそこに寝せた。
ついでに、熱を測ると39度あった事に驚き、アリアがキンジに薬
を買いに行かせたのは余談である。

そして、寝静まつたフイアナのPCがメールの受信を告げる。
そこへ、偶然居合わせた粉雪がPCに映されたメールを見てしまっ
た。

件名　久しぶり

内容

よお！まだ、くたばってないらしいな！マジで死んでくれや！
そうそう！次の依頼であいつを解放してやるよ！

次の依頼は暗殺だ！

捕まれば一発アウトな仕事なんでこいつちじゅ出來ないんだわ！

分かつてゐよな？拒否すればあいつの命はねえぞ！

んじゃあ、せいぜい足搔けや！クソガキ！

そこに添付されていた写真はデータが破損したのかピンボケで誰か分からなかつた。

「誰か？いるのか？」

フイアナの寝言で慌てて粉雪はそのメールを閉じる。
そして、寝言である事を確認すると急いで退出した。

嵐の始まり（後書き）

ファイアナ シュトレーザ

装備

S&W M686 カートリッジで弾を持ち歩く場合、ある程度持ち玉を読まれる為メインになつている

ファイブセブン 滅音機装着と弾数、威力を考慮したサブ

脇差 淡雪 折れた日本刀を鍛え直した物

ナイフ 人を解体する為に使用する切れ味の鋭い物

スタングレード&M-18 常にスカートに装備

手帳 認証コードやサーバーの位置、通信網などについて事細かに書かれている

キヤラ設定

アリアや白雪のように血を引いた超人ではない。

だが、実力は折り紙付きで公安でも手を焼くほどの暗殺者候補だった。

母親は引退しているが、両親共に暗殺者の家系である。

半年前の事件まで母親が必死に守っていた為に裏の世界には関わらなかつたが、あの事件でそれが無駄に終わり逆辻により拘束される。その後、取引により事件の重要な参考人の解放を条件に拘になる。

実力は強襲Sランクと互角に渡り合える程。

だが、今は逆辻に対するカードを増やす為に前線ではなく通信科に在籍し、隙を伺う。

中空知とは仲が良く、話し相手になるが実は女装をしており、フイアナ シュトレーゼは偽名。

天秤の上に乗りしモノ（前書き）

粉雪介入しました。

因みに、フィアナは近接戦闘で出場させる予定

天秤の上に乗りしモノ

朝になり、キンジの買つて来た薬が効いたのか熱は引いていた。まだ、身体は怠いものの行動に支障は無い事を確認すると、メールを確認する。

すると、開いた覚えのないメールが開封済みになっていた。

「まさか……アリアさんに見られた…………そろそろ、潮時かもしれませんね…………」

そう呟くとピンボケしていた写真を復元していく。
そして、その写真を見て机を殴りつけた。

写真に写っていたのは遠山 キンジだった……

確かに、アリアとペアになつた時点で公安が危険視してもおかしくない。

だが、なぜわざわざこの程度の“小物”に公安では無くフィアナを使うのか……

答えは一つしか無かつた。

「俺か…………」

期間は短いが共有した時間がキンジ達との壁を壊しつつあった。
それを踏み躡るのが真の目的だろう。つまり、“成功も失敗も関係

無い”のだ。

キンジ達と出来かけていた絆と今も待ち続けているかも知れない彼女を天秤にかけられる筈が無い。

どちらも、ファイアナを作る上で大切なモノになっていたからだ。

「どちらかを犠牲にしなければならないか…………本当に私つて何してるんだろ？…………」

もしも、成功して彼女が解放されても暗殺者として手配され逃げ続けるハメになる。

失敗したら、公安まで足がつかない為に口封じと詰つたの生贊にされる……

何がどう転んでもファイアナに救いなど無い。

でも、やるしかない……

あの時、どんな手段を使っても彼女を助け出す…………そう誓つたのだから……

S & amp; W M 686 に弾を込めるとそれを懷にしました。

そして、部屋を出て行こうとしている時に携帯が鳴り響いた。

「それで？なんで私が蘭豹先生が呼び出しを？しかも、呼び出された先には尋問科の梅子先生だし、単位なら問題無いですし、強襲科ならこの前のバスジャックの報告の件で少しあつたのでそれかなとか思つてたんですが……」

いきなり、携帯に出ると命令口調で「いますぐ教務科に来い」と言われ、病み上がりの状態で来たのだが全く状況が分からずファイアナは苦笑いしていた。

目の前にはなぜか俯いた白雪があり、一瞬、まさか暗殺指令がバレたのではと警戒を始める。

そして、梅子がフィアナに告げた。

「簡単にせ……」

「少し、良いですか？」

そう告げるといきなり立ち上がり、換気口に向けて叫びた。

「出で来ないなら、実力行使に出ますよ？換気口だと上手く身動きが取れないでしょ？ から、死にたくないければ早急に出て来る事をおすすめします。」

「待てー出るからーアリアわっせと出るー！」

換気口から這い出して来たのはアリアとキンジだった。

予想通りの展開に溜息を吐くと銃を仕舞う。

そして、再び座ろうとすると携帯が鳴り響いた。

一度、廊下に出るとフィアナは携帯に出た。

「酷いわねー！ 繚乱を着信拒否なんて！ あんまり連れないと、怒っちゃつぞー！」

電話に出るといきなり頭に響き始めた声にフィアナは苛立ちを隠せなくなり、いつもの笑みは消え真っ黒いオーラを放ち始めた。

「キヤラを電話のたびに変えるのは止めて貰えませんか？ まじで、ライライするので……」

「うん？ 気にしない気にしない！ それでー近々、アドシアードがあ

るじゃない？

アドシニアード……興味は無いが、武装探偵になる上で優勝しておくと将来を約束されたようなモノらしいとは聞いている。だが、なぜその話になるのか全く理解出来ない。

「私つて、繚乱と飛ばされてアメリカの武偵校にいるんだけじょー本当に現実を知らない餓鬼でさ！少し痛い目を見た方が良いっていうの？敗北の屈辱を体感させるのも教育上悪くないでしょ？だから、志願でいいから近接戦闘部門に参加して、ファイアルをぶつ潰してよ！ねつ？いいでしょ？」

この馬鹿女は超絶なまでにダメ女……いや、既に女である事を繚乱とは正反対で捨てているような人間だ。その代わり、頭はキレるは狙撃と射撃の腕はピカイチで公安でも名の知られたバカである。それでも、常識は持ち合わせていると踏んでいたのだが、そうでもないらしい。通信科に在籍している人間が、近接戦闘で強襲科とやりあうなど普通、
有り得ない展開である。

「ああ、それと私達、近々呼び戻される事になつたから！あつ！繚乱からの伝言だ！えつとね！」

『死に取り憑かれるな、

血に溺れるな、

痛みを忘れるな、

死に慣れるな』

だつてさー。そろそろ“錆”を落としなよ？風が変わりつつあるから
さーもう、あんな惨めな想いをしたくないならね」

そう告げると一方的に回線は切断される。

ファイアナは通信が切れて機械的な音が鳴り響く携帯を握ったまま停止していた。

本当に言いたかったのは最後の忠告だつた。

「錆ならねえよ……あいつらの狗として血に濡れ続けるからな……」

そう呟くとファイアナは携帯を仕舞い、応接室へと戻った。

すると、その場では何があつたのか白雪の護衛がアリアとキンジに決まつた後だつた。しかも、なぜか粉雪がいてキンジを睨み付けてゐる。何やらこれから大変な毎日が幕を開けそうである。そんな事を無意識に考えていると胸がズキリと痛んだ。自分の覚悟が悲鳴をあげる痛みだつた。

「それで、私はなんで呼ばれたんですか？」

ファイアナの言葉に梅子はタバコの煙を吐き出すると、一枚の紙を見せた。

「アドシアードの警備？」

「上級生だけだと手が足りないからだとわ……ついでに、星伽 白雪関係の警護のバックアップだな」

「警護補佐についてはお断りします。」

上級生の手伝いも、警護のバックアップも中空知の方が優秀だろう。親しいからこそ起こりうる油断も存在するからだ。ただ、流石に両方を押し付けるのは酷なので、増援を受ける事にしたのだった。

「まあ、あんたが考へてる事も間違つてはいないんだが、犯人の姿が見えない以上は身内で固めた方が安全だ。」

「しかし、峰理子の件もあります。仲間という油断が隙を生み出しかねません……特に、アリアさんが白雪さんの警護につくなど失敗を招き兼ねません。」

「ファイアナの手厳しい評価にアリアは苛立ちを隠せない。この任務を自身が解決するのは不可能だと言われているようなモノだからだ。」

「それに最悪の事態を想定するなら学校側としては対応しかねるとして、白雪を病気か用事で星伽神社での療養と言ひ形を取り、星伽に任せるのが最善だと思いますが……それなら、誘拐されてもそれは星伽の責任になり、学校側は責任を追求される事は無い筈ですよ？峰理子の不祥事があつた以上、連続して不祥事が起これば大問題になりますよ？」

確かに強襲科の悪評は有名だが、内部犯は前代未聞だった。その上、星伽の日本での発言力は大きい。最悪の事態を考えるならファイアナの言葉は何も間違つてはいない。

「そうですよ！お姉様！星伽神社なら安全です！ほどぼりが冷めるまで実家に帰りましょー！」

粉雪はフィアナの言葉に賛同する。フィアナの件もあるのでこんな危険な場所にお姉様を置いて置く訳にはいかないという考え方からだつた。

「待ちなさいよ！聞いてれば任務が達成出来ないって何様のつもりよ！」

アリアの様子にフィアナは溜息を吐ぐと突然、アリアの眉間に銃を向けた。

「客観的に物事を判断したまでです。熱くなりやすい貴方の性格は知略を巡らせるタイプには相性が悪過ぎる。だから、最後まで峰理子が犯人だと氣付かなかつたんですね……それに、前例があるように味方だと思つたら敵だつたなんて事も有り得る筈です。姿が不明なら実は既に誰かと成り代わつてるかも知れない……あらゆる推論を立てておかなければ危険な筈です。実は私がそのデュランダルで貴方の敵とかね。」

そう言って微笑みかけると銃を下ろした。

痛い所を突かれたアリアは何も言えずに黙り込むが、フィアナは銃を仕舞うと全員に尋ねた。

「そうですね。今、ここにいる人間が本物か証明出来ますか？」

フィアナの言葉に梅子先生は難しい顔をする。

違う事の証明は容易いが、本人という証明は難しい。

「まあ大丈夫でしょう。なら、私達の中で合図を決めます。これをこうしてこうです。」

そう告げると右手に印を書き、それを包帯で隠す。そして、包帯を見せた後にぼどき始めた。

「確かに、それなら仲間を……って、あんたが偽物じゃ無いでしょうね！」

アリアは感心するが、一度部屋を退室したフィアナは入れ替わる隙があつた事を思い出した。すると、フィアナはアリアに笑ながら告げた。

「私の証明は……キンジさん？」

そう言つてキンジに密着するが意味を理解していないアリアと白雪は首を傾げる。

「ああ、フィアナは本物だ！」

キンジのヒステリアモードが唯一機能しないのはフィアナだけなので、キンジはすぐに断言したのだった。その様子を羨ましげに見る白雪の横で、白雪は怪しむような目付きでフィアナを睨んでいた。

天秤の上に乗りしモノ（後書き）

感想待つてます！

憶測と疑惑（前書き）

第一巻から完全に原作を離れ始めます。
てか、イーウーに移ります！

話が終わり応接室を後にしようとすると、フィアナはアリアに呼び止められた。

「あんた、あの時気が変わらなければ私を撃ち殺すつもりだつたでしょ」

アリアの言葉にフィアナは動搖すら見せずに振り向くと銃を渡した。その銃のリボルバーを見ると全て弾が装填されていなかつた。ただ、フィアナが弾倉をすり替えただけなのが……。そんな事をしていると、白雪がフィアナに尋ねる。

「フィアナさんは護衛「私は護衛はするつもりは毛頭ございません。ですが、仕事である以上は協力はします。ただ、何から何までして差し上げるつもりは全くありません。先に断言します。今までなら白雪は誘拐されます。と、言つより出来ますか?」えつ?ど、どうこう事?」

そう呟くとフィアナはアリアと白雪を交互に見た後、キンジを見詰める。

そして、一言だけ告げた。

「あくまで偽物とすり変わらなくとも、電話で攪乱なら可能です。特にアリアさんは後先考えず走り出しますから……まあ、せいぜいお気をつけて……」

そう告げるとフィアナは通信科へと歩き出した。

その背中が見えなくなると白雪は白雪の巫女服の袖を掴み不安そう

に顔を上げる。

「どうかしたの？ 粉雪？」

白雪は粉雪にそつ尋ねると粉雪は言い辛そうにしながらゆづくと口を開いた。

「あの方はあまり信用なさうなの方がよろしいかと……嘘偽りに塗れています……」

白雪の友人である人間を罵倒するのは気が引けたが昨夜の mail がある以上は白雪に害を為す可能性も高く無視は出来なかつた。ただ、的確にアドバイスを送つたりと未だに何を考えているのか分からぬいが用心に越した事は無い。

「粉雪？ フィアナは大丈夫だよー不器用だけど優しくてキンちゃんの次に頼りになるんだから！」

白雪の笑顔に粉雪は何も言えなくなつてしまつ。

そんな一人の会話を聞いてアリアは一つキンジに尋ねた。

「キンジ！ あんたはあいつは信用出来ると思つ？」

「信用も何も……あれ？ よく考えたらあいつの事……何一つ知らない……」

キンジはフィアナとの思い出を思い出して行くがどの場面でも決して自分の事を話そとはしなかつた。

ただ、なぜかあつた当初は涙こそ見なかつたもののいつも悲しげな表情を浮かべていた事を覚えていた。

「つまり、何一つ知らない訳……？」

アリアの問いにキンジは静かに頷いた。
いつも自分の事になるとフイアナは必ず話をばぐらかしていた。
それはまるで自分の過去を拒絶するかのように……

「そう。まあ、今は様子見にしましょう？あいつの言つ通りにする
のは癪だけど筋は通つてるし、何より私はあいつが欲しいから」

そう呟くとアリアは満足気な笑みを浮かべた。

「本当に言つ通りでしたね！内部犯！どうして分かつたんですか？」

通信科に行くと先に来ていた中空知がフイアナの武偵殺し事件への
推理を賞賛する。

だが、フイアナは溜息を吐くと珈琲を淹れて自分の席に着くとパソ
コンの画面を向いたまま呟いた。

「本当に峰 理子は犯人だったのかと言わればNOです。私が推
測するに、峰理子が行つたのは爆弾事件三件のみだと思います。そ
れに、それぞれに死者は無し……彼女が武偵殺しをするような人間
にはどうしても思えないんですよね……」

中空知はその話を聞いて資料を読み直す。

確かに三件全てに共通するのは死者が居ない事だ。

バスジャックに関しては怪我人は出たものの大惨事にまでは至らなかつた。

飛行機に関しても無事に着陸している。運が良かつたと言わればそこまでだが、人が一人も死んでいないのは確かに奇妙に思えた。

「ああ！ そうそう！ 美咲さんなら知人に誘拐予告が来たらどうしますか？」

いきなりのフイアナの質問に中空知は首を傾げるが、フイアナが真剣な事に気付くと眞面目に考え始める。

まず、頭に浮かんだのは四六時中見張る事だが、予告を出すのは今時、自信家か馬鹿と相場は決まっている。本当に凄腕だとするならそれでは足りなくなる。

「はい！ 終了！ 今の時間で誘拐された！」

フイアナはそう告げると中空知に珈琲を淹れて渡す。そして、珈琲を受け取った中空知にこう告げた。

「誘拐予告されると先手は必ず向こうに取られてしまう。つまり、護る護衛は後手に回る事になります。」

中空知はフイアナの言葉に頷く。

確かに、フイアナの言う通りに殺人とは違い、護衛は守りが仕事だ。つまり、相手が攻めに転じないと動けないと意味している事になる。

「なら、先に誘拐されてしまえばいいんです。」

中空知はフイアナの言葉に耳を疑つた。

先に誘拐してしまうなど、正氣の沙汰では無いからだ。

そんな戸惑いの表情をする中空知を気にせず、フイアナは続けた。

「もしも、先に誘拐された事になれば相手も少なからず動搖する筈ですしね！そして、偽の情報で敵に揺さぶりをかけつつ隙を伺うのが私としてはベストですね。そうすれば、こちらの隙を突かれる事無り、相手の動きも読み易くなりますから……」

そう呟くとフイアナは珈琲を一口含むとパソコンに向き合つた。そして、中空知に先程と違い小さな声で再び尋ねた。

「美咲さんは私をどう思っています？友達だと思つてますか？」

「えっ？ 友達だよ？」

「そう……ありがとうございます。それから、ごめんなさい……」

フイアナはそう呟くが最後の言葉は風に溶けて消えていった。

憶測と疑惑（後書き）

感想待つてます！

（お母さん）めんなさい……愛紗はここで……）

目の前を歩くフィアナ先輩に恐怖から涙が止まらなくなっていた。武偵としての正義感から怪しい人間の跡を着けたが命取り……こうして、フィアナ先輩の秘密を知つてしまい口封じに殺されようとしているのだ……

「神様……私が何を……いや、せめてアレだけは処分して……いや！まだ、死にたくない！」

なぜこのような状況になったかと言つと少し前に遡る。

私はとある依頼の件で通信科の友人の力を借りて通信科へと足を運んでいたのだった。

そう、つい先日あの忌々しい記憶などどうに消し去つて……

「お邪魔します！」

そう言つて、通信科に突撃すると友人の御厨ことみーちゃんの所へ向かおうとするのだが、偶然フィアナ先輩と眼があつてしまつ。そして、その瞬間に忌々しい記憶が記憶の淵から蘇り蛇に睨まれた力エルの如く体が硬直してしまつ。そして、愛紗に気付いたフィアナは愛紗に笑いかけた。

だが、その笑みが逆に愛紗を恐怖させる。

フィアナに気付かないふりをすると急いでみーちゃんの所へ向かつた。

「愛紗！珍しいわね！貴方がここに来るなんて！フィアナ先輩に会いに？あの人、美人で女子からも人気あるからさ！」

みーちゃんの言葉に愛紗は首を激しく横に振る。あの人は見た目は優しそうで慈愛に溢れていそうだが内面は……口が裂けても言えないモノだ……出来るなら全て無かつた事にしてしまいたい。そんな事を考えているとみーちゃんは苦笑いしながら訪ねて来た。

「それで?何の用かしら?」

「捜査の事なんですが、盗聴を少し調べて貰えませんか?」

愛紗は依頼でストーカーを探していたのだが、どうも此方の動きが読まれている事を怪しみ、みーちゃんに相談しに来たのだった。すると、みーちゃんはいきなりフィアナ先輩に声をかける。

「あの!フィアナ先輩!少しいいですか?」

みーちゃんの言葉に軽く頷くとフィアナ先輩がやつて来る。そんな中で愛紗は必死に恐怖に震える手を押さえて平常心を保とうとするのだが、押さえれば押さえる程に震えは全身へと広がり、嫌な汗まで流れ始めた。

「何かしらアドシニアードの警備で上と打ち合わせなのだけ?」

その言葉に愛紗は救いとばかりに食らい付く。

「では、私など気にせずじつめたりを優先させて下へ盗聴を少し調べるだけなんで!」

そこで、急にフィアナ先輩の眼が輝いて見えた。まるで、鴨がネギを背負つてやって来たとばかりの満面の笑みだ。

「ひりと微笑むと近くから椅子を出して来てそこで腰を下ろした。

「あの……会議は？」

「後輩の相談を無下に出来ないし、向こうはあとでこへりでもじりにかかるから！」

みーちゃんはその言葉に目を輝かせているが、愛紗は絶対に何か企んでいるとしか思えなかつた。

「そう、盗聴をね……私も協力してあげる代わりに少し頼まれてくれないかしら？アドシアード関係で」

フィアナ先輩はみーちゃんの話を聞くと何度も頷き、そう提案してきた。

アドシアード関係でとは言わても、自分達の実力では到底無理だと思い愛紗はすぐに断りをいれようとする。

そんな愛紗の言葉より先にフィアナ先輩は告げた。

「簡単な依頼よ？学校の寮内、それから職員室辺りの盗聴と監視カメラのズレを調べて欲しいのよ。ダメかしら？」

つまり、盗聴を調べるのに使った機材でついでに指定箇所の盗聴を調べる。

そして、監視カメラの死角がないかどうかの確認。

この一点の依頼だとすぐに理解した。

本来なら断りたいのだが断りうとした瞬間にあの出来事が頭を過ぎ

り愛紗は頷いてしまつ。

心中では「無理です。」と、断言しようとしたのだが、口が自然に「私なんかでよければ……」と、動いてしまつた。

「じゃあ、少し移動しましょうか？資材を用意したりしなければなりませんし……御厨さんは受け持ちの仕事が終わり次第、此方にも来て下さいね？」

そう告げると、フィアナ先輩は愛紗を連れて通信科を後にする。

そして、冒頭に戻るのである。

フィアナ先輩は教務科に向かわずに屋上に登ると辺りを確認して屋上に鍵をかけた。

つまり、逃げ場が無くなつた事をそれは意味している。

殺られる！そう思い身を震わせているとフィアナ先輩は壁に寄りかかり座り込んだ。

「あのね？そこまでビックしないで貰える？」

「だつて、私を「殺らないわよ……必要以上の殺しは……まあ、信
用しないならしないでいいわ……私は武道失格だから」「い、ごめん
なさい」

フィアナ先輩の言葉に愛紗は思わず謝つてしまつ。

そして、思わずこんな質問をしてしまつ。

「なんで……あんな事を……」

「貴方に大切なモノはあるかしら？自分を犠牲にしても、信念を曲げても守りたいモノ……」

愛紗の質問にフィアナ先輩は質問で返して来た。
この時はまだ、その意味を理解出来なかつた。

「まあ、貴方を殺すつもつは無いわ……信じるか信じないかは貴方に任せることだね……」

そう告げると一枚の便箋をフィアナは愛紗に渡して來た。
宛先も書かれていないうまつ白な封筒……
それを愛紗は受け取ると中身を確認しようとする。
だが、それをフィアナは止めた。

「それをアドシアードから一週間経つてから神崎……いや、星伽白雪か遠山キンジに渡してくれればいいわ……中身は読まれなくともいい……渡すだけでいいから……それまでは開けないで」

その言葉に愛紗はこの封筒が危険物では無いかフィアナを疑つ。
愛紗の視線にフィアナ先輩は溜息を吐くとその封筒を取り返してライターで燃やそうとする。
まるで、未練を断ち切るように……
それを見た愛紗は思わずその封筒を奪い返した。

「一度受けた以上は依頼を遂行します！」

その封筒を懷に仕舞うと、愛紗はフィアナを見た。
その時一瞬だけ、フィアナ先輩の纏う空気が変わったように感じた
がすぐに元に戻る。

それ以後、会話すら無くなり機材を揃えると軽く扱い方をフイアナ先輩が説明しただけで解散となつた。

一人での帰り道にフイアナ先輩から依頼された封筒が気になり取り出してみるが、その軽い筈の封筒になぜかずつしりと重みを感じた。封筒の封は簡単なモノなのにまるで、鍵をかけてあるように錯覚してしまつ。

結局、その封筒は依頼を完了するまで開けられる事は無かつた。
そして、後悔する事になる。開けなかつた事を……

門倉 愛紗（後書き）

アリアの二次なのか疑問に思えて来たwww
暁の護衛の世界とかの方が主人公慣れられそうだなみたいなことを
考えたり
感想待つてます！

アドシアード開幕

デュランダルの件がまるで無かつたかのように平和な毎日が過ぎて行つた。

いや、平和と言つには未だにアリアと白雪の間にいざこざがありその際に大切な調理器具を粉碎されて少しばかり説教をしたくらいである。その弁償はアリアハ割、白雪一割で持つてもらつた。一応、後輩にして貰つた盗聴器の検査もやはりビンゴだったが、逆に回収せずに利用させてもらう事にした。

既に白雪の誘拐の準備は整つている。

人間、不意を突かれると動搖するように不測の事態に追い込まれると判断が鈍る。

その際に正しい判断が出来るのが本物の証拠なのだろう。

「暇です……警備とは言々、モニターと睨めつ……」

アドシアードが開幕して、観戦したりしたいのだが警備の仕事でかれこれ八時間モニターと顔を突き合わせている。

そんな事をしていると差し入れを持つて来た中空知は苦笑いをしてしまう。

「まあ、平和が一番じゃないですか？何事も起ららずに全てが終わる方が良いに決まつてますよ」

「学校の授業を公認欠席は嬉しいですが、目が疲れます……」

フイアナは目元を押さえると、「二度瞼を閉じて目薬を投入する。だが、実際に得る物が何も無かつた訳じゃない。警備の隙が出来る時間や場所が発覚している。やはり、所詮は武装探偵とは言え、普

口では無いのだろう。この程度の警備なら自身を含めて知り合いの大多数が容易に突破出来るレベルだ。まあ、フイアナの知り合いが繚乱を始めとして裏の世界で相当名の知れた化物なので比べる事がそもそも間違つていいのだが、そんな蠢く闇の中の連中が仕掛ける可能性は〇では無い。

「やはり、甘い警備ですね……」

「甘いですか？」

「武偵校に通う人間は果たしてどれだけが本当に使い物になるでしょうか？私が思うに教務科を除くと3%以下ですよ？自らの能力を過信するバカもいますし、精神面がまだ未熟な連中もいる……彼らは未だにプロとは呼べない見習いです。その事を気付いているのはどれだけいるのでしょうか？」

中空知はフイアナの言葉に驚いた。

確かにその分析は正しいだろう。自らの力に過信した人間は死に易い。本来、ここで学ぶ事は自分には何が出来て、何が出来ないのかである筈なのである。そうやって出来ない事を剃り落として行くのが本来の在り方なのだろう。出来ない事を知らない人間、精神面が幼い人間は扱い易い……特にそう言つた読み合いを熟知しているフイアナなら簡単と言えるのだろう。

こんな時、フイアナが本当に自分と同い年か疑問に覚えてしまう。思考回路もそうだが、仕事面でのサポートも学生とは思えない。何より、表情が読めないので。喜怒哀楽はあるのだが、長く一緒に

居れば居る程にその表情は読めなくなる。

一度、フィアナの過去を中空知は調べようとしたが、セキュリティ制限に引っかかり断念した事があった。

それでも、友人を続けているのはフィアナが悪い人間では無い事を知っているからである。

「まあ、何かが起きるとしたら気が抜ける後半でしょうか？」

フィアナはそう告げると差し入れのサンドイッチと牛乳を飲み始める。

『フィアナ シュトレーゼ！今すぐ教務科へ来い！三分以内に来なければ殺すぞ！』

そつやつて少しばかり遅目の昼食を楽しんでいたいきなりフィアナは蘭豹に放送で教務科に呼び出される。

だが、身に覚えが無い以上はあまり向かいたく無いのだが、いかなければ面倒な事になるのは目に見えているので、さしいれを両手に持ち、教務科へと向かった。

教務科に入るといきなり目の前に回し蹴りが繰り出された。

本来なら片手で否してから反撃するのだが、両手が塞がっていたこともあり軽く体を反らして躰す。

「こきなり、呼び出されて顔面に蹴りつてなんなんですか？」

「あの、その子、貴方の知り合いかしら？アメリカ代表の強襲科Sランク、フィレル チェルシーさんなんだけど……」

いきなり蹴りを喰らわされそうになる知り合いなら……多々いるが、
フィレルなんて知り合いは存在しない。

担任のゆとり先生に返そつとすると、そこに蘭豹が割り込んで来る。

「通信科での死角からの蹴りを咄嗟に避けるか！やつぱり、殺しがいがある！……あんたには強襲科が向いてる氣がするんだが？私がみつちり死にたくなるまでシゴいてやるからさ！」

人間バンカーバスターの蘭豹に目を付けられたのはやはり、バスジヤックからだ。

あの時の判断は一步間違えれば大量の死者を出して終わつた筈だ。蘭豹曰く、状況判断や行動力は強襲科に欲しい人材らしい。それで、事ある毎に通信科から移る事を勧められているのである。

「私には安全な通信科が一番ですから……」

フィアナは苦笑いでそう返すと隣にいたフィレルと言ひ金髪がフィアナに突っかかつて來た。

「巫山戯るな！繚乱教官は貴様を「だからなんですか？確かに、立花とは面識もありますが、彼女とは別に師弟関係にはありませんよ？」……つぐ

そう言い返すと何も言えなくなつたフィレルは掴んでいたフィアナの胸元を放した。

フィアナはサンドイッチを牛乳で流し込み足早に退散しようとするのだが、立ち止まり盛大に溜息を吐くと残つていた牛乳を目の前に放り投げた。

「鉄線による捕縛ですか……触れれば切断される……」

牛乳により見えなかつた糸が見えるようになる。

無数に張り巡らせた糸は牛乳により白く浮かび上ると徐々に回収されていく。

その先から現れたのは鉄扇を帯に差した着物を着た女性だった。それを見たフィアナは辺りを確認する。

「黒渕なら居ないわよ？ 眠いから寝てるつてホテルにまだいるから…… つたぐ、牛乳でやる？ 普通！ 臭くなるじゃない……」

「洗えばいいでしょう？ てか、縫乱死ぬ」

フィアナは白い皿で縫乱を見詰めると蘭豹が縫乱に近付くと握手をした。

「久しぶりだな！ 縫乱！ まだ、くたばつて無かつたのか！」

「香港以来ね！ つて、事は今は貴方がフィアナを教えてるのかしら？」

「いや、フィアナ シュトレーゼさんは通信科ですが？」

縫乱の言葉をゆとり先生が訂正する中で蘭豹は固まっていた。

縫乱は公安〇課に所属し、国家の敵を相手にして来た正真正銘のエリートである。

前回の失敗で飛ばされたらしいが、戻つて来れたのは上からの信用が高かつたからだろう。

その縫乱が年下の相手に一目置くのは予想外だつたからだ。確かに、フィアナは他の生徒より思考回路が異質だが、狂犬の異名を持つ逆辻と並んで縫乱に認められる程には到底思えなかつた

からだ。

「ああ、通信科だつたわね……」

残念そうな顔をする繚乱を無視して帰ろうとするときなり繚乱は鉄扇を抜き放ち……

「立花流 花月千班」

ファイアナの頭目掛けで振りかぶった。

繚乱の鉄扇は壁を打ち砕き、辺りは粉塵に包まれる。

「おい！ 繚乱！ 何を考えて……」

「花月千班は本来なら槍で使われる技だつた筈ですよね……四季星遊馬の時に大体学びましたから……」

避けた際に出来た頬の傷から滴る血を舐めると、ファイアナは笑いながらそう告げた。

繚乱はその言葉に鉄扇を收めると溜息を吐いた。

「四季星 遊馬か……そう言えれば、あんたは面識があつたのよね……」

「はい……だから、立花流はほぼ体得しますよ？ それに、殺す気なんて始めから無かつたでしょ？」

まるで、ファイアナは最初から当てるつもりが無かつた事を知っているかのような口振りで繚乱に笑い返す。

「相変わらずね……そう言つ所、そっくりだわ……流石つて言つの

が、やつぱりいつのまにか……まあ、アドシアードには出なれこ

「嫌です」

「出る」

「断固拒否します」

「出で置いて損はないわよ?」

「子供の遊びに付き合う程暇じゃありませんから……」

アドシアードを子供の遊びと言い放つフィアナに周りは啞然とする中で、繚乱と蘭豹だけが腹を抱えて笑った。

「確かに、競い合いに意味はないわよね。命のやりとりの中でこそ真の実力が發揮される。そこで口寄つたら待つのは死のみか、……」

「確かに、繚乱が一目置く訳だ!こんな事を言つのはなんだ化物かバカかのどちらかと相場が決まつてゐるしな」

事実を述べたまでなのだが、アドシアードの中に極限の状況は無い。ただのスポーツは裏の世界では意味は無い。

極限の状況で使えない手など邪魔以外の何物でも無い。

真に求められるは、平穏な状態での80点ではなく、極限の状況での65点だとフィアナは考へている。

相手の手札が見えないのは良いが、前提として殺されないと甘さが存在する。

いくら銃が人に対し必殺であつても、アドシアードで使われるのゴム弾……死なない前提で物事を考える。

だが、現実にはそんな甘さが緊迫した状況には存在しない。

時間と共に精神が追い詰められて正常な判断が出来なくなる。

極限の中での実力こそが、ファイアナの求めるモノだった。

死すら知らない……死こそが最大の恐怖だと勘違いしている餓鬼など敵にする価値すらない。

ソレを知っている……いや、知つてしまつたファイアナにはアドシアードなど興味を持つ対象では無くなつていた。

「では、用が済んだのなら戻りますね……」

そう告げるとファイアナは静かに教務科を後にした。

アドシアード開幕（後書き）

そろそろヒロインを決めたいんですが、

- 1・カナ
- 2・中空知
- 3・粉雪
- 4・ジヤンヌ

辺りで誰がいいでしょうか？

後は、報告としてこれから原作から離れて行く可能性があるので注意して下さい。トコトンまでやろうとする火が付きました。感想を頂けると嬉しいです。
ついでにアンケートも

分かれ道

フイアナは教務科を後にすると、購買でカロリーメイトと水を購入する。

そして、そのまま校舎の屋上に上がった。すると、そこには予想通りヘッドホンをし、ドラグノフ狙撃銃を携えたレキが白雪の監視をしていた。フイアナは無言のままレキの横に座ると購買で買つて来た物を手渡した。

「差し入れです。変わった様子はありますか？」

レキは差し入れを隣に置くと遠くを眺めながらこう答えた。

「風に混じって邪な気配を感じます。」

レキがそう言うのだから、デュランダルは来るのだろう。それならそれで利用するまでだ。わざわざ手を下す事なく標的が死ぬ可能性もある。そうすれば……そう考えてすぐに頭を振った。馬鹿見たいな汚らしい考えを思い浮かべた自分に腹が立つた。仲間……そうはフイアナは思えなかつたが友人には変わりなかつた。それをどう殺すか普通に模索している。それが当たり前のよう出来る自分の存在に嘆つてしまつ。

「少しばかり昔話に付き合つてくれないか？」

「構いません」

レキが即答したのを合図にフイアナは語り始めた。
全てを無くしたとある少年の昔話を……

「今から数年前の事になります……とある暗殺者の組織で内部闘争が起きました。事のキッカケはとある人間が考案した暗殺者養成プログラムだった。封印された筈のその文書を元に組織内の幹部の一人が身寄りの無い子供を集めてプログラムを施していった。だが、そのプログラムは暗殺者の“量産”が目的では無く、“人類最強”を生み出す事こそが真の理念だつたんだ。つまり、出来上がった子供同士で殺し合いでよ……蠱毒つてヤツさ……あらゆる経験を積み、最強に至る……ただ、それじゃあ足りなかつたんだ。出来上がつたのは最強には程遠い器用貧乏……暗殺者としてはそこそこだが、技能だけで言えば下から数えた方が早い位だ。でも、それを跳ね除けるだけの経験と手札の数を有していた。そんな失敗作の烙印を押された少女はとある学園に潜入する事になつた。その中で少女は普通の女の子を演じ続けた。そんな中で少女は自らと対極に立つ少年と出会い。暗殺者としては才能に満ち溢れていながら、それを否定し続けた少年だつた。出会わなければ幸せだつたのかも知れない。少女は少年と出会い知つてしまつたの……『誰にでも普通に生きる権利がある』と……それから、少女は少年と時間を共にするようになる。だけど、そんな時間は長くは続かなかつた。組織からの肅清でその研究をしていた幹部が暴走したのだ。暴走した幹部は使える駒として少女を利用しようとした。少年は自らの生き方すら捨てて少女の為に戦おうとする。けど、それは叶わなかつた……圧倒的な火力と戦力を持つての文字通りの殲滅戦を行つたヤツがいた……計画の破綻し、少女は過去から解放されたが、権力に今度は囚われた。少年は権力と取引し、少女を解放する事を約束させる。こうして、少年は全てを犠牲にしたの……バカよね！見捨てれば楽だつたのにやー！」

「そうでしょうか？」

レキはただ、そう呟いた。そして、白雪からファイアナに目を移す。

「なら、何故そんなに悲し気な表情をしてるんですか？」

レキの言葉に立ち上ると屋上方へ黙り混みながら向かう。
そんな背中にレキは続けた。

「その少年とはあなたの事なんじやないですか？」

「何言つてるんですか？私は女性ですよ？でも……いや、やっぱり
良いです……」

口から「貴方は私を撃てますか？」と、尋ねようとしていた。
多分、キンジは撃てないだろ？ なら、せめて誰かがキンジを守つ
て欲しい……

たつた一人を救う為に多くの人間を踏み躡ろ？ としている自分から
守つて欲しい……

それは、彼女を助けると言う目的とは反対の意思……

ファイアナに残された最期の良心だった。

一人を救う為に何千の願いを踏み躡つた、だつた一人を救う為に多くの人間を蔑ろにした。願いを殺した。自分を否定して、今度こそ終わりだと騙し続けて……

武僧として誰も悲しまない様にと口にしながら、その陰で何人もの人間に絶望を抱かせた。それでも、彼女が救えるならそれでいいと言ひ聞かせながら……

そんな人間にそんな言葉を言つ権利など無い……

意味の無い殺戮を繰り返し、

意味の無い平等を見せ続けられ、

意味の無い幸福を眺め続けた……

今なら、彼女がどんな気持ちだったのか理解出来る……
いくら拒んでも見せられ続けるそれに精神が磨り減り、感情すら分
からなくなる。

「レキ！って、フィアナまでいたの？」

アリアの乱入に瞬時に表情を作り上げる。

もう慣れた行動……なのに、それが酷く胸を苦しめる。

「さつき、屋上にいるのが見えたので差し入れを

そつ告げると足早に屋上を後にしようとする。

未練がぶり返すなら話さなければ良かった。

別に同情されたかった訳では無い。軽蔑して欲しかった。
そうすれば、この世界など未練無く破壊出来た筈だった。

しかし、レキは同情も軽蔑もしなかった。

ただ、その話を受け止めた……レキらしいと言えばレキらしいのか
も知れない。

「フィアナさん、私は貴方をよく知りません。」

「当然です。それが人ですから……何人も誰かの事を知るなど出来
る筈がないのですから……」

フィアナはドアノブを握りながら空を仰ぎ、そう答えた。

青い空が更に自分の醜さを強調する。この世界に存在する異物だと

「貴方がどのような選択肢を選んでも誰も貴方を責める事は出来ません。貴方を断罪出来るのは他ならぬ自己自身の筈です。」

レキはじつと白雪を観察しながらそう答えた。

「それでも、誰かに赦しを求めるのが人なのよ……」

そう告げると屋上を後にした。

そして、扉が閉まる音が聞こえると壁にもたれかかる。
自分は何をレキに望んだのだろう？

そんな事を考えながら自分の愚かさに、醜さに嗜虐的に嗤い始めた。

分かれ道（後書き）

感想待つてます

アリア敵対フラグたつたかな？

二巻後半は粉雪を交えた公安との殺し合いかな？

立花繚乱と黒渕怜奈のコンビの実力もそこで明らかにしそうかなと
思います。

因みに、四季星遊馬くくフイアナく立花繚乱 黒渕怜奈です。

四季星はまだ出ませんが、立花と黒渕に關しては後半戦で設定公開
かな？

先制（前書き）

四月一日ですし、この更新は嘘の可能性もあります。

アドシアードはなんの問題も起きないまま、後半に差し掛かっていた。

デュランダルも全く姿を見せないが確かにソコに存在しているのをフィアナの嗅覚は感じ取っていた。

ただ、白雪の警護に問題が発生しておりそろそろ向こう側が動くのは明白だった。

何があったかは知らないが神崎アリアの護衛リタイア……

現状は確実にデュランダルの手の内で踊っている状態は確定だった。この状況を開けるには飛び切り予想外の手を使うしかない。

計画下にあつた物を実行する為に、白雪の居る生徒会室へとフィアナは向かった。

生徒会室はアドシアード開催中の情報のやりとりで何度も出入りしているので怪しまれずに十足のまま侵入すると、ポケットの中に隠したS & amp; W M 686の撃鉄を引き上げる。そして、白雪の部屋の前で警戒している粉雪の前を通り自室に行く振りをして近く付く。

粉雪はフィアナが近付いて来ると嫌な顔をする。

そして、右手で何かを弄っているのに気付くと薙刀で急いでフィアナを排除しようとする。

だが、振るわれる前に掴まれた薙刀はまるで石になつたようにビクともしない。

咄嗟に部屋の中にいる白雪に逃げるよう叫ぼうとするが、背後から首を掴まれた粉雪は頸動脈を締められて氣絶してしまう。その気絶した粉雪の頭に銃口を突き付けながらフィアナは白雪の部屋に侵入する。

「「な、フイアナさん……私の義妹に何をしたんですか？」

予想外の人間の暴挙に驚きを隠せない白雪は一瞬、信じられないといつた顔をするがすぐにフイアナを睨みつけた。

だが、粉雪という白雪にとって有用な人質がいる為に下手に動けない。

「着いて来て下さい。」

それだけ告げると氣絶した粉雪を抱えて顎で部屋の出口を指した。

「ならまず粉雪を解放して下さいー『テュランダル！』

「良いから付いて来て下さい。とも無ければ、引鉄を引きますよ？ 私にとって星伽粉雪は対した価値はありませんから……」

躊躇い無く引鉄を引こうとするフイアナに白雪は内心、怒りを隠せないが素直に従うしか無い事を理解すると唇を噛んだ。

「分かりました。従いますから、義妹には手を出さないで下さい……」

「貴方次第です」

そう告げると、フイアナは次の場所へと移動を開始する。

そこは、アドシアードの運営本部だった。

ドアの隙間から内部を鏡を使い確認する。

内部に居るのは教務科が一人、あとは雑魚が数名……

そして、時計を確認しながらスカートの中からスタングレネードを

取り出す。

「 15、14、13、12、11、10、9、8、7、6、5、4、
3、2、1……0！」

0と叫ぶと同時に一時的に廊下の蛍光灯が消えた。

それを合図にスタングレードを運営本部に投げ入れる。

本来なら単騎で飛び込み、殲滅が基本なのだが人質がいる為それが出来ない。

その上、運営本部内にはマイクがある為、一時的に配線トラブルを起こす必要があった。

わざわざ、この場所に寄る必要があったのはそのマイクが必要だつたからだ。

電気が東京の方から何らかのトラブルでストップすると非常用電源に切り替わる。

それを待ち、マイクのスイッチを入れた。

そして、カセットテープを設置するとその場を後にした。

「デュランダル？貴方の欲しい者は何かしら？早くしないと手に入りませんよ？」

フィアナが運営本部を脱出して五分後にフィアナの声の放送が流れる。

教務科の馬鹿は真面目に運営本部へ向かうだろうが、その隙を付いて学園島の外に脱出するのが目的だ。

立花 繚乱と蘭豹は誤魔化せないだろうがまだ、校内に潜伏している可能性を匂わせられれば問題は無い。

現在、フィアナ達が居るのは学園地下の排水区画だった。

現時点でここでの搜索までの時間は十分程余裕がある筈である。

ここまで、警備を熟知したフィアナが監視にからない様に行動し、

痕跡すら残していないのだ。

プロの教務科の連中ならともかく、素人の雑魚がいくら集まろうが見つかる様なへマはない。

時計を再び確認すると、近くからゆっくりと足音が聞こえ始めた。

「ピッタリですね……クロエ フローレア」

その声に時計から視線を上げると、真っ白な着物を着た和服美人の女性が佇んでいた。

白雪はその姿を見ただけで自分と目の前にいる女性の実力差を理解した。

何をしようが行動前に潰される。喰われる。そんな未来しか見えて来ないのだ。

「フィアナさん……何を……」

すると、目の前の着物を着た和服美人は白雪に街中で普通に見かける服を手渡した。

その状況に意味が分からず、首を傾げ、フィアナに尋ねようとする既に近くには姿は無く、警戒に行つたようだつた。

「あの……私をどう」「まあ、依頼だから一日は私に付き合つて貰う……まあ、星伽のしきたりとか関係無くね」つまり、何が目的なんですか？」

「目的は無い……まあ、強いて上げるとするならしきたりに縛られて好きに出来ない貴方へのお節介かしら？昔の私も貴方と同じだつたからさ……本来なら馬鹿な妹がいる場所にはあまり赴きたくないんだけどね……」

さつきまで感じていた雰囲気とは違つぱりでも屈うつな優し気な雰囲気に白雪は感つてしまつ。

「はあ、今回の件が片付くまであなたを逃がすのが私の仕事……まあ、立花っぽい仕事なんだけどね……」

どこか遠い世界の話を語るよひに遠くを見詰める女性の顔は白雪には少し淋しげに見えた。

ただ、立花という家名に関してだけは疑わずにいられなかつた。星伽が占いで政府の行く末を見るのであれば、立花は政府を守る番犬である。

その一族は公安を始め、数々の功績を残しているが姉妹など聞いた限り知らない。

確かに立花 桜花と公安部のエースである立花 繚乱は姉妹だが幼い頃に既に桜花は死んだ事になつてゐる。

「ああ、私は四季星……いや、今は立花 桜花を名乗らせて貰おうかな? もつ、捨てた名前なんだけどね……」

「立花 桜花? でも、その名前は……」

白雪の疑いの眼差しに桜花は苦笑いをしてしまつ。

「私はね……立花に殺されたんだ……私の正義を貫いてね……まあ、世間ではそれを悪というのかも知れないが私はそれでいいと思うし、後悔もしない。私は私の誇りを持つて死んだのさ……まあ、その後は動く死人として名前を変えて己の信念を貫いてる……まあ、今では裏の世界でも有数の強豪なんて言われてるけど、私の本質は何一つ変わっちゃいない。」

その言葉に白雪は何も言えなくなり、黙り込む。

そして、着替えた巫女服を折り畳むと桜花に尋ねた。

「もしも、やり直せても同じ選択を？」

「ああ、力をどう使うかは自分次第だ。だから、私は大切な物を守る為に犠牲にした。それはあなたも同じだよね？フローレア……」

桜花が薄暗い通路に向かってそう叫ぶとゆつくりとファイアナが姿を現した。

「力があつても戦う覚悟が無い奴は邪魔です。

それから、一つ履き違えているようだから言つておぐが、此方側で白雪程度なら履いて捨てる程いる。舐めてるんですか？貴方は……貴方程度で化物ですか？貴方は知らないから言えるんですよ！本当の化物を！容赦無く、肉を喰らい骨を碎くような連中の……闇の一根端すら知らないから！本当の化物は私のような人間を指すんですから……そろそろ移動しないとここも危なくなります。」

ファイアナは粉雪を抱えると先に進み始めた。

その後ろを付き従う形で白雪と桜花が歩いていくと小型船舶が停泊させてある東京湾に面した排水区画の一つに出た。

先制（後書き）

感想待つてますね
流石に原作の記憶辺りはキツくなつて来た

✓ s 蘭豹（前書き）

.....まあ、互いに本気では無いからこんな終わり方で良いかな
つてwww
この後、デュランダル、キンジ、公安と連戦ですし、粉雪を連れて
ましたから

小型船舶から女性の死体を引き上げるとS&W M686で頭を撃ち抜く。

そして、水路へと投げ捨てた。

「何をしてるんですか……」

知らない人間の死体とは言え、いきなり頭を撃ち抜き水路へと投げ捨てるファイアナに白雪は戸惑いを隠せない。

だが、そんな白雪を気にせずにファイアナはポケットから空薬莢を取り出すと地面に置いた。

「こうすれば、争いがあつたと誤魔化せる。教務科の蘭豹はすぐに気付くだろうけど、他の奴らはね……」

「それで、どうするの? そつちは……」そつちは一人乗りだから捨てる?

桜花の現実を踏まえた上での言葉に白雪は反論しようとする。だが、その前にファイアナは桜花に対して告げた。

「始末したとされる死体は一人、誘拐は一人……なら、ここで死んだのは普通に考えても星伽粉雪の筈です。なら、今は星伽白雪の役を担つて貰うつもりです。」

つまり、それは思い込みを利用したモノだ。何時の間にか一人、姿が消えて死体が見つかる。そうなれば、まずはその死体が星伽白雪か粉雪であると疑う筈だ。だが、ここは東京湾に面した排水区画の

出口であり東京湾に流れた死体を見つけるのは容易では無い。おそらく、桜花の存在が気付かれない限りはまず死体が^{アコイ}凹だとは思わないだろう。

「はあ、そろそろ行きますか……いくわよ？」

そう告げると白雪を抱えて小型船舶へと飛び移った。

離れて行く白雪達を眺めながらフイアナは横目に白雪を確認する。

「いい加減、寝たふりは止めたらどうだ?」

フイアナの言葉に気絶している白雪はビクッと反応する。

「お姉様を殺すのが目的なのでは?」

「あの指令署を見たのはお前だったのか……」

白雪は自分の失言に顔を青く染まって行く。

「行くわよ……そろそろトヨランダルは動き始める。」

「なんで、私が貴方に付いて行かないとならないんですか!」

すると、フイアナは「そう」と、だけ呴くと白雪を置いて行くとする。

だが、ここ排水区画は地図が頭に無ければ入ったわいいが、出るのは容易では無い。

つまり、白雪はどれだけ文句を言おうが付いて行く以外に選択肢は無かった。

「なぜ、こんなマネをしたんですか？」

粉雪の言葉に小さく溜息を吐くと、焦点のボヤけた田で水路の暗い闇を見つめながらこう告げた。

「やうでもしなければ、キンジさんは私を殺せないでしょ？」

まるでキンジに殺されたいともされる言動に粉雪は首を傾げた。その様子にフイアナはクスリと笑う。

「さうと、貴方には一生縁の無い世界の話よ……魑魅魍魎が渦巻き、人間性すら否定される疑い続けなければ生きられない世界だから、私達からすればこっち側は綺麗過ぎるわ……」

「なんで、そんな風に騒うんですか！自分の事を！」

自分自身を嘲笑うフイアナに粉雪は全く理解出来る筈が無かつた。

「だつて、私は愚か者じゃない？死んだ方がマシなさ……貴方達の世界で言つなら人間のクズやゴミよ？でも、そうしても守りたいモノがあるの……どんなに犠牲にしてもね……そうは思いませんか？蘭豹先生？」

フイアナはそう暗闇に呴くと暗闇の向こうから足音が響き渡る。そして、ゆっくりと蘭豹が姿を現した。

「何が目的だ？白雪をどうした！答え次第では殺すぞ！」

蘭豹は容赦無くM500をフイアナに向ける。

それをなんでもないかのようにしながらフイアナは頭を搔き鳴つた。

「白雪の保護ですよ？まあ、この状況を利用して貰いますが……まあ、私の仕事は遠山キンジの暗殺ですから……」

その言葉を合図に辺りに硝煙の匂いが立ち込む。

一発目からフイアナの頭を狙いに行つたのだが、狙いを読んでいたのか体を反らして躱した。

「いきはり頭ですが……」

蘭豹が続けて発砲しようとするがフイアナは蘭豹のM500を蹴り上げた為に目標が上へと逸れる。

すぐに蘭豹はM500からナイフへと持ち変える。

これだけ接近されれば銃よりナイフの方が利点が大きいからだ。

それに、先程からワザと粉雪が弾道線に重なるような位置取りをしており、誤射する可能性もあつたからだ。

「あまり、時間をかけられないので通して貰えませんが？」

ナイフが激しく火花を散らしながらぶつかり合つ中でフイアナは蘭豹に尋ねた。
だが、蘭豹がそれを認める筈が無かつた。

「なら、死ね！」

「残念です……」

フイアナはそう呟くとスカートからスタンングレネードが転がり落ちる。

一瞬、それで全ての決着がついた。

ピンすら抜かれていないスタンングレネードはただの鉄屑だ。

その無害な産物に目が行つた瞬間にファイアナのナイフが蘭豹の首を捉えた。

「終わりですが、まだやり会つなり……」

「今まで猫を被つていたのか？」

蘭豹は敗北を認めるとナイフを捨てた。

「私は弱いですよ？ ただ、自分の弱さを知り尽くしているだけです。だから、私は自分を過大評価しないし、敵を過小評価はしない。強い連中の方が扱い易いし、読み易いですから……」

そう告げるとファイアナはナイフを収めた。

「自分のやつてる事がなんなのか分かってるのか！ お前は！」

蘭豹の問いかけにファイアナは静かに頷く。

「理解ならしていますよ？ 私にはそれでも取り戻したいモノがありますから、その為にはもう手段を選ぶつもりはありません……」

「強襲科に在籍すればその才能を思う存分振るわせられるんだがな

……」

「私は強襲科には向きませんよ……根本が違い過ぎますから……私は常に前提として相手を殺すという手札が入っています。それにより、切れる手札が貴方達よりも多いだけ……そんな些細な違いしかありませんから……」

その言葉にやれやれと溜息を吐くと蘭豹は近くにいる粉雪に目を向

ける。

「そいつをどうするつもりだ？」

「デュランダルを罠にかける最後の仕掛けです。彼女には白雪のフリをね……その為に力を貸してくれませんか？少し行つた場所に死体を沈めておきました……」

ファイアナの言葉に蘭豹はファイアナへの評価を新たにした。

目の前の人間の計略は今の状況を引っくり返すような物だ。つまり、“教務科”に追われる状況すらワザと作り出したに過ぎない……

教務科の誰かにその死体が粉雪の死体である可能性を持たせられればいいのだ。

そうなると、警戒体制のレベルが上がり、デュランダルを学園島内に閉じ込められる。

ここに来て、漸く繚乱がこの人間を認めるに同時に敵視した理由が理解出来た。

「どれだけ場数を踏んだ？」

「私はまだまだ未熟です……場数など蘭豹先生には負けますよ？まあ、『壊した人間』の数でなら私が上かも知れませんがね？」

公安の狗として使われた場数がファイアナの元來の才能を開花させていた。

だが、最後の欠片である甘さだけが未だに残つてゐるのだった。

「白雪は本当に無事なんだろうな？」

蘭豹の疑いにやれやれと言いたげなフィアナは盛大に溜息を吐く。

「明日の朝には戻つて来る予定ですので安心してトドセ……と、言つても信用されないでしようから…………」

「考えてなかつたのか？」

蘭豹の言葉にフィアナは蘭豹から露骨に目を逸らした。その様子に後ろにいた粉雪の視線まで突き刺さり始める。

「やつてる事は犯罪なんだ！本来、蘭豹じやない教務科が来たら適当に潰して薬莢と血痕を見つけさせて犯罪者として手配されるつもりだつたんだから！そうすれば、遠山キンジも私に對して撃てるし！」

わざわざ田的まで口走つたフィアナはその場に座り込んでしまう。

「何故、遠山キンジを狙つ？」

「知りませんよ……公安からの命令ですから……神崎アリアのパートナーになられたら困るんじゃないですか？」

「なら、何故お前はその命令を受けた？」

蘭豹の質問にフィアナは何も答えなかつた。

✓ s 蘭豹（後書き）

感想待つてます

排水区画での戦い（前書き）

なんとなく、ヤンクトレキャラを書きたい
そして、方向性を間違えたか悩み中

排水区画での戦い

蘭豹と別れたフイアナは粉雪を連れて排水区画の出入り口の一ついでに来た。

ドアの隙間から見る外部の様子はD・4では無く、厳戒態勢になつているようだつた。

運営本部を襲撃した以上は仕方無いと言えば、仕方が無い。これで、学園島と本土とを繋ぐ橋は完全に封鎖されているだひつ。

「わい……どうしまじょつか? 粉雪さんがいる訳ですし、強行突破は無理でしょ? はあ、殺しを許容してしまえば楽なんですが……」

まるで、“殺す”と言つ事は容易いと言わんばかりのフイアナに粉雪は少しばかり違和感を覚えた。

性質と雰囲気が一致しないのだ。まるで、無理して悪を演じてるようにも取れてしまう。

先程の蘭豹への発言もそつだが、殺せると言しながらここまで誰一人殺していない。

死体を捨てたのもまるで血を殺人鬼と思い込ませる意図があるようにも感じてしまう。

つまり、キンジやアリアと決定的に決別する為の材料のようになつた。

「仕方無いが、こいらで少しばかり待ちますか……」

そう叫びると、フイアナは何やら無線機を取り出した。

「あの……何を待つんですか?」

粉雪の発言にフイアナは無線の雑音の中に聞こえるやり取りに耳を傾けながら告げた。

「薬莢と血痕が発見されれば、あいつらの頭には巫女服＝白雪の固定概念が付く……なら、後は巫女服を見せながら逃げ惑えば自然とデュランダルが釣れる筈だ……奴も逃げ出す算段は無いだらうからな……排水区画は封鎖されてしまうだろ？から……」

フイアナは侵入経路として表向きの入り口の他に、小型船舶を用いた排水区画からの侵入も考慮に入れていた。その二つの可能性をアドシード運営本部襲撃と排水区画での薬莢と血痕で完全に封鎖された筈だ。今までのやり方から考へるに策士型だがここまで場を崩されたら向こうも手段を選ばずにはいられないだろ？。策を張り巡らせるタイプは盤を引っ繰り返されるとトタンに手が詰む輩が多いのだから……

そんな事を考へているとフイアナの無線に予定通りの通信が入る。

「こちら蘭豹！排水区画で発射されたばかりと思われる357マグナム弾の空薬莢と海水に血液を確認した。フイアナ シュトレーゼが人質の一人である星伽粉雪を排除して捨てた可能性がある！」

わざわざ粉雪をと言及までしてくれた辺り助かるが、DNA鑑定も考えて海水で血液を流したのだろう。

フイアナは鑑定結果が出る前に決着をつけるつもりだったのだが……その通信を聞くとフイアナはM18発煙筒をドアの隙間から投げ出す。

「行くぞ！」

辺りが煙で包まれたのを見計らい、粉雪を抱えると扉を毛破り飛び

出した。

だが、このまま姿を見せて逃げ続けるのは狙撃科の標的になる為不利だ。発煙筒も限りがある。何度も使える手では無い。

「いたぞ！」

思つたよりも上級生の反応が早く、外部からの応援を集めてしまう。粉雪を捨てれば逃げ切れるが抱えたまま狙撃に注意しながら強襲科と渡り合つるのはキツい物がある。

咄嗟の判断で排水区画へ戻るとワイヤーで扉を固定する。

本気で開けるにはC-4で扉を吹き飛ばすしか無い為、時間稼ぎにはなるだろう。

ただ、他の通路も封鎖されているだろう為に袋の鼠になつている事はファイアナにとつて予想外だった。

「不味いですね……」

排水区画に降りると足音が聞こえ始める。

陽動されてしまうのが分かる以上は強行突破しか方法は無い。

ファイアナはなぜかこの危機的状況に笑いが漏れていた。

どこか楽しいと感じてしまうのだ。

「私も……いや、俺もそらそろ人肌脱ぐか……」

粉雪は喋り方が変わつたファイアナの雰囲気が一変した事に気付く。まるで、白から黒に反転した様に……

粉雪の事など気にしないファイアナは目を閉じると深く深呼吸をする。閉じた視線の先には五人の足音が見える。

足音が乱れていらない辺り、チーム経験はあるのだろう。だが、それはつまり団結力を利用すれば容易に崩せる。

ここで一チーム潰しておけば後は撃乱各個撃破に持ち込めるからだ。通信が信用出来なくなれば人影が敵か確認する為に僅かな隙が出来る。

それに比べこちらは全てが的だ。的を確認する必要はない。優秀な衛生科、救護科がいる訳だから手加減など必要ない。死なない程度に半殺しをすれば問題無い筈だ。それで武装探偵として死ぬなら自分の精神の弱さを恨むべきだろ？

壁を蹴り跳躍する。

ここは排水区画と言う事もあり、パイプなどの足場も多い。パイプに足を絡めるとじつと敵を待つ。

そして、敵が下を通ったのを確認すると音も無く着地し、背後から一人を音も無く気絶させ水路に投げ捨てた。

その着水音に振り向き銃を構えるが、気付いた時には遅く壁へと叩きつけられ気絶してしまう。

残った三人の内の一人が慌てて発砲しそうになるが、フィアナはその人物に足払いをし、体制を崩さるとリーダーらしき人物に向かい蹴り飛ばす。そして、残った人物に振り向こうとするが、先に銃口を突き付けられた。

「手を上げ、投降しなさい！」

「甘いわね……」

そう告げると手を使わずに、最後の一人を地面に叩きつけた。

「立花流 無月……とは言え、四季星ならもつと上手くやるでしょうね……」

やれやれと言いながら水路に叩き落とした生徒を引き上げると武装を取り上げて水路に捨てる。

そして、ワイヤーで拘束して行くと顔に落第と落書きして行く。

「どうするつもりですか…こんな事までして…」

「さあ？別に武装探偵に興味は無いからね……それに、俺は二つち側よりあちら側の方が性に合つみたいだからな」

フイアナはそう告げながら通信機を強奪し、チームの持ち物から生徒帳を取り出した。

虚構が人の精神を限界まで追い詰める闇……

後はフイアナが最後の一押しをすれば舞台は出来上がる。

正常な判断が出来なければ、数など脅威では無い。

排水区画からの脱出を目指してフイアナは粉雪を連れて歩き始めた。フイアナの推測ではそろそろバラバラになり連絡を取りながら捜索を開始する筈だ。

分散する前にチームの一つを潰せたのはその点、ラッキーと言えるだろう。

「さて……行きますか？」

ナイフを抜き取る

排水区画での戦い（後書き）

オリキヤラ紹介？

四季星遊馬 本名 立花 桜花

フィアナの本名を知つており、過去の事件の関係者の一人

立花の忌み児で繚乱の実の姉

繚乱と違い、オールマイティだが一対多数の戦いで絶大な力を發揮する

立花 繚乱

元公安0課所属

フィアナの関わった事件の責任をとり左遷された。

右目を負傷しており眼帯を付けている。

鉄線と鉄扇を扱い、鉄壁の防御を誇る

黒渕 零理

狙撃担当

繚乱と共に左遷された問題児だが、腕は一流

私生活はフィアナにダメだしされる程のダラズ

狙撃ではレキと渡り合えるが、本人曰く私は狙撃落第者

まあ、次回辺りに武偵側の一年コンビの紹介を……

因みにイーウー側もオリキヤラを出す予定

「うわ……教務科の連中……S研の根暗野郎を追加してきやがった……まともに相手するのはキツいぞ……おい」

壁に深く突き刺さった鉄パイプを眺めながらフイアナはそう呟いた。念力で操った無機物をポルターガイストのように操るらしいが、実践経験の差と自らの力の過信がポルターガイスト野郎の敗因だった。

「あの、平然と倒しましたよね？超能力を……」

本来ならば超偵を倒せるのは超偵だけと言われている。

それを意図も簡単に捻り潰したのだ。しかも、一撃で沈めて……

白雪お姉様ですら自分の力に恐れる部分があるが、この人は超能力自体をただの力程度にしか捉えていないらしく、的確に能力を判断し、弱点について潰している。その光景を見る辺り、どちらが化物だ！と、思いたくなる。ただ、一つ言えるのはフイアナは超能力を嫌っている訳ではない。そうではなく、超能力の在り方を嫌つているようだった。それが、超能力を全否定して見えるが本質は“生まれながらの観智”に縛られた生き方をする連中の存在が嫌いだけなのかも知れない。

「武器は回収しているから問題は無いが体力か……大丈夫か？」

いきなり話を振られた粉雪は思考の海から現実に引き戻される。

「大丈夫です……巻き込んだ人間がよく言えますね……」

皮肉混じりに粉雪はフイアナに対して呴くがその言葉はフイアナに

は届かなかつたらしく、先々進んで行つてしまつ。

それを粉雪は慌てて付いて行くと、デュランダルが乗つて来たであらう脱出用の逃走経路を見つけた。

だが、フィアナはそれを見向きもせずに排水口から外を覗く。

「これを使って脱出するんですか？」

粉雪はフィアナに対して尋ねるが、フィアナは首を振り外を指差しながら溜息を吐いた。

「バ力か？お前……頭を綺麗に撃ち抜かれたい自殺志願者か？排水口は全て狙撃科がついてるに決まってるだろ？」

「そ、そんな事！私が知る訳無いじゃないですか！」

顔を真っ赤にして反論する粉雪に半ば飽きれ気味な様子だったが突然、粉雪の首根っこを掴むと、その脱出艇に粉雪を押し込んだ。いきなりの事に粉雪は不満をぶちまけようとするともフィアナの纏う空気が張り詰めている事に気付き言葉を飲み込んだ。まるで、狼が相手の出方を静かに伺うようにフィアナはナイフに手をかけてじっと待つ。

「貴様のお陰で計画が全て頓挫だ……まさか、こんな博打を打つて来るとわな……」

現れたのは西洋の鎧を纏つた同い年位の銀髪の少女だつた。自身の予想とは随分違う容姿にフィアナは思わず辺りを伺つてしまふ。

だが、周りには気配は無くこの血の匂いのしない少女がデュランダルだと分かると盛大な溜息を吐いた。

「なんだ！ その溜息は！」

西洋剣に手をかけた銀髪の少女がフイアナを睨みつける。だが、それを気にせずにフイアナは少女をもう一度見ると頭を搔き、肩を落とした。

「…………デュランダルって乳臭い餓鬼かよ…………」

フィアナの言葉に銀髪の少女の額に青筋が走る。

「アーニー、モハガにしていいなどしか取れない言葉に金髪の少女は一
度も見えてない。」

「貴様！私をバカにしているのか！」

「いや、正当な評価だろ？人を殺した事も無いような餓鬼が粹がるんじゃねえよ……ああ、バカらしい……てか、今時甲冑はあり得ないだろ？バカか？お前？」

「う、うつうるさい！これは、正装だ！まあ、いい……貴様を倒せば星伽白雪の居場所が分かる訳だ……吐いてもううぞー！」

そこで金髪の少女は西洋劍を抜きはなたた
だが、反対にフイアナはまるで戦ひの意は無こと書つかのように十
イフを収める。

「貴様……本気で私をバカにしているようだな……私はジャンヌ！
ジャンヌダルク30世だ！貴様の魂に刻み込んでやろう！」

フィアナとしてはイーウーを紹介して貰う為に戦闘の意思が無い事

を示そうとしたのだが逆効果だつたらしい……

イーウーの人間で魔剣と呼ばれるなら超能力を使える可能性を踏まえるとジャンヌの剣を難なく躱す。そして、耳元でジャンヌを罵倒する。

「ジャンヌダルクって救国の聖女が裏切られて処刑だろ？その末裔がコソ泥とは墮ちたもんだな？その剣は盗品か？」

完全な挑発だと理解していてもジャンヌはそれを聞き流す事は出来なかつた。

「盗品ではない！我が家系に伝わるデュランダルだ！」

「盗品だろ？デュランダルはシャルル王からローランに授けられた物だし、持つべきはローランの末裔じゃないか？ああ、フランス繫がりか……ダメ……もう少ししまともな繫がりにしろよ……小学
生のクイズか？」

フィアナのその言葉に堪忍袋の尾が切れたジャンヌの周りの水滴が凍り始める。

「リアル雪女かよ……まだ、冬じゃねえぞ！」

ジャンヌの斬り込みを難なく躱すが、怒り狂つたジャンヌの超能力は後先考えずに超能力を使い辺りが凍り付いて行く。

シャレにならなくなりつつある状況に今更ながらやり過ぎたと後悔するが、ここから先は根競べだ。

超能力にも上限がある。ましてや、精神が不安定ならばその消費も早くなる。

だが、話はそう簡単には行かなかつた。

「マジかよ！」

右足が地面の氷に飲み込まれているのだ。
それに気付いた時には既に目の前にはテュランダルの刃が迫っていた。

「貰った！」

だが、フィアナは冷静に左足を踏み込むと右足を軸に
脱力させ静止状態から

足先から下半身へ

下半身から上半身へ

回転の加速で拳を押し出す

拳法家のパンチはただ腕の力のみで放たれる訳では無い。
体の筋肉を総動員し、拳面へと収束させて放つのである。

これの代表的な技が八極拳の寸頸だが、フィアナが使ったのは八極
拳のそれでは無い。

とある暗殺者が幾重にも繰り返した戦いの末に編み出した名前すら
存在しない暗殺拳である。

ただ、武器を破壊すると言つ理念のみを追求したその技は不滅の刃
と謳われる魔剣と交差する。

「あれ？失敗しましたか？」

フィアナの右足を固定していた氷が音を立てて砕け散った。
僅かな音だが、ジャンヌの耳にはデュランダルから微かに何かが碎ける音が聞こえフィアナから距離を取る。

そして、ジャンヌはデュランダルを確認すると氷が砕けている。デュランダルの纏っていた氷が膜になり刀身までは届かなかつたようだが、右足の氷を砕く為に力を回さなければ確実に刀身までヒビが入つていただろう。

「貴様……名前は？」

「フィアナ シュトレーゼ……いや、クロエ フローレアと名乗らせて貰う」

「フローレア？あの名を名乗るのはよっぽどの馬鹿か、狂人と決まつているんだがな？暗殺者を派出し続けて滅んだ家系……」

ジャンヌはフィアナの名乗ったフローレアと言ひ名を怪しむ。

「まあ、事実なんだから仕方ないだろ……」

再び盛大な溜息を吐くと、フィアナは目を閉じて深く深呼吸する。そして、目を開けるとジャンヌに提案した。

「次の一撃で終わりにじょづば？じゃないと、他の奴らが来ちまつ……」

フィアナはそう告げると、懐から淡雪と呼ばれる脇差を取り出した。

「確かに……」

そう告げるヒジャンヌもテュランダルを構えた。

『所定の位置に着きました……銀狼と魔剣の戦闘を確認……』

観測手が通信機で本部からの命令を待つ。

『了解しました。』

本部からの命令を受けた観測手は狙撃手に標的を告げる。
その返答に狙撃手は頷くと、スコープで標的をマークし始めた。

フイアナの淡雪とジャンヌのテュランダルが火花を散らす中でフイアナは淡雪の刀身に僅かにこちらを伺う狙撃手らしき人間を確認する。それはフイアナでは無く、ジャンヌを狙っている事は明らかであり、確かにそうすれば確実にジャンヌを抹殺する事は可能だが、卑怯以外の何物でも無い。

フィアナは淡雪でデュランダルを受け止めたと、咄嗟にジャンヌを突き飛ばした。

フィアナの背中から血飛沫が舞う。

そして、淡雪はゆっくりと地面に首を立てて墮ちた。

デュランダルの傷では無い事は明らかだつた。

背中からの出血は止まらず、血の滲みようから応急処置をしなければ不味いのは分かるが、フィアナを助ける為に出て行けば確実に狙撃される。

敵を助けるのは馬鹿らしいが、ここで見捨てれば後悔する……だが、状況は最悪の方向へと転がる。

「フィアナ！お前、星伽白雪誘拐及び、星伽粉雪殺害容疑で逮捕する……なんで……どうして……」

願つたり叶つたりな状況……

フィアナはノロノロと立ち上がるとキンジにM686の銃口を向ける。

引鉄を弾けば一発の銃弾で全てが終わる。

もう、後には引けないのだ。

時間は巻き戻らない……

ただ、進むばかりである。

「答える! フィアナ!」

「ああ、殺しました……邪魔だったの……誰かを殺すのに理由が要りますか?」

そんな中でフィアナの携帯の着信音の電波ソングが流れ始める。

フィアナは携帯に届いたメールを開くとそこに添付してあった画像に絶句し、言葉を失う。

様子がおかしいのは誰から見ても明らかだった。

メールに書かれていたのは一言

『用済みだ』

携帯は手をすり抜けてコンクリートへと落ち、粉雪の隠れる脱出艇の中へと転がり込む。

そこにはヒトノカタチすら留めない肉片だった。

元は人だったのかも知れないが、もう肉片としか見えようが無かつた。

守りたかったモノすら救えない愚か者……

嗤わざには居られなかつた。嗤わなければ精神が崩れ……いや、もう最初から崩れていたのかも知れない。

精神の崩壊、自己の喪失、ファイアナを完成させる為の最後のパート

……

ファイアナが引鉄を引こうとしたのに合わせてキンジも引鉄を引いた。

だが、ファイアナのM686からは弾が発射されずキンジのベレッタから放たれた9mmバラペラム弾と一度目の狙撃がファイアナのファイアナの肉を穿つ。

銃創から血が吹き出て辺りに血の池を作る。

そして、ファイアナは口から血の塊を吐きながらゆっくりと排水路へと落ちて行くのがキンジの目に映つた。

ファイアナの目からは一筋の零が零れ落ちていた。

枯れたと思っていた涙だ。

残されていた人間としての弱さが涙として流れたのかも知れない。

ジャンヌが咄嗟に用水路へと落ちて行くファイアナの腕を掴もうとするが、指先をすり抜けてしまう。

そして、排水路はファイアナの銃創から溢れる血で徐々に赤く染まつて行く。

ジャンヌは飛び込んで引き上げようとするが、甲冑が邪魔になり飛び込めなかつた。

一方、キンジも状況が掴めずただ沈んで行くフイアナを見ている事しか出来なかつた。

フイアナ シュトレーゼの遺体は近海を捜索するも、発見出来無かつた。

また、フイアナの用いた死体に関しては第三者であり死亡推定時刻がおかしい事から事前に用意されていた死体であり、フイアナの殺人容疑は取り下げられた。

一番の問題となつたフイアナ シュトレーゼを狙撃した人間は狙撃場所は判明するも証拠になりうる物は何一つ残しておらず、捜査は打ち切られた。

こうして、フイアナ シュトレーゼの死亡とテュランダルの逮捕、アリアの白雪発見という事で事件は幕を降ろすかに見えたが、まだ全てが終わった訳では無い事を誰も知らない。

羽化（後書き）

..... フィアナ死亡..... つてか、アリア出番無いなー
感想待ってます！

「それで、ヤツは始末出来たんだろうな？」

公安の課のオフィスでデスクに腰を降ろした逆辻はファイアナを狙撃した狙撃手に尋ねる。

逆辻に逆らえば消耗品のようにすり潰されて捨てられる事を知っている人間にとつて、任務失敗を招いた事は死を意味する。ここで首を横に振れば頭が吹き飛んでいただろう。

「狙撃は成功し、海へと落下……死体は発見出来ませんでした……」逆辻は狙撃手の言葉に襟首を掴んで机に叩きつけ、顎にコルトバイソンを突き付ける。

そして、笑いながら狙撃手に告げた。

「成功？ 何言っちゃってるのかな？ 死体が見つからない以上は生きてる可能性があるだろうが！ 俺は“確実に殺せ”……そう命令した筈だよな？ ああ？ わざわざ一発も撃つても即死させられてないわ、死体は発見出来ないわ……舐めてんのか？ ああ？ お前の代わりなんざ腐る程居るんだよ！」

逆辻の言葉に襟首を掴まれた狙撃手はあまりの恐怖に身を震わせる。その様子に満足したのか襟首から手を離すと他のメンバーに指令を出し始めた。

「次はねえからな？……奴の当たりそうな知り合いは片っ端からマーケしろ！ 銃創がある以上は通常の医療機関だと足が付く可能性を考えて通院出来ねえ筈だ！」

逆辻の命令にまだ死にたくないゴミ屑以下の連中は急いで仕事に取り掛かり始めた。

だが、その中に叶の姿は無かつた。

事件後の事情聴取も終わり、アドシアードが数日延期される事が決まりた。

粉雪は今だにフィアナの携帯電話を隠し持っていたが、中のデータは一件のメールを除いては空っぽで何一つ情報は無い。

本来ならば、白雪お姉様達に渡すべきなのだろうがコレを渡す事は何故か気が引けた。

特にキンジさんには……

「大丈夫？ 粉雪？ 事情聴取で疲れた？」

宿泊していたキンジさんの部屋に向かつ途中に事件の経緯を思い返していたのが顔に出ていたらしく、白雪は粉雪の事を心配気に尋ねた。だが、本当の事を告げる訳にはいかない粉雪は無理矢理笑顔を作り笑い返すだけだった。

それが不器用なのは分かっている。

しかし、白雪はそれを目の前で人が死ぬのを見たからだと解釈するところ以上は何も尋ねなかつた。

そうして、部屋に着くとキンジが部屋のドアノブを触れようとするが、アリアがそれを止めた。

「なんだよ！ アリア！」

「何かおかしいわ……」

そう言つと、アリアはガバメントを抜き放ちドアをゆっくりと開けた。

キンジも最初は仕方なく付き合つていたが玄関に入った時点で何かが紛失している事に気付き、ベレッタを抜いてアリアに続く。浴室、リビングを見て行くが何かが紛失した違和感はあるのだがそれが何か分からぬ……

そんな中粉雪は嫌な予感がして一人、フィアナの部屋に向かつた。

ドアを開け放つた先にあつたのは何も無い空き部屋だった。

「おい？ 粉雪、そつ…………何だよコレ…………」

キンジもフィアナの部屋に入り、始めて違和感に気付く。

フィアナの私物が一切無いのだ。いや、それだけでは無い。生活痕すら綺麗な抹消されている。

キンジは急いで携帯を手にすると教務科に電話をかけようとするが盗聴の危険も考えると携帯を強く握り締めた。

アリアと白雪もやつて来ると部屋の変わりように言葉を失っていた。「生活感すら無いじやない…………存在していた事実すら抹消するつもり？」こうなると、教務科が私物を押収した可能性は無也そうね…………

「あいつの私物はこの脇差だけか…………」

フィアナの持つていてる淡雪と呼ばれる脇差だった。

だが、そこから繋がる手掛けりなど存在せず完全な手詰まりだった。こうなつた以上は何があつたのか全容を明らかにしたいが何一つ手掛けりが残つてない現状では足跡すら辿れない。

アリア達は何も出来ない状況に落胆しているとチャイムが鳴る。

キンジが溜息混じりに玄関を開けるとそこには拳動不審の門倉愛紗がいた。

「あの…………これを…………フィアナ先輩からキンジ先輩か白雪先輩に渡すようについて…………」

愛紗はキンジにそう告げると一枚の封筒を渡そうとするがそれを横から搔つ攫われた。

「何するんですか？」

愛紗は振り返り叫ぶとそこにはぼさぼさの髪を搔き通りながら封筒を破りさる黒渕の姿があった。

その光景に思わずキンジは掴みかかるが掴むより先に投げ飛ばされる。

「これが、君らと私の実力差…………お前にあいつは救えない…………」

破かれた手紙が宙を舞いながらゆっくりと落ちて行く。

その一枚片がキンジの手に落ちてきた。

それを握り締めると再び立ち上がり、黒渕を掴みかかる。

「実力差とか、救うとかなんなんだよ！意味がわからねえよ！あんたが誰なのかは知らないが、あいつは…」

「知らない方が良い事も世の中あるのよ…… フィアナ シュトレーゼは本当に笑っていたのかしら？」

それはまるでフィアナがフィアナという仮面を演じ続けていたと断言するような口調だつた。

黒渕の言葉にキンジの手は襟首からゆつくりと落ちていつた。

「アレはスペックが高い割には精神が脆弱過ぎた……けれど、今回の件でもしも生きていたらもう戻れない域にまで墮ちるでしょうね……それが分かつたら忘れる事ね…… 今回の事は……」

そう言い残して立ち去ろうとするが、その前に粉雪が立ちはだかる。そして、持つっていたフィアナの携帯を突き付けた。

それを見た黒渕は面倒臭そうに頭を搔き鳶ると粉雪の頭に手を乗せた。

粉雪の目からは涙が浮かんでおり、この写真の意味は知らないが薄々勘付いている事に気付く。

「その写真のようになりたくないなら関わるな…… あいつの隣に立つ覚悟が無いなら邪魔だ……」

覚悟所か、好意すら粉雪は抱いていなかつたが一発位ビンタをお見舞いしてやらねば気が済まなかつた。
人を巻き込むだけ巻き込んで一人で全てを背負つて闇に消えるやり方が気に入らなかつた。

「覚悟はありませんが、十発位張り倒してやらねば気が済みません！」

粉雪の宣言にキンジは驚き、黒渕は呆れ返つていた。

「張り倒すか！あいつを張り倒す…… 面白いじゃない！名前は？」

「星伽粉雪です！」

粉雪は黒渕の威圧感に負けずに真っ直ぐに前を見据えて叫んだ。

「そう……機会があればまた会いましょう？」

そう告げると階段の方へ歩き出すが、立ち止まると振り向かずに告げた。

「そりそり、建前と真意を履き違えない事ね……あいつは基本的に嘘は吐かないけど、真意は話さないから……多分、その封筒の中身は白紙だった筈よ？」

それだけ告げると黒渕はさつさと姿を消した。

残された愛紗はバラバラになつた手紙を集めがその際中に本当に何も書かれていない事に気付く。

だが、水が乾いたようなシワがある事や何かを書こうとした筆跡が存在していた。

「なんなんだよ！一体！」

キンジは廊下の壁に勢い良く拳を叩きつけた。

「こいつ、生きてるの？あれだけ出血してて……」

「ギリギリって所だな……だが、まだ死んではない……それ位分かれよ……姉さん……」

「サンプルとしては惜しい存在ですね」

「それ位なら私でも分かるから！そこまで、バカじやないからね！ただ、死に体だじやないかつて話！てか、サンプルつて相変わらずの変態だよね？……流石、吸血鬼！」

「まあ、後は本人の生命力次第だろ？ああ、患者に手を出したら殺すぞ？変態……」

「やれやれ……出しませんよ！貴方達二人と真つ正面から当たるのは幾ら私でも避けたいですからね」

そんな会話が交わされる狭い室内の中で銀髪の少年が人工呼吸器を装着されて眠つていた。

「まあ、変態はいいとしてこいつの体なんだ？おかしいだろ？土台がアレだ！お前の親戚か？」

「勝手に親戚とか作らないで下さい……ただ、この遺伝子から見るにロシア系とアジア系のハーフですが……何かの末裔でしょうか？」「いや、それを私達に聞かれても困るよ……まあ、名前はフイアナシユトレーゼだつてさ！服に書いてたよ？」

「バカだな……偽名に決まってるだろ？わざわざ女装してる辺り……」

「まあ、中には女装してる人もいますがね……」

「誰の事かしら？」

その言葉に狭い室内の空気が凍りつく……

「えつ？カナさんの事じゃないの？」

「バカ姉！何言つてるんだ！」

「誰もカナさんとはね……」

「それで？コレをどうするの？公安の課に追われてるらしいけど……」

「公安の課？ならテロ屋でしょうが？」

「公安に追われる程なら我々のデータベースに何か情報があると思いますが……」

「あつ！もしかして、カナの親戚とか？女装してパワーアップする変態繋がりで！」

カナはそれを聞いて塞ぎ込んでしまう。

「まあ、カナさんは置いといて氣絶したらしく海水も飲んでいないのでその内目が覚めるでしょう。なので、カナさんが面倒見て下さいね！」

「なんで、私が？」

「なら、カナさんが姉さんの面倒を見ますか？」

「はあ、仕方無いわね……」

こうして、バカ子とフイアナを天秤にかけてカナがフイアナの面倒を見る事になるのだった。

おひた花は露と消え（後書き）

感想待つてます

不穏なる幕開け（前書き）

吸血鬼には速攻で離脱して貰いました。
まあ、原作のままもなんなんでも……

不穏なる幕開け

「それで? キー君から私を呼び出すなんて珍しいね? もしかして、イイ事でもするの?」

ブランドから理子の母親の形見を取り戻してから数日が経ち、じりじてキンジは理子をファミレスに呼び出したのだった。アリアも同席しているのだがそれを無視して理子はキンジにベタベタとくつついて来る。

それを向かいの席の粉雪は白い目で眺めていた。

「違う! 少し理子の力を借りたいんだ!」

「キー君の頼みならいいよ? 何かな?」

更に胸を押し付けながら迫る理子を必死に引き剥がそうとするキンジは粉雪に目で合図を送るが粉雪はそれを無視して一人知らん顔でジューースを飲み続ける。その横では今にも沸点を通り越さんばかりに手を震わせているアリアがいた。

「いつかの決着を着けてあげよつかしら?」

拳を震わせて口の端を釣り上げながらアリアは理子を睨みつける。しかし、ここでアリアと理子が戦いを始めたら話が前に進まない。キンジは無理矢理引き剥がす事に成功すると粉雪から受け取つていた携帯電話を理子に渡す。

理子はソレを受け取ると適当に操作するが、指を止めてキンジを見た。

「おかしな点なんてないよ?」「レ?」

「消されたデータを復元する事は出来るか?」

現在、ファイアナについて唯一残された手がかりはこの携帯電話だけであり、中にある消失したデータは何があつたかを知る上で手がかりになると踏んでいた。だが、手紙の時に現れた黒渕なそのあんなの事もあり危険が付き纏う可能性があり任せられる人間が存在していなかつた。

「出来なくも無いけど、それをしてどうするの?キー君はフリーを撃つた事実は変わらないんだよ?撃つて遺体すら見つからぬ状況で消えたデータを復元してまでフリーの過去を暴く意味はあるのかな?私はそうは思わないけど……」

「はあ、あんたも知ってるでしょ?警察関係者が何者かに襲われて惨殺したいになり発見される事件……もう、五件目だけど調べたら全員が心臓を潰され、背骨を折られてるのよ……外傷が他には無い事も踏まえると一撃で……まあ、ここまでなら普通の獵奇殺人なんだけどその被害者が全員が共通する点があつたの『公安』に在籍していた。」

理子はその言葉に嫌な予感しか思い浮かばなかつた。

公安に真っ向から喧嘩を売るなど愚の骨頂だ。藪を不容易に突けば虎が出る。血に餓えた人喰いだ。人殺しすらも許容された闇の公務員が全力を上げるだろう。いや、もしかしたらその被害者も“公安0課”の人間なのかも知れない……

「それで?この携帯とその事件がなんの繋がりが?」

その一つに全くの接点らしき物が見えて来ない。

もしも一点が繋がるなら今の猟奇殺人の犯人がフイアナ シュトレーゼと言つ位でなければならない。

すると、アリアは一枚の写真を理子に見せた。

「この人……あの時の……」

写真に写っていたのは立花繚乱と黒渕零理のツーショットだった。それを指差しながらアリアは説明を始めた。

「この一人は半年前にアメリカに渡ってるけど、この立花繚乱は教務科で話を聞いた限りでは公安の課所属らしいの……それで、フイアナとも面識がある……」

「つまり、公安に関わって消された……それに関わる利点が私に何があるのか？ ホームズ？」

危ない橋を渡るのは勝手だが巻き込まれるのは續に障る。理子は携帯をキンジに返して席を立つた。

「行方不明……あれだけの傷でどうやって脱出したんだよ……

医務室から忽然と姿を消した少年の搜索に艦内を探し回るが全く手がかりは無い。

だが、傷は縫合したが抜糸が済んでおらず、定期的な抗生素の投与を行わなければ破傷風に感染する可能性もある。

「ダメね……こつちにもいないわ……」

「ブランドの野郎に着いて行つたか……逃げ出した以上は俺の患者じゃないがあの変態が連れ出した可能性もある……あの遺伝子オタクが田を輝かせてたしな……」

頭を搔き荒る白衣の男はやうせびがると溜息を呑く。

ブランドが連れ出したとする、地上に出で一田は経つてゐる推測になる。

長引けば長引く程に発見は困難になる上にブランドは牢獄の中だ。真っ正面から馬鹿正直に面会に行けるよつたな場所では無い。

「仕方無いわ……私が仕事の着いで探し出して連れて来る。監督ミスがあつた事は認めざる終えない訳だし……」

「憑……」

カナは何でも無いよつて叫びると真剣な眼差しでこいつ尋ねた。

「それで?教授の様子はどうなの?」

カナの言葉に白衣の男は少やく首を横に振る。

「このままだと戦争は避けられないだろうな……まあ、戦争は回避出来ないにしても最低限の犠牲には抑えられる筈だ……まあ、俺はおまえの義には興味ねえし、どちらに付く気は無いが来るなら叩き潰すそれだけだ」

白衣の男はそれだけ言つとわかつたと医務室へと帰つてしまつ。

残された力ナも自らの目的の為に動き始めた。

「ま、待てよ！俺じゃねえ！俺は何もしつ」

闇夜に銀髪を靡かせた妖美な笑みを浮かべる少女は必至に抵抗するスーツの男の首を糸も簡単に折り曲げると近くのゴミ箱に放り投げた。

「これで八人……まだ、私の渴きは癒せませんね……魂の渴きが……ああ、そうだ心臓を潰さないと……」

横たわるスーツの男の右胸を踏み碎くと夜の繁華街の人波に姿に紛れ込む。

何故、彼らを狙うのかは思い出せないが彼らを殺せと頭が訴えて来る。

そして、殺すとワザと発見される場所へと遺体を移動させる。それに何の意味があるのかは分からぬが体が勝手に行っていた。まるで、何かを誘き出す撒き餌のように東京都内の至る場所にばら撒いて回る。

「ああ、まだ渴きは癒ない……ああ、本当に殺し足りない……」

そんな言葉が風に流れて、風の中に消えて行った。

不穏なる幕開け（後書き）

感想待つてます

なんか、オリキャラが完全に暴走してますが……

狗（前書き）

短いのはスランプだから！

狗

「逆辻さん……これで八人目です……」

恐る恐るスージを着た男の一人が、一際異彩を放つ暴力の権化のような逆辻に告げる。

すると、面倒と言わんばかりに頭を搔き遺体を蹴り飛ばした。

「つたく、ゴミが仕事増やしてんじゃねえぞ！ただでさえ、あの女が帰つて来たんだぞ？それで、何か判明したんだろうな？公安〇課ばかり狙つような命知らずが誰か！」

「今の所は、首を背後から折り死んだのを確認した後に心臓を潰す手口で全て同一犯であり、CQCが使える事から元軍人かそれに類する者の犯行かと……既に一人一組の行動を心がけるようにとの伝令を出しています」

その言葉に逆辻は近くのスージの男の襟首を掴み、一気に引き寄せる

ると徐々に締め上げる。

「んな分かり切つた事なんざ誰も聞いてねえんだよ！そんなもん一々報告しなくても分かるからな！それに、何かつてに一人二組の行動を心掛けろなんて伝令出してんだ？お前らは炙り出す為の消耗品だろうが！分かつたら全員に発信機を飲み込ませてマークしろ！」

逆辻はそれだけ命令するとスージの男を近くのゴミ箱に投げ捨てた。完全に逆辻にビビっているスージの男を無視して逆辻は死体を見下した。

逆辻は別に部下を殺された事をイラついている訳ではない。

そうではなく、消耗品を勝手に潰した拳銃に中途半端な芸術品にしか仕上げていない事にイラついているのだ。
まるで、相手に死という恐怖をジワジワと味合わせて追い詰める手口……

「分かつちやいねえな……死が最大の恐怖じゃねえんだよ」

逆辻はそう呟くと大通りの方に目を向ける。

そこに居たのは左遷されて戻ってきた黒渕と立花の二人だった。
一人の登場に逆辻は舌打ちすると立花を睨み付けた。
だが、立花はそれがなんでも無いように軽く流すと逆辻に尋ねる。

「クロヒ フローレアに何をしたの」

立花から出た言葉に逆辻は腹を抱えて笑い始める。
その様子に全てを悟った黒渕は逆辻に発砲しようとするが、立花が黒渕のベレッタM85のスライドを掴むとそれを制止する。

「おいおい……あいつに同情でもしてんのか？使い潰して殺してやつたよ」

「やう……」

立花と逆辻は互いに睨み合ひ。

今にも一触即発で戦闘が起こりかねない状況に黒渕はトリガーに手をかける。

「貴方だけは私が潰してあげるわ……」

それだけ逆辻に告げると立花は殺氣を収めてその場を後にする。

黒渕も逆辻を一睨みするとベレッタM85を収め、立花の後に続いた。

その後ろ姿を睨みながら逆辻は空を見上げるとじんよつとした真っ黒な雲に覆われていた。

「ふははははは……おもしれえ！おもしれえじゃねえか…やつぱり、じうでなくつちやな…やつぱり、最高だぜ！立花！」

おい、全員に伝えろ！第一次戦闘体制を取れ！戦争を始めるぞ！」

田が血走った逆辻の言葉にスースの男は激しく頷くと急いでそれを伝える為に走り出した。

狗（後書き）

なんか、スランプ
うん、スランプ
感想待つてます

獵のはじまり

「「あんな、わざわざ買こ出しに付き合わせたりしちゃって」

雨の降りそうなドンよりとした空の下で両手に買い物袋を下げた中空知が申し訳なさそうにジャンヌに告げた。

それに対してもジャンヌは溜息を吐くと逆に最近元気が無い中空知を心配し始めた。

「別に相部屋なのだから気にしなくてもいい。それより、何か分かったのか？」

中空知はジャンヌの言葉に静かに首を横に振る。

今まで隣で仲良くしていた人間が何者かに狙撃されて死亡したと聞かされたのだ。今だに気持ちが整理出来ないのだろう。

その上、何故かフィアナの持ち物は何時の間にか接收されてしまつており、何があつたのか調べる事すら出来ない。

教務科に対して調べさせて貰えるように申請したのだが、接收していらないの一点張り……

何より、フィアナがまるで存在しなかつたような扱われ方は中空知にはショックだった。

「そりが……（あいつの言動から判断すると何らかの組織に所属し、消されたと判断すべきなのだろうが……腑に落ちない……あれだけの力量を持つなら何故、今までイーウー内で話題にも上がらなかつた……何より、ブランド辺りならフローレアの血統を嬉々として確保しようとする筈だ）」

ジャンヌの中でも今だにフィアナという存在が上手く定義されてい

なかつた。

状況から何か大きな闇に殺されたのは確かだが、この手の連中は首や心臓を落としても生きている場合がある。良い例と言えば、ブラドのような吸血鬼だが、人間にとっても闇に生きれば生きる程に殺した筈なのに生きている事が結構な割合で存在するのだ。

「……」「ん？ 」

ジャンヌに下を向きながら謝つて いる と ジャンヌが突然、足を止めた事に気付いた。

?

(何が どう がが お 姫を)

- 7 -

（やはり生きていたか……あの程度で死ぬ筈が
無いと思つていたがな）「

ジャンヌが誰かと語感からロシア語で会話しているのは理解出来たのだが、中空知にはその内容は理解出来なかつた。

知り合いにバツタリあつたなら邪魔しては悪いと思い、「先に帰つてるね！」と、伝えようとしたのだが振り返つた先にあつた光景に中空知は両手から力が抜け、買い物袋の中身を地面にブチまけてしまつた。

？（生きていた？お前、誰だ？）

「誰だと？貴様！あれだけ、人の事を罵倒しておいて私を忘れたの

か！」

まるで本当に知らないとばかりに惚けるフィアナの姿に思わずロシア語から日本語に話す言葉が変わっていた。

服装こそ違うが、長い銀髪に透き通った水のような淡い水色の瞳はまさにフィアナ シュトレーゼそのものなのだ。

しかし、まるで別人と言わんばかりの態度にジャンヌは人違いか？と一瞬疑ってしまう。

「

……

？（夜ももう遅い……今宵は何やら血生臭い狗が彷徨いていますので早めの御帰宅をお勧めしますが、遅かつたようですね？）「

その言葉に辺りを見回すと何やら不自然なまでに人の気配が消えていた。

状況に気付いたジャンヌは咄嗟に中空知の前に立つとフィアナ？を警戒する。

「

……

……（はあ、私はた

だ獲物を狩る血に飢えた狼……魂の渴きを潤す為に殺戮する獣なり……）「

まるで、誓言の如くそつそつと懐からだしたナイフを長い舌でペロリと一舐めする。

「フィアナ！何言つてゐの！みんな心配してゐよ。」

「見るな！美咲！あいつはお前の知つてゐる奴じゃない！」

必死に叫ぶ美咲の肩を掴み、転がつた買い物袋の中身をかき集める
と急いで離脱しようとする。

フィアナに呼びかけ続ける美咲を抱えると急いでその場から走り去
つた。

美咲を守りながら戦える相手では無い事を経験から感じ取ったのだ。
数も力量差も判明していないがただ、確実に魔女であるジャンヌが
本気を出さなければヤバい相手が潜んでいる。

その第六感的な感覚がジャンヌを咄嗟に動かしたのだった。

「いい加減出て来いよ……もつ、『撒き餌』は終わりだ……こつか
ら先は獵の時間だ……」

そう告げると高らかに嗤いながら、体を僅かに反らした。
何がそこを通つたのに遅れて銃声が響き渡る。

銃声の遅れ具合から判断してスナイパー……

距離は直線距離で一km先といった所だろう。

「おーおーおー……馬鹿ですか？殺氣が籠りすぎなんだよ……私は
ここに居ます！なんで、立て札つけて道案内ですか？」

そう小さく呟くと闇に潜むまず一人目

戦局において、状況を打破する要になりかねないスナイパーに目標
を選定した。

獅のせじめり（後書き）

感想待つてます

狼の血筋

「遠山ーーいるか！」

その大声と共にジャンヌは放心状態の美咲を引き摺る形で遠山キンジの部屋へとチャイム無しで上がり込んだ。

「あー……！」
「いるが、どうかしたのか？ジャンヌ？」

いきなり現れたジャンヌの様子がおかしい事に気付いたキンジはそれとなく何があつたのか尋ねようとするがキンジが室内にいる事を確認すると放心状態の美咲をキンジとアリアに預けてその場を後にしようとする。だが、いきなり様子のおかしい中空知美咲を預かるのを了承など出来る筈が無く、アリアはさっさとこの場を後にしようとすむジャンヌの手を掴んだ。

「ちょっと待ちなさいよー説明ぐらいしてもいいでしょー！」

「悪いが、そのような暇はない……」

神崎アリアなどに構つてゐる時間が惜しいと言いたげにジャンヌはその手を払いのけるが、アリアがそれで引く訳が無く、ジャンヌの前に立ちはだかった。

「悪いけど、説明されないと納得できないし受けられないわー！」

「お前達ではアレは止められない……だが、護る事なしだるだろ
う……美咲を頼む」

ジャンヌの意味深な言葉にアリアは首を傾げて、最中にジャンヌはアリアの横を通り抜けて部屋を退出してしまった。それと入れ替わるよつこ理子が部屋へと上り込んで来た。

「あれ？ ジャンヌどうしたのかな？ 何か深刻な顔してたけど…… キー君、ジャンヌって何の用事で來たの？」

「ああ、ジャンヌのやつ…… 中空知を押し付けて行っちゃったんだよ……」

「へえ…… ああ！ そういう事か！」

「何か知ってるのか？」

何やら一人納得し始めた理子は情報を欲しているキンジをまるで捕食者のような目で見ながら、軽く舌なめずりをし、ゆっくりと近くぐと自らの胸を押し付ける。

「キー君が理子とイイ事してくれたら…… おしえてあ・げ・る」

「遠山様…… 何をしてらっしゃるのですか？」

「いや！ 待て！ 落ち着け！ 粉雪、これは違う！」

粉雪からまるで汚らわしいモノといつ視線が突き刺さる中で必死になつて理子を振り解いた。

「キー君つまんなーい！ まあ、ブリヂの件でキー君には貸しがある訳だし…… アリアにはないけど、仕方ないから教えてあげるね！」

「待ちなさいよ！なんで、私は奴隸より活躍してたじやない！」

「まあ、アリアはほつとてーー聞いたり後には引けないと思つけど聞きたい？」

理子が先程までの口調とは違つ真剣な口調にキンジは粉雪に目を向けた。

粉雪は武健では無い一般人であり、白雪の妹だ。不用意に危険に晒す真似は出来ないと判断したアリアとキンジは粉雪に今は部屋の主を失つたフィアナの部屋で中空知の看病をするように言い聞かせ、それを確認すると理子に了承の合図を送つた。

「キー君とアリアが前に言つてた公安殺しの掃討作戦が決行されるらしいんだよね……今日の午後七時……だから、ちょうど數十分前かな？ターゲットは“クロエ フローレア”」

「クロエ フローレア？フローレアっていうと暗殺者の家系だけど潰れたつて噂じゃない！意外ね、あんたが『デマなんて拾つて来るなんて……』

「あれ？？デマ？私が言つてるのは事実だよ？それこそ、アリアの方が時代遅れって感じ？まあ、アリアの方は置いといて、暗殺者の最高傑作と謳われた最後のフローレアの系譜には実は息子がいたらしいんだよ……」

「それが、今回の件と何が関係あるんだよ……」

未だに点と点が繋がる線が見えてこない話にキンジは首を傾げるが、理子はその様子を全く気にした素振りすら見せずに続けた。

「じゃあ問題ですー、フイーはなぜ公安と繋がっていたのでしょうか？」

理子の言葉にある仮説がアリアの頭に浮かび上がるがアリアはそれをすぐに首を振り否定する。

それを肯定すれば今回の事件に対してもう一つの答えが見えて来るがそれは余りに残酷な結論だからだ……

「フイーが東京武偵校に編入したのは去年の中盤……そして、その少し前に公安が介入した事件があるんだー」

「ロシア系暗殺結社が絡んだ事件……確かに、首謀者の殺害で話は終わつたらしいけど……」

アリアの答えに理子は小さく頷いた。

「そう……その事件に絡んでたのがフイーであり“クロエ・フロー・レア”だつたつて訳で、用済みつて事で消された筈なんだけ生き延びちゃってたから今度は全勢力で潰そうって事だよ？で、どうするのかな？キー君はフイーを撃つた……それは敵対したつて事だよね？」

「そ……れは……」

確かに自分の銃弾はフイアナを撃ち抜いてしまった。それは決して逃げようのない事実でしかない。ただ、理子からすればそれは彼なりの優しさなのだと考えていた。もしも、次に会うとしたら犯罪者と武装探偵でありこの二つの間には敵対関係しかない。それを考えた上で躊躇わないようにといった意味だったのだろう。

「なんで、ここまで調べたの？」

「実は……私は、飛行機ジャックする前にフイーに正体見破られたんだーしかも、チャリジャックの時点で内部犯の可能性を重視して、バスジャックでそれの洗い出し……そして、フイーは止めたのにフライトを止めずに第三の事件を見過ごした……しかも、この私に犯人であるという答え合わせまでさせたんだよ！確かに……危ない橋を渡るのは御免被るけど、よくよく考えたらあいつを一発負かしてやらないと気が済まないからさ……」

理子の話に意識が行き過ぎていてキンジもアリアも気付けなかつた。

「この話を粉雪が聞いてしまつていた事を……

理子の話が終わるとキンジはもう一度、真正面からフイアナと話をするためにフイアナを追う事に決めた。確かに、今までのフイアナは演じていたのかもしれないが紛れもなくここにいたのも事実だつたからだ。一言で一笑されるかもしれないが、それでも、バスジャックの時、デュランダルの時とキンジやアリアの力になってくれていたのも確かな事実だ。

「悪い……粉雪…少し出で来る…」

そう言って、キンジは中空知を寝かせた部屋へと向かうがそこには中空知が眠っているだけで粉雪の姿は見えなかつた。

「キンジー！ドアが開いてる！それに、粉雪の靴が無い！」

「おー！嘘だろー。」

アリーヤとキンジは急いで飛び出していったと思われる粉雪の安全を確保するために雨のぱらつき始めた夜の街へと飛び込んでいった。

狼の血筋（後書き）

あとがたり

「はあ……本当に彼は手がかかるわね……このまま公安とぶつかった場合、どれだけ死者が出るか分かつてのかしら……」

カナの心情からすればどちらの被害もなく終わらせたい。だが、既に走り始めた物語を中心に立つていない人間が操るなど到底不可能な行為だ。出来るとするなら、犠牲を最小限に止める事位だろう。それにしても、公安〇課という実力者を止めるのは並大抵の事では無いのだが……

「それえ、貴方は敵ですか？味方ですか？」

「本来は敵と言いたい所だけど今のこの状況では味方かしらね？これ以上暴れられたら色々と問題だし、貴方はアレを回収、私はこの事態を收拾で手打ちかしら？」

闇の中から現れた着物の女性はカナにそう提案するとカナは小さくため息を吐くと、小さくそれに頷いた。

感想待つてます！

血に染まる夜

月明かりに照らされた路地には生きているものは一人もいない。

人の姿すら失ったソレが無残に転がるだけだつた。

壊れた玩具のように破壊されたソレらあどれを取つても同じ壊れ方はしていない。

まるで、それを使い微温湯に浸り錆びついた腕を慣らすように……

「『キブリ』のよう湧いてくる……身の程を弁えない愚か者……まあ、鈍りきつた腕を慣らすには丁度いいか……」

フィアナはそう咳きながら血で真っ赤に染まつたナイフを軽く拭き取る。

僅かに横へと跳んだ。

すると、先程までフィアナのいた場所に銃弾の嵐が襲来する。弾幕を張られて近寄れないことから考えると機関銃の一種と判断できるが現在、弾が当たつて破壊されたモノを見た限り重機関銃。それでも、『無痛ガン』の可能性がある……認めたくないが……

「アレ? ここ市街戦だよな……容赦無さ過ぎだろ……戦争でもする心算ですか? てか、そんな装備が配備されてたことがすでに驚きだよ……」

最大毎秒百発の速度で放出され、当たれば痛みを感じることもなく死んでいくと名高い上、軍用ヘリに搭載する武装……つまり、上空から目視された時点で銃弾の嵐が襲つてくるという事実に苦笑いを思わず浮かべてしまう。

元より闇にまぎれての行動になれている為に問題はないのだが、邪魔である事には変わりない。

逆辻の事だから軍用ヘリに搭乗しているということはまず考えられないが、ヘリから目視出来る場所にいて目の前で倒れ伏せた所を踏み砕こうとかいう悪趣味な作戦を平気で建てるよつな男だ。

しかし、今のフィアナの装備ではまず軍用ヘリを落とすには射程が足りない。

携帯式地対空ミサイルがあれば楽に落とせるのだがそれがない以上は操縦者を狙撃するかテールローターを破壊するしかない。ただ、その場合狙いを外せば田出度く肉片になるという結果が待っているのだが……

「狙撃に関しては装備の方は回収で問題ないが、位置取りとミスが許されない状況か……さて、どうするべきか……アレを落とせば次が来るのは考えにくい……つまりは、一機のみの配属と考えるのが妥当か?」

そういうふう考えているうちに銃弾はピッタリとやんだ。

恐ろしいまでに静かになつた路地を手鏡で確認するとほかの場所を旋回し始めるヘリが確認できた。

その隙にフィアナは更に闇の奥へと踏み入れる。
先に待つ男に対する復讐の為に……

「これ……血……」

粉雪は田の前に広がる光景に座り込むと畠の中のモノをすべて吐き出してしまつ。

田に映るのは形を失つたヒトだつたモノと噎せ返る血の香りだけだ。

血で真っ赤に染まつた路地は異界を想わせるほどに現実だと認識できなかつた。

胃の中が空になつた粉雪は一歩ずつその異界へと足を踏み入れる。一方通行、入れば最後出口の無い闇へに支配された血で血を洗う世界がまつてゐるとは知らずに……

一方、ジャンヌはと言つてデュランダルを片手に公安の命令で地区の封鎖を行つていた警官の強行突破を試みていた。

粉雪がこの網にからなかつたのはただ、力ナガ用いた侵入経路に偶然迷い込んだからに過ぎないのだが、もしもそこに迷い込む事が無かつたら侵入など出来なかつただろ？

いくらジャンヌがイーウー最弱と言つても、警官程度の場数とは比べ物にならないほどの経験を積んでゐる。それは、赤子の手を捻るに等しい行為でしかない。

「一応、司法取引をした身だから氣絶程度で済ませたがここから先はそうは言つてられなさそうだな……」

裏の世界において重要な事がある　人を殺した事があるか否かだ。

殺した経験ではない。

殺すという選択肢が選べるか否かだ。

殺さずの精神は確かに良いかもしれないが、それでも選択肢に無いとなると最後の一線で躊躇する事になりかねない。

漠然たる実力差があるのならまだ問題は無いがその差が縮まつてくると話は変わる。

その戸惑いこそが命のやり取りで自らの死を招く事になる。

この先にいるであろう血に魅入られた魑魅魍魎相手を殺さずに進

むのは難しい。

ただ、忘れてはならないのは目的がファイアナの確保である。敵を殺す事が目的ではないことを忘れてはならない。

「奴の事だから、ここから目視出来る軍用ヘリを破壊することを上位に置いて行動するとすれば、装備と有効性を考えると操縦者の狙撃か？」

ジャンヌはそう呟きながら戦場へと足を踏み入れる。

まずは、狙撃可能箇所を虱潰しに当たる事を念頭に置いて……

血に染まる夜（後書き）

軍用ヘリ……やり過ぎたかなwww
ちょっと重機関銃を出したかつただけだつたり
お蔭でこの区画はフィアナにとつて見える物は全て敵状態
それに、粉雪が紛れ込んじやつたり……
感想待つてます

正義の味方（前書き）

力ナが若干ミスつた気がします……

正義の味方

- 『 1 定位置につきました』
- 『 2 了解』

公安の課の中でも逆辻の部下は他の部下とは意味が違う。本来なら機能しないであろう犯罪前歴者の部隊それを部隊として成立させているのは他ならぬ逆辻の実力あつての事だった。

故に駒としての価値は無く、捨て駒——消耗品に過ぎない。ただ、前歴者という事もあり他の部下とのレベルは格段に違う。殺しに迷いは無く、狹犬のように忠実に命令を実行する。

長く生きるには命令に従い確實に実行する。

それが出来なければ命は無い。

簡単明確なルールに支配された世界だった。

- 『 3 ……目標を確認……ヘリの死角に隠れながら移動中……』

「 3！目標の目的地は分かる？ 駆を張るわ！」

現状の装備では目標がヘリを撃墜出来ないのは明白であり、武器の回収は確実である。

つまり、以下の目的は狙撃手からスナイパー・ライフルを奪取しなければならないが、現在配備されているのはVSSとU.S M16と重機関銃を装備した軍用ヘリとやりあうには心許ない。だが、対物ライフルや長距離を狙えるスナイパー・ライフルは部隊の性質上配備されていない。そこから考えると、目標が確実にヘリを撃墜するにはテールローターの破壊になる。

「 1と 2は狙撃可能地点を見張れ！但し、交戦はするな！ 3はそのまま距離を開けて追跡しろ！それより、 4はどうした？」

『 4……立花繚乱と思われる女に逃げられまし！何してやがる！くそガキ！』

それだけ聞こえると無線が切れた。

「鬼ごっこか？だが、残念だつたな！捕まつたら終わり……地獄行きだ！」

特殊部隊を思わせる重厚な装備をした男がじわじわと粉雪を追い詰めていた。

粉雪としては隠れてやり過ごすつもりだったのだが、夕食がまだだつた為に腹の虫が鳴いてしまい見つかってしまったのだった。
確かに星伽の巫女だが、相手が殺しすら容認される人間になると話は別である。

結局、今の状況で物を言つるのは経験の差

つまりは場数の差が歴然の差となるのである。

いくら、将来有望なルーキーに足りない経験の差で才能を埋められる。

「いや！来ないで！」

「ガキをやるのは矜恃に反するが、まあ仕事だ……死んでくれや」

正義とは曖昧だ。

時として正義は弱者を見捨てる。

公安の課……特に逆辺の部下であるとはそのような仕事が回りくることしかない。

言わば、残党狩り……悪く言つて敗戦処理
目撃者は居てはならない日常の闇に潜む部隊……
まともでいればいる程に壊れて行く世界……
それが粉雪が足を踏み入れてしまった世界だった。

だが、正義の味方は存在する

義に生きる

そんな苦行の道を会えて選ぶ愚か者が

男の持っていたVSSは宙を舞い床に落ちる。
何があつたのか粉雪は理解できていなかつたが、4は理解した。
数年前の武偵殺しで公式に死亡したとされる亡靈

遠山金一

「死者の国からでも蘇つたのか？」亡靈？

「隠している武器を捨てて投降しなさい！でなければ、死ぬわよ？」

フィアナの行動理念を推測するに全てを壊し、殺すまで止まらない、
止まれない。
ならばこそ、被害を最小限に留めるには先に舞台から降ろす以外に
方法は存在しない。

だが、この場でそれは何の意味もなない。

なぜなら、それが逆辻という男のやり方だからだ。

「残念ながら、それは断る」

「なぜかしら？」のままだと貴方もアレと同じになるわよ？」

「理解してないみたいだから教えてやるが、逃げた所で俺達は死ぬんだよ！なら、喰らい付くしかないだろうが！」

喰らい付くしか無い

その言葉が全てを語っていた。

闇に紛れる意味

それは、力ナの考えより更に深い闇なのだ

あの男を真に理解していない力ナには絶対に理解出来ない事

「だから、その子を殺すの？」

「生きる為には仕方無い……それが、生存するつて事じゃ無いのか？生きるつてのは奪う事と同義だ。だからこそ、俺は明日を得る為に奪つ……それしか道はないからな！」

カナはその言葉に説得は無駄だと理解するとそれ以上、言葉にするのを止めた。

全ては一発の弾丸が判断する。

VSSのサブウェポンとして配備されているファイブセブンを 4

はカナに向けようとする。

だが、それよりも早くカナの見えない弾丸が 4を襲つた。

本来なら避けられる弾

だが、それをあえて 4は真っ正面から受けたのだった。
そして、カナを突き飛ばした。

その後、目の前が赤く染まつた事でカナは状況を理解した。

「おいおい！なんですか？この状況は？」

そこに居たのは現公安の課を支配する逆辻
彼を知る者は彼を

狂人

魔人

悪魔

そう呼ぶだろう。

彼にとつて味方はいない。
敵は居ても味方はいない。
あるのは、利用する駒だけだ。
人の命も滓同然に扱う。

それ程までに壊れた人間だ。

だからこそ、カナにとつて……義を貫く者にとつては許せない存在

と言えよつ。

「つたぐ、あの牝狐が忍び込んでやがると聞いてくればマセたガキンチョが一人いるだけかよ！」

「い、げ、ろ……時間稼ぎならしてやる……」

「何言つてゐのー？」

命の灯火が消えかかる中で男はカナに對してやう告げた。
少女を殺さずに済んだ……それだけで十分だった

「お、お、正義の味方氣取つてんじやねえぞ！ テメエはゴリラ属
以下だらうがー！」

「やつ……かも、知れないが少し位なら……夢を見るのも悪くない
……行けー！」

男はカナにそう叫ぶと逆辻に突進する。
カナはそれを合図に粉雪を抱えるとその場から離れる為に走り始めた。
見殺しにするしかなかつた。

敵を前にして足がすくんだ。

どんな状況でも義を貫いた筈のカナが助けられた敵を見捨てて逃亡したのだ。

背後からは苦痛の叫びと銃声が響き渡る。

耳を塞ぎ眼を瞑り、必死に走つた。

そうでなければ、犠牲が無駄になる。

そして、漸く抜けた広場にあつたのはもう一つの惨劇だった。

血の池に、一片の朱に染まらず佇む女性

立花繚乱

逆刃が危惧したのは人望だけでは無い性質、生まれの性と言うのだろうか人を斬ると言つ事に置いて公安で右に出るモノはない

屈指の剣客

たつた一人でも苦戦を余儀なくされる相手を難なく潰していくのだった。

「貴方なら殺さずに出来た筈ですよね……」

惨劇に氣を失う粉雪を担いだカナはそう繚乱に尋ねた。
だが、繚乱はそれを冷やかに嗤つ。

「勘違いしているようだから教えてあげるけど、私の目的は被害が拡大しない事……」をな内輪揉めなどする暇が無い戦争が迫っている……これはその為の布石……」

そう告げると刀についた血と肉と脂を拭き取る。
そして、その布はゆっくりと血の池に舞い落ち、赤く染まった。

正義の味方（後書き）

逆辻は精神的な恐怖かな？

因みにカナはイメージが今ある命を優先
繚乱は逆に未来の命を優先する

四季星は悪を持つて善となすタイプかな？

感想待つてます。

「勘違い……ですか……」

そう尋ねるカナに対して刀を鞘に納めた繩乱はゆっくりと耳元で
いつ告げた。

「逆辻という男を甘く見過ぎですよ？アレはコレを死すら恐れぬ駒
として元犯罪者を利用してる……死ぬわよ？まあ、だから私も鉄扇
ではなく……日本刀を持って来たんだけどね」
「はあ！随分と本気じやないか！立花繩乱！」

その言葉にカナはあわてて振り向くとそこには逆辻が立っていた。
そして、逆辻はにやりと瞳と持っていたソレをカナに向けて放
り投げる。

ソレはカナの前に落ちゅうくりと転がってきた。

「人の頭……」

「ああ！作戦を邪魔するような屑は俺の部下には必要ないからな！
そいつみたいな屑はいくらでも替えが利くんだよ！」

「あいかわらず、いけ好かない声出してんじやないわよ……耳障り
だわ……」

心底胸糞悪げな顔を逆辻に向けると繩乱は刀に手を伸ばす。

だが、周りの気配に気付いた繩乱は刀から手を放すと袖から発煙
筒を取り出した。

そして、それを放り投げると辺りは黄色い煙に覆われる。

そのガスに違和感を感じたカナは息を止めようとするとそれより先に眩暈に襲われる。

「糞が！毒ガスか！」

「ご名答！まあ、犯罪者を迅速かつ的確に無力化するために開発された試作品だからまだ抗体は持つて無い筈よ！」

繚乱は煙に覆われた視界の中でカナを見つけると片手を引いて撤退を開始する。

それと入れ違いになる形で顔をガスマスクで隠した武装集団が現れる。

もしも、視界をガスで覆つてなければ確實に囮まれていただろう。

「立花繚乱及び、未確認人物の逃走を確認！」

「んな事…言われなくともわかってんだよ！状況はどうなつてやがる…」

逆辻は渡されたガスマスクを装着し、いまだにふらつく頭を押さえながら部下に対して怒鳴り散らした。

「現在、目標を追跡中の部隊は半分が死亡、東地区を監視していた部隊は未確認人物の襲撃を受け連絡が取れない状況が続いています……」

「つまり、立花の部下以外にも紛れ込んでるやつがいるって事か…さつさと目的を割り出せ！目的が判らなければ罷も張れないだろうが！」

「ですが、相当な手練れらしく……なかなか姿を見せませんので…」

「…」

その言葉に逆辻は先程、部下から奪つたファイブセブンを突きつける。

「んな事、聞いてんじゃねえんだよ！俺が見つけろって言つたら死ぬ氣で探すのが常識だろ？が！ただでさえ、狗すら処分できねえ癖に一著前に刃向つてんじゃねえぞ！」

「確か……東京武偵校の制服を着ていたのを見たような……」

拳銃を付き着ける逆辻に怯えながらそう告げると先程見た巫女服の餓鬼の事を思い出した。

「ちゃんと報告できるじゃねえか！今日はミスを帳消しにしてやる……ただし、次はないと思えて」

逆辻はそう男に告げるとファイブセブンを下ろした。

その事に安心したのか男は腰を抜かしてしまつ。

それを周りの人間が叩き起こすと即座に班を二班に分けて、一班を未確認人物の排除へ……残りの一班を逆辻と共に狗の追跡を開始する。

(東京武偵校の制服……あの餓鬼の関係者か？いや、狗の方か？)

そう考へてみると元々狗を追跡していた部隊から連絡が入る。

『目標が何らかの目的をもつて行動を開始しました。恐らくはヘリの破壊かと……』

『どうな……位置を教える！』

『そこから北へ三百の地点を北西に移動中』

それを聞いた逆辻は残つた部隊の人間を見渡す。そして、それを

更に一つの部隊に分けた。

「半数は俺と共に狗を殺す！残りの半数は燎乱を追え！」

そう叫ぶと部隊は闇に散り散りに消えていった。

部隊編成（後書き）

本氣で応募用しないとそろそろやばくなつてきた
また、更新が停滞するかも

轟墜（前書き）

なんか、フィアナの扱いがだんだん酷くなるｗｗｗ
そして、粉雪がだんだん私の中でヒロイン化していく
咲の巫女さんが可愛かつたのが原因ですがｗｗｗ

闇の中をフイアナは走っていた。

気配を探るに現状で半径百mには人らしきモノは存在していない。
あるとすれば、成れの果てぐらいだろう。

だが、先程の編成通信を聞くに逆辻は確実に自身を追う部隊を率いているだろう。

そうなると、それまでにガンシップを墜とさなければ逃げ場を失う事になる。

「何人か紛れ込んだらしいが……本当馬鹿だな」

そんな言葉を呴きながらフイアナは狙撃が可能であろう建設中のビルへと急いだ。

現状の装備であるM686では射程が足らない。
かと言って、奴らの装備するP90では確実に破壊は不可能だ。
どうやら、狙撃班は作戦区域外に退去させたらしく先程から出会しているのは突撃銃や短機関銃を装備した連中ばかりである。
そうなると方法は一つしかない。

- - パイロットを潰す

だが、行動に移す事は出来なかつた。

気付いた時にはガンシップのライトに照らされていたのだ。

「ヤバい！」

咄嗟の判断で右に転がり込み、物陰に隠れるがミニガンの前では無意味でしかない。

徐々に近付いてくる銃弾……

その時、ファイアナの目に飛び込んで来たのは建設中だったのが幸いしたのか、下の階への吹き抜けだつた。

そこへ転がり込むと身を低くして息を潜める。

「ミニガン……厄介過ぎるだろ！連射性能に貫通力……シャレにならないぞ！」

そんな事を呟きながら、ファイアナはガンシップが辺りから立ち去るのを待っていた。

だが、今度は前方から銃弾の嵐が到来する。

「見つけたぞ」

銃弾は難なく避けるが、その音がガンシップを呼び寄せてしまう。

「ヒカヒカ、ガンシップ！目標と分隊の交戦を確認！指示を！」

逆辻にガンシップの乗組員が指示を仰ぐが返つて来たのは残酷な通告だつた。

『殺れ。味方』と演せば奴も逃げられないだろ？』

それは挾撃し、背後からミニガンで攻撃する事を意味する。だが、同時に味方をも巻き込んでしまう。

二つの選択

逃げる

撃つ

そして、ミニガンは火を噴いた。

壁を突き破り、飛来した銃弾はその場を地獄へと変貌させる。

血と硝煙が香る残虐なる世界……

フィアナが生き残ったのは幸運に過ぎない。

ガンシップからフィアナが確認出来ず、視認されなかつた為に出ただけだ。

しかし、視認された以上は幸運は続かない。

そんな中で立ち廻っていたフィアナへとミニガンは向けられた。

そして、ゆっくりとミニガンは回転を始める。

「目標を確認……つたぐ、ガンシップとはたかだか一人に椀飯振る舞いね～」

呑気な事を言いながら、うつ伏せになつていていた黒渕はしっかりと暗視スコープでガンシップのテールローターを捉えていた。

ヘリの致命的な弱点 - -

それは、後部のテールローターを破壊されると機体制御が出来なくなる点だ。

本来なら、対空武装を用いるのだが今回それを用いなかつたのはそれが大きかつた。

「私にかかれば一発で十分、事足りる……」

虚構のスナイパーと語り継がれる師から教わった狙撃術……それを用いればこんな戦場に狙撃銃以外は必要無い。

狙撃こそが黒渕にとつての美学であり、生き方だつた。

そんな彼女が今、握っていたのはM82A1 - -

湾岸戦争の際、イラク軍との戦闘時に2'000m先の装甲車を撃破したとの伝説を持つてゐる対物ライフルである。そして、今彼女がいるのもその伝説と同じように2'000m先だつた。

唯一違うのは観測手の不在……

だが、彼女にすればそんな観測手のような他人の意見など邪魔にしかならない。

信じるのは「」の知識と長年のカンのみ

「たかだか、こんな距離……私なら針に糸を通すより容易いわ

そう呟きながら、舌で乾いた唇を舐める。

そして、引き金を引いた。

確實に死んだ。

フィアナはそう感じた。

だが、吹き飛んだのはフィアナの僅か数センチ隣だった。

テールローターを撃ち抜かれ機体制御が取れなくなり、誤射したのだ。

そして、ゆっくりと機体は道路へと墜ちていった。

「ハア……ハア……助かったのか？」

思わず膝をつきそうになるが、思い留まるとすぐに移動を開始しようとする。

居場所がバレれば数で押される。

ここまで生き残れたのは常に一対一を心がけたからに過ぎない。

だが、逃げる隙をあの悪魔が『える筈が無かつた。

慣れともいう反射的な行動でソレを避けたのだが爆風で吹き飛ばされフィアナは床を転がった。

「久し振りだな！糞餓鬼……まだ、生きてやがったか？」

耳障りな声、殺氣すらない塵を見るような視線……
フィアナが殺そうとしている相手であり、

フィアナを狙う法の番犬……

逆辻恭一の登場だった。

「ああ？ 悪かつたな！ クタばつてなくてな！」

フィアナも逆辻を睨み返す。

だが、目的は背後にある部隊の装備確認だった。

そして、目に入ったのは FN SCAR のカスタム……
光学機器に加え、専用のアドオングレネードランチャーとして開発された FN40GR を装備している。
先程の爆発はそのグレネードによるものだろう。

「まさか、ヘリを撃墜されるとは思わなかつたぜ？」

「そりやあ、残念だつたな！」

「ああ、そうそう……さつき、巫女服着た餓鬼を殺ったんだがアレはお前の口一か？」

逃げはそう叫ぶと小指を立てた。

だが、フイアナにはそれが誰だか分からぬ。

巫女服……白雪が乗り込む理由はない

過去の知り合いにも頭を巡らせるが、一致する人物は上がらなかつた。

「はあ？ んなもん、いるわけねえだろうが！ あれか？ ビビって何も出来ないからって精神的に追い詰めようつて寸法か？」

「いやあ、勘違いか！悪い悪い……なんかせ、その巫女はどうやらお前に会う為に単身で乗り込んで来たらしくてつっきり勘違いしちまつてたみたいだわ！確か……星伽とか言つたか？」

逆辻はハッタリで星伽の名前を出した。

「星伽」

可能性として有り得るのは星伽粉雪。……

粉雪が殺された?

俺の所為で……

また、殺した……

もつ誰も自分の性で殺したくないから壊れる事を望んだのに……

修羅になる。悪魔と呼ばれたって構わない。そつ斬ったのに……

「あつや～やつぱり、お前の知り合いだつたか? んじゃあ、あの世で再会でもしろやー」

逆辻はやつぱると笑ながら、その言葉に塞ぎ込んだフイアナに銃を向ける。

だが、銃はフイアナを穿つ事は出来なかつた。

「お~お~……今度は超能力かよ……次から次へと邪魔しやがつて

フイアナと逆辻の間を遮つたのは分厚い氷の壁だつた。

そして、氷の壁の向こう側には銀髪の少女がフィアナを抱えて逃走を始めている。

「逃がしたか……何、チントラしてやがる！追うぞーまだ、遠くには行つてねえ筈だ！」

氷の壁は予想以上に厚く、フィアナを取り逃がしてしまう。

だが、女一人がフィアナを抱えて逃げられる距離などたかが知れる。何より、フィアナは既に戦えない……

牙を失つた狼は死ぬのが運命だ。

戦いの終幕はもう目と鼻の先に来ていた。

あとがき

段々と間隔が長くなるのはアニメが終わったからではありません
ましては、魔法少女の聖杯戦争でも！
応募用の書き直しが進まないからです！

書いては没、会話が足りない！

その連続でwww

後は、ガンシップをビリビリ落させるか……

これが大きかった……

ミニガンとか厄介過ぎるのに対空武装が無いのは辛い……

では、感想待つてます！

戦う理由

「……今までくれば少しは……」

死んだよつの目付きをしたフイアナを下ろすとジャンヌは少し足を休める。

先程から完全に相手を巻けていないので追い付かれるのも時間の問題だらう。

何より、戦えない荷物を抱えての逃走がジャンヌの足を邪魔していた。

その心理的に完全に弱り切ったフイアナに思わずジャンヌは怒声を上げてしまう。

「これだけの事をして置いて、皆に心配まで掛けて貴様は何がしたいんだ！」

言葉と共に放たれたビンタを受けるとフイアナは床を転がる。そして、その状態で小さく呟いた。

「何で死なせてくれないんだよ……」

死にたがっているようにしか聞こえないフイアナの言葉にジャンヌは驚きを隠せなかつた。

だが、すぐにその言葉の意味を理解する。

殺された少女の為に現実の全てを犠牲にした。

ならば、フィアナにとつての現実は既に無いのだ。

それを決定的にしたモノは、遠山に撃たれた事実……

あれが最終的にフィアナにとつての帰る場所を失わせたのだらう。

ジャンヌにはあくまで搖い捨てられた情報の断片からの推測しか出

来ない。

けれども、なぜかジャンヌにはそうであると確信していた。

「どうするつもりだ？」そのまま殺されて死ぬつもりか？

「死ぬ？ もう、死んでるだろ……動いてるのは体だけだろ？ それを生きてるって何の？」

空虚なる心……

失ったモノを埋め合わせるだけのモノをフィアナは持ち合せていない。

ならば、いつそ、誰かに殺されたい。

そう……彼女と同じように……

今回の騒動も始まりは憎しみだが目的は単なる緩やかなる自殺行為に過ぎなかつた。

「中空知も遠山や神崎も心配してたぞー帰ろうつーお前の居場所はこじじゃない！」

ジャンヌはフィアナに手を差し伸べるが、フィアナはそれを払い除けた。

「どこに帰るんだ？ 僕の居場所はこの世界のどこにもいない！ 理解者もない！ あるのは……あるのは、ただの苦痛だけだ」

東京武蔵校に通いながら、影で多くの人間を公安の犬として殺して来た。

それで、彼女が救えると信じてただ、一向に

それはつまり、遠山達と過ごしていった日常など仮面を被りただ演じていたに過ぎないことを意味していた。

数時間前に肉を裂き、命を踏み躡つた人間が何も知らない人間の前で笑う。

異常過ぎる日常のじじに居場所があるというのか……そんなもの、ある筈が無い。

「…………」

ジャンヌはフイアナに何かを言おうとするも言葉が出てこなかつた。生き長らえてしまつた事実がここまでフイアナを捻じ曲げてしまつている。

それを矯正出来るだけの正論をジャンヌは持ち合わせていなかつた。

「今なら分かるよ……あいつの気持ちが……目の前で眩しいものを見せびらかされて……それがさも当然の如く言われても、手なんて届かない現実を知らされる。そして、上辺だけは笑顔を浮かべながら内心はその現実に心を苛まれる。本当に死にたい気分だ」

生きてきた世界が違ひ過ぎる。

それがジャンヌの抱いた印象だった。

裏の世界で生きる才能に恵まれているが、表の世界を知り過ぎている。

そのおかしな生き方とジャンヌの生き方は根本から違ひ過ぎる。もしも、理子ならば話を少しば理解出来たかも知れないが……

「あの人は俺を愛さなかつたんじゃない……愛せなかつた……いや、愛し方が分からなかつた。だから、母親の癖に母親として接せ無かつた。愛された記憶も無いから、愛せない……」

そんな歪な人性を送るフイアナを最後に繫ぎ止めていた鎖があいつだつた。

肉親では無い赤の他人。関わった時間はほんの一時にも満たない。
その大半は上辺だけのものだが、どこか嫌いになれない不器用なあ
いつ……

似たもの同士とも言えるが、全く違うとも言える不思議な関係……

ただ、彼女が死んだ原因はフィアナにある事は間違いない。
不用意に関わったからあいつは死んだ。

だからこそ、復讐には誰も巻き込むつもりは無かつた。

これは俺の復讐だから……

そして、最後に残った唯一の道標だから……

だが、断ち切つた縁は予想以上に深かつたらしい。
だからこそ、ここにジャンヌがいて粉雪が巻き込まれた。
あのお人好しの繚乱と黒渕も参戦しているときている。
繚乱や黒渕は長い付き合いとも言えるが、他の二人は時間的には一
瞬にも満たない擦れ違つた程度だ。

そんな縁程度、簡単に断ち切れるといふのは踏んでいた。

「お前の過去は知らないが、私は貴様を連れ帰ると約束した。その後は知らん。せめて、別れくらいは済ませて行け」

「あんな生き地獄になんざ戻る気はさらさらない……ただ、別れか……確かに本当に悪人を演じきらなきやあいつら頭無いし、バカが着く程のお人好しだから追つてきちまつかもな……」

その時、ジャンヌの携帯が鳴り響いた。

慌ててジャンヌは携帯を切りつとするが、誤って通話に出てしまつ。

「ジャンヌ？ 貴女、今どこにいる？ ここに来ているんでしょ？」

電話の相手は非通知だつた為に分からなかつたが、声ですぐに気付いた。

「カナ！ 今どこにいて……逃げ惑わなければならぬ状況なので場所までは正確には……」

「そ、そ、多分盗聴されていると考へた方がいいから手短に用件を伝えるわ。星伽粉雪は保護した。今は氣絶しているけど、体に傷は無いわ。後は、立花繚乱と共にガンシップが墜ちた方向に向かつてる」

星伽粉雪は生きている。

その情報にジャンヌは胸を撫で下ろした。

「こちらは、ファイアナ シュトレーゼを発見しましたが、逆辻恭二が率いる部隊から追撃されています。戦力が違い過ぎて打つ手が無くて……」

「そつ……分かつたわ。見つけ次第、助力する。ただ、場所を知らせるのは危険だから過度な期待はしないで」

過度な期待……

つまり、増援が全て済んだ後になる可能性があるという事だ。その事を心に刻むとジャンヌは電話を切った。そして、フィアナの頬を思い切り張り飛ばす。

「星伽粉雪の殺害は虚偽の情報だ。いい加減、目を覚ませ!」

「覚ませか……なら、さつさとの悪夢を終わらせたいな……」

相変わらずな態度のフィアナにジャンヌは溜息を吐く。

「私の推測だが、星伽粉雪は今までは確実にお前を追つて来るぞ? それに、まだ失っていないなら戦えるだろ? それとも、本当に失いたいのか?」

「さあな……そだな———分かんねえや……でも、元々死にに来たのに逆辻の手の内で死ぬのはヤダな……ただ、せめて一死報いたいとは思う」

そう呟くと同時に、フィアナはジャンヌを押し倒した。

「なつ! 何をする! まだ、お前と私はそういう関係じゃないだろ!」

完全にテンパーのジャンヌを他所に扉を睨み付けた。

現れたのは逆辻恭二……

手には滅音器を取り付けたコルトガバメントを構えており、一発の空薬莢を手の中で転がしていた。

「ありや？復活してやがるぜ！んで、もう作戦会議は終了か？逃げる算段でもついたか？糞餓鬼！」

「はあ？誰が逃げるだ？いつまでもいい気になつてんじゃねえぞ…」

そう言つとフイアナは銃では無く、ナイフを構えた。そして、ジャンヌもテコランダルを構える。

「あの時の焼き回しだな！あの乳臭い餓鬼の代わりにその剣士か？ちつたあ、勉強したらどうた？」

その光景を逆辻は嘲笑うが、フイアナは気にせずに告げた。

「テメヒソ、いつまでも夢見てんじゃねえぞ？あの時、決着？他人に頼らないと戦えない弱虫は黙つてろ！虎の威を借る狐……いや、小心者なドブネズミ野郎！」

「言つてくれるじゃないの！ははははははははははひは……殺す…ぜつてえ殺す！」

二対十六

数、武装では圧倒的な差…

だが、フイアナは止まらない、止まれない

「殺す？殺せんのはお前だろ？逆辻」

その言葉を合図にフイアナは逆辻に斬りかかった。

戦の理由（後書き）

これから、さらに更新に魔が開くとか言いながら更新している
まだ、応募用に書いてるやつが終わっていないのにwww
感想待ってます

黒は止まり、白は黙りか（前書き）

粉雪メインで中空知サブかな?
カナは男だからパス!

黙は止みて、口は黙ひわ

恐怖は人を支配する。

思考を制限し、動きを阻む。

その一例が死という概念だ。

だが、今のファイアナには通用しない。する訳がない。
もとより、死ぬ事を恐れていないのでから……

「なんで止まらない…」

銃弾の嵐の中をただ一向に突き進む。

全てをかわしきれる筈はなく、全身は紅く染まる。
それでも、逆辻へと向かう足は止まらない。

貫通した銃創から溢れ出る紅はファイアナ本人に対する死の恐怖としてではなく、逆辻の部下に対しても畏怖の感情を抱かせていた。

それは、ジャンヌにも同じでその光景が異様に映る。
だが、目の前の敵を阻むのに精一杯で手を貸す事などできはしない。

「その程度?舐めてるんじゃねえぞ!逆辻!」

その言葉と共に逆辻の頬に朱い一筋の線が刻まれた。
だが、その一筋の傷が逆辻を本気にさせてしまう。

「ああー。」//『屑が糞がつてんじやねえ！』

死んだ魚が蘇り、狩る側に牙を付きたてた事に腹を立てた逆辻はガバメントではなく、ファイアナを蹴飛ばした。
これまでの戦闘のキズが完治している訳ではないファイアナは除ける事は叶わない。

だが、ただで蹴り飛ばされる訳もなくファイアナはM686を抜き放つと逆辻ねた頭目掛け発砲する。

しかし、体勢が崩された状況で発射された弾丸は逆辻の頭を僅に逸れ、耳の一部を吹き飛ばした。

そして、足場を失ったファイアナはビルの下へと落下して行く。

「てめえらはそいつの相手をしてろ！奴は俺が殺す！」

逆辻の異様なまでの殺気に部隊の人間は無言で顎くじジャンヌへと銃口を向けた。

「はあ、はあ……血を流しそぎたか……」

流血からか目が霞み始めていたファイアナは近くの壁に寄り掛かった。
なんとか、近くの足場に転がり込んだが全身の骨が悲鳴を上げてい

る。

肉体はもう限界を告げていた。

そんな中でファイアナはポケットの中に入っていた注射器を手に取る。血液を無理矢理増やす違法薬物……

博愛の作製の為、副作用の心配は無いが長時間、水中にあつた為に変質を起こしている可能性もあった。だが、使わないなど選ぶ余裕はない。

このまま、失血死を選ぶなど選択肢に存在しない。

空になつた注射器を床に転がすと呼吸を整える。

そして、注射器を再び手に取るとある事を思い付いた。

「見つけたぞ……糞餓鬼」

通路の向こうから現れたのは逆辻だつた。

耳が吹き飛んではいるが応急処置をしており、重症度で言えば確實にファイアナが上だろう。

銃弾にしてみても確実に逆辻の方が多い。

そんな中でファイアナは愉しげに笑つた。

「ああ……本当に……いつ状況の方が俺にはあつてるな……生きてるって感じられる。痛みが現実を突きつける。精神的には壊れても、この死へと近付く感覚の中では生きている……そんなクダラナイ現実を突きつけやがる」

「なら、せつせと死ねや…」

逆辻の挑発に対しても、ファイアナは溜息を吐くとナイフを一回転させて持ち直した。

「断るね！俺はまだ死ねないらしい……もとより、俺が始めちまつた事に関してはケジメをつけなきゃ終われないんだよ……縁つて奴は切つたと思ってもなかなか本当に切り裂けないらしいくてねだから、お前を殺して生き残る事にしたわ」

「生き残る？ テメエなんざ認めてくれる世界なんかある訳ないだろうが！ テメエは存在そのものが悪なんだよ…」

逆辻はその言葉と共にファイアナへと発砲する。
ファイアナはそれをあえて避けずに逆辻との間合いで詰めた。

「それでも、おれはあの世界が好きなんだよ… どんなに手が届かなくても、夢見るくらいは許されたっていいだろ？ うが！」

それはファイアナの本心からの思いだった。

そして、あいつの願つただ一つの言葉でもあった。問合いで詰めたファイアナは力任せにガバメントを持っている右腕を弾くとその胸にナイフを突き立てる。

だが、ナイフは突き刺さらない。

「馬鹿か？ 僕がそんなモノの対策を立てなかつたとでも思つてんのか？」

今の状態では首を落とすことはできないと判断し、心臓を狙つたのが間違いだつた。

首を掴まれたフィアナの額に逆辻はガバメントを突きつける。

「あばよ！ 粪餓鬼」

死ぬ。

フィアナですらそつ確信する。

だが、幸運の女神はまだフィアナを見放してはいなかつた。繚乱達といる筈の粉雪が逆辻にタックルしたのだ。

体格では確實に逆辻の方が上だが、それでも僅かに手元が狂う。そんなチャンスをフィアナは見逃さない。

持つていたナイフをフィアナは首を掴む腕に突き刺す。
ご丁寧に神経を切断するように刃を突き立てるとそのままナイフをへし折つた。

当然、神経を切断された腕からは握力が消えフィアナは自然落下する。

「てめえ！」

怒り狂う逆辻に対しても用いられる武器は既に一発しか弾丸が残っていないM686しか存在していない
チャンスは一度きり……

そんな中で粉雪はフイアナに對してあるモノを放り投げた。

「これ、使つて下さい！ 貴方の大事なものなのでしょうー！」

淡雪

だが、それを使う事は約束に反する。

あいつを守る為に、救う為に託された刃で人を殺すのは自分が許せない。

ならばこそ、自分の牙の方をつけなければならない。

そう考へるとフイアナは淡雪を蹴飛ばした。

そして、逆辻へと踏み込む。

逆辻もガバメントによる銃撃で応戦する。

だが、フイアナには当たらない。

極限の状態で感覚を研ぎ澄ませて相手の僅な動きを見て銃弾の当たらない場所へと身体を移動する。

言葉にすれば簡単だが、常人には考えつかない芸当だ。

けれども、既に重傷のフイアナが完全に避けられる筈もなく更に肉体を削られて行く。

「終わりだ……逆辻」

その言葉と共に足を踏み込むと逆辻の内臓へと打撃を叩き込む。

中国拳法の頸の概念に近いが、あれを更に肉体破壊のみに特化させた暗殺拳

その衝撃は的確に内蔵を破壊する。

逆辻は口から血を吐き出し、その場に倒れ伏した。

「マジかよ……最後の最後で詰めを誤っちゃったか……」

「この武術の事を知つてたのは立花くらいだからな。最後の最後に刀ではなく、拳に頼るなんて普通は考えない」

もしも、刀を選んでいたらファイアナの負けは確定していただろう。刀は筋を間違えれば通らない。

特に達人でもないファイアナが本来の武器であるナイフではなく、刀で戦う事自体が不利だ。

だからこそ、最初に覚えた自らの牙を頼つた。

「だが、俺を殺した所でお前は闇から逃れられねえ！せいぜい、闇の中で絶望するんだな！」

「絶望ならとうにしたさ……誰も俺の本音を見てくれない……世界の違いを実感し、自分の愚かさを知つた。そして、何よりも自分が何も救えない事を突き付けられた。本当に死にたい気分だ……先に地獄で待つてろ」

そう呟くとファイアナはM686の斬鉄を静かに起こすと無言で引き金を引き、逆辻の頭を撃ち抜いた。

だが、そこには達成感ではなく、溢れ出す虚しさばかりで何一つ救われはしない。

最初から分かつてはいたが、隙間は決して塞がる事はない。

永遠の喪失

輝かしい世界

それがフィアナに対する今までの罪過の罰なのだろう。

「あ……母さんはよく壊れなかつたな……」

そんな事を呟くと突然、目眩に襲われる。

いくら薬で失血死を逃れていても、出血は止まつていない。更に衛生面の問題から身体中の銃創において感染症を併発しているおそれもあった。

ただ、それ以上に全てに吹っ切れて緊張の糸が途切れたのかもしれない。

生きていた理由の一つである鎖が解き放たれた。

だが、同時にそれはフィアナが生きる理由を一つ失つた事になる。倒れゆくフィアナを抱き起こすと粉雪はそっと膝枕をした。そして、その小さな手でフィアナの頬を垂れる血を静かに拭き取つた。

『もしも、あの馬鹿を本当に救いたいなら手を離さない事ね……まあ、私がそれを貴女に強要する権利はないから無理強いはしない』^{フィアナ}

目が覚めて、立花繚乱 - 排水区画であつた女性とどこか似た女性に言われた言葉が粉雪の頭の中で響いていた。

黒渕にはあんな事を言つたが、今ではよく分からぬ。知つたのは自分の無知さだつた。

現実には裏がある事

そして、裏では現実が通用しない

ただ闇に沈むしかない人間達……

逆辻という鎮は外れても、フィアナが現実に浮上する事はない。負つた傷が大き過ぎる。

だが、それ以上に手が届かないと諦めてしまつてゐる。

それを望むのは星に手を伸ばすのに近いのかもしれない。どんなに綺麗に見える星空もただ、見えるだけだ。

決して「届く事はない」。

それ程までに粉雪やキンジの生きる世界とフィアナの生きる世界は隔たりがある。

そして、それは一方通行でありいけば戻れぬ片道切符だ。

だからこそ、粉雪もジャンヌも気付けていなかつた。
この先に待ち受ける一つの悲劇という名の喜劇に
思い違いがもたらす結末に……

誰も悪くない。ただ、運が悪かつた。

それ以外の言葉では説明できない。

悲しく哀れな愚か者の結末……

ただ、今だけは静かにフィアナは眠りにつくのだった。

黙は止みて、口は黙りや（後書き）

これで公安編終了！

次回はカナの話ー

因みにこの後、カナがフィアナを回収し、繚乱が後片付け、ジャンヌが粉雪を連れ帰りました。

次回のテーマは救いです。

誰かを救う。その為に何を犠牲にするか

果たして、フィアナの悪夢はこれで終了したのか？

終わりと始まり

「よつやく、全てが終わったのかな……？」

身体中に包帯を巻いたフイアナはそのまま前の無い墓の前で咳いた。だが、誰もその咳には返さない。

フイアナは一人、空を仰いだ。

結局、空虚な心は埋まる事が無かつた。

死んだあいつの身体は見つからず、墓の中に埋葬してやる事すら出来なかつた。

変わつたのは生きる理由を失つた事だけだつた。

「風邪引くわよ?まだ、怪我も治つた訳ではないのよ?」

いつの間にか、雨が降つていたらしく背後に立つていたカナがそつと傘を差し出した。

雨で張り付いた前髪を除けると、フイアナはゆっくりと立ち上がる。しかし、傘を受け取る事はしなかつた。

「今は一人にしてくれないかしら……そんな気分なの」

「そうしたいのは山々だけど、やるべき事が山積みなの分かつて貰えないかしら?」

カナの言葉に溜息を吐くとフイアナは静かに頷く。

「少し位、感傷に浸る時間をくれてもいいじゃない……」

「気持ちは分かるけど、待つのは明日までよ……それ以上は待てないわ」

最大限の譲歩であろうカナの提案にフイアナは小さく首を縦に振る。それから、墓をそっと撫でた。

「足になるようなモノはありますか？バイクでも何でもいいので……」

その言葉にカナはフイアナにキー・ホルダーのついたカギを投げ渡す。

「バイクのかぎよ。けど、貴方……免許持ってるの？」

「免許なんて無いけど、運転なら出来ますから」

「貴方、法律って知ってるかしら？前は一応、公安関係者という事で見逃されていただけよ？」

「死人に免許が出るんですか？」

フイアナの皮肉にカナは大きく溜息を吐くと、頭を抱え込んだ。

そんなカナの様子を気にせず、横を通り抜ける。

そして、バイクに跨るとカナから渡されたカギでエンジンをいれる。

何の考えもなく、バイクを走らせて辿り着いたのは神崎かなえの収容されている拘置所だった。

本来なら真っ正面から堂々と入る事が叶わない場所なのだが、まだ顔パスが効いているらしくすんなりと神崎かなえへの面会が通る。

「何かあつたの？」

様子のおかしいフィアナに神崎かなえは心配気な表情を浮かべる。それに対してフィアナは僅かに唇を釣り上げた。

「何もありませんよ…… ただ、私がアリアさん達の敵になつただけです」

「そり……」

フィアナの言葉にただ頷く神崎かなえ……

そして、口から出て来たのはフィアナには予想外の言葉だった。

「貴女も大変ね…… 周りに利用されて、貶められて…… まだ、若いのにお口の無い闇を彷徨うなんて……」

「意外ですね…… 何か言われるかと思つていました」

神崎かなえはフィアナの言葉に首を横に振り、それを否定する。

「確かに、娘と殺し合いはして欲しくないわ……けれど、貴女がどんな目にあつたかを昨日来た公安の方に聞いてしまった以上は貴女を責められない……貴女をそんな風にした社会や人間は恨むけれど貴女を憎むのはお門違いじゃない？」

「それでも、普通なら娘に銃を向けると言われたのなら怒る気がします……」

「そうね。けど、貴女が自分で思つていいよりも悪い人間では無い事を私は知つてるからかしら？」

そんな神崎かなえの言葉にフィアナは苦笑いを浮かべてしまう。

「貴女は誰かの代替品ではないわ。だから、そんなに一人で背負いこまないでも良い筈よ？」

「でも、誰かがやらなければならないのなら……誰かが傷付かないとならないのなら私がそれを引き受けたい……誰かが傷付けば誰かが悲しみますが、私が傷付いても悲しむ人間はいませんから……」

「そんな事ないわ。きつといる筈よ！ 貴女の為に涙してくれる人が！」

「嘘に塗れて……帰る場所すらない人間以下のゴミ屑の為に誰が泣いてくれるんです？ 私の行き着く先は地獄にある煉獄の中ですよ……」

「…………」

フィアナの余りにも深い闇と心の傷に神崎かなえは言葉を失う。

誰も傷つけない為に誰も寄せ付けず、誰かを助ける為に自分一人が傷付く道を選ぶ。

根は優しい人間なのだが、それが酷く哀しく思えてならなかつた。

「アリアさんがこれまで戦つて勝ち残つたのはただ“運”が良かつただけです。ルパン、ブラドにしても不確定要素の要因が大きかつた。ルパン戦は遠山キンジ、ブラドにしても呪いというなの制限……今の彼らでは本質的な闇には敵わない。寧ろ、秩序を乱す者として排除されるのがオチでしようから……」

「裏には裏の秩序がある……確かに、どこかの組織の長の言葉だったかしら？」

「そうですね。彼らは眞の意味でイーウーを理解していなさ過ぎる。もしも、イーウーを潰すつもりなら第三次世界大戦の引き金を引くレベルの覚悟が必要な筈です。あそこは火薬庫と言つてもいい。その崩壊という爆発はやがては世界に混沌をもたらす筈です」

「抑止力を失つた世界……確かに貴女の言う事に一理あるわ」

今の世界の平穏はただ、イーウーという抑止力あつてのものだ。そうで無ければ、暗部がぶつかり合い、それが発端で戦争が行われるだろう。

イーウーは誰にも味方しない。

それ故に、相手にするのを恐れ戦いが未然に防がれる。
必要悪という抑止力なのだ。

フィアナは椅子から立ち上がり、面会室の扉へと足を運んだ。
そして、振り向かずにこう告げる。

「私はアリアさんの在り方を踏み躡ります。ワンマンプレーで暴れ回り、計算すらともに行わず突撃する愚かしさ……はつきり言って、今まで生き延びた事を疑いましたから……私の経験では既に頭を撃ち抜かれて肉片になり、白骨化していくもおかしくないですから……」

それだけ告げると返答を待たずにつィアナは面会室を後にした。

残された神崎かなえはフィアナの言葉に俯いていた。

誰かの為に自分一人が傷付く……

確かに分からせるには打つて付けの役職かもしねり。

だが、それでは本当にフィアナとアリア達が衝突してしまう。

そんな未来に一人、心を傷めるが留置場から出る事が許されない神崎かなえには何もする事が出来なかつた。

終わりと始まり（後書き）

感想を待っています
次はアリア戦！

アリア・ヴァフィアナ（前書き）

アリアが好きな人は注意

アリア vs フィアナ

「本当にやるつもり？」

一日明け、東京武徳高校に向かう中でカナがフィアナに尋ねる。
そんなカナの心配を他所にフィアナは助手席で包帯を外し、慣れ親
しんだ制服に着替えていた。

武器も今回は非殺傷にしなければ、蘭豹が出てくるので面倒だがい
つもの銃も使えない。

その上、アリアはガバメントの2丁拳銃だ。
リボルバーで挑むのは物陰がない中では愚策以外の何物でもない。
その為、耐久性に優れたH&K MK23と用意していた
ゴム弾をいつものM686の代わりに仕込んだ。

「今更、後には引けませんよ？それに、これ以外に何かいい方法は
ありますか？」

「それは……そうだけど……」

車を運転しながらカナはチラチラとフィアナを確認する。
そんなカナに対してフィアナは苦笑いを浮かべてしまう。

「それに、カナさんが敵に回るより私の方が楽でしょう？色々と…
…」

フィアナはホルスターから銃を抜き、標的に向けるまでの動作を確
認しながらカナにそう尋ねた。

「キンジの事を言つて居るのなら、貴女が気にして居るような事は

ありえないわ

「違いますよ。貴女の義が本当に義なのか分からなくなっているようになりますから」

ファイアナはそう告げるとMK23の引鉄を引いた。

そして、動作確認が終了すると、いつでも戦えるように銃弾を装填する。

「それに、カナさんが気にする程、私も彼らを仲間だなんて思つてません」

「あの子はどうなの？」

事件現場に居合わせた星伽粉雪についてカナは尋ねた。
あの事件でキー・パーソンになったのは粉雪に間違いはない。
彼女が居なければ、今、生きていたのは逆辺だつただろう。
けれども、ファイアナは少しも悩む様子を見せずこう断言する。

「どこまで行つても赤の他人ですかね？」

赤の他人……

あの時の粉雪からカナは友人以上恋人未満な関係を想像していただけにその答えは少し意外なものだつた。

「そう……なら、貴女にとつて友人とは何かしら？」

「友人？この世界に友人なんているのでしょうか？居るのは一種類の人間ですよ？——敵かそれ以外か……それだけです」

敵か否か

確かに簡単に世界を二つに分けるならそうなるのかも知れない。たが、人として生きている以上は何かしらのモノが生まれてしまう。それが友情や縁、愛情というものなのだが、フィアナの発言はそれらを全て破棄した末のモノだ。

普通の人間が語る言葉ではない。

「ああ、なんだか私つて壊れてるみたいで……あまり、そういうた類のモノがよく分からんんです。もしも、解つていたならあの時、星伽粉雪やジャンヌさんがあの場に居合わせるなどと『ミスは犯しません』でしたから」

そう笑いかけるフィアナの笑顔がカナには歪に見えた。

ただ、ここで言うフィアナの壊れたはそちら側では正しい壊れ方なのも事実だ。

油断すれば殺される、常に死が隣にあるのが現実だ。
だからこそ、彼らは他人を完全には信用しないし、仲間にも全てを晒さない。

それを考えると、フィアナにはあちら側の暮らしの方が性にあっているのかもしれない、カナは考えるがすぐにその考えを振り払つた。

会話らしい会話もなく強襲科が実習を行うグラウンドの近くに着くと先にフィアナを降ろす。

カナは職員用の駐車場に車を停車させるとフィアナを追つてグラウンドへと足を運んだ。

「久しぶりですね？監さん？」

突然、アサルトの実習に現れたフイアナに強襲科の生徒達は騒然となる。

星伽白雪の誘拐未遂、死亡説まで出ていた人間だけにその驚きは大きかつたらしく、裏側を知っていたアリアですら驚きを隠せない様子だった。

そんな状況下でフイアナは蘭豹に笑いかけるとこう提案する。

「アリアさんと私とで模擬戦をしたいのですがよろしいでしょうか？」

「殺し合いやなくて、模擬戦なんやうつな？」

「はい。あくまでも、そちらのフィールドでの戦いですからね。まあ、“運”が悪ければ死んでしまうかもしれません、それは常に起ころり得る事象の一つなので私には責任はとれません……」

蘭豹の殺気に対して顔色一つ変えず、冷静に段々と話すフイアナに蘭豹は一言、「許可するから勝手にしろ」と告げると他の生徒を下がらせ始める。

自身を無視して進む話にアリアが納得できる筈もなく、アリアもその場を立ち去るとする。

その後ろ姿にフイアナは至極つまらなそうに溜息を吐いた。

「逃げるんですか？勝てないから？」

「違うわ。戦う理由がないからよ。それに、粉雪から聞いたけどあんたは怪我してる。そんな奴を相手にする程、私は落ちぶれてはいないわ」

その言葉にフィアナはアリアを睨み付けた。

そして、周りの気温が一気に下がったようにアリアの身体が震え上がる。

「誰が誰を倒すんですか？舐めないで下さいよ。貴女と私では倍以上の差があるのでから……」

「あんた……一体何者なの……」

これまで戦った化物よりも、人間の筈なのに感じる圧迫感は桁外れに違う。

その異様さにアリアは始めて真っ直ぐにフィアナを見据えた。

「それは、名前ですか？名前など、他者に己を認識させる為のモノですから貴女が知った所で何の価値もありませんよ？」

「違うわよーどんな生き方したらそなうのかって聞いてるのよー。」

「生き方……私には語るべき物語などありません。私にあるのは下らないどこにでもあります不幸な話ですから……そんなに聞き出したいのであれば、私に勝てば教えて差し上げましょ。但し、貴女が立つていられる確率など〇%ですがね」

フィアナの挑発にアリアはガバメントを抜き放つ。

「あんたの頭に風穴開けてあげるわ！」

「いやいや、それはご勘弁を」

アリアの決めゼリフを笑顔でスルーすると、スカートの中から発煙筒を落としアリアに向かつて蹴りつけた。

発煙筒から吐き出される煙にアリアは顔を齧める。

毒ガスではないようだが、目に染みるのはもちろん、目標に照準を合わせるのに弊害になっている状況にアリアは即座にその煙から脱出しようとする。

しかし、目の前に現れた影にアリアは足を止めるとガバメントでの影に弾丸を撃ち出す。

だが、まるで煙に溶け込むようにその影は瞬く間に消えてしまった。
「短気ですね？先程の一回で、弾を随分と浪費したように見えましたが……」

その声が聞こえたのはアリアの背後だった。

この煙は視界を奪い、射撃の命中率を落とす事が本来の目的ではなかつたのだ。

真の狙いはアリアにガバメントを撃たせ、弾を浪費させる事

そして、煙に紛れてアリアの背後を取ることだつた。

「まだまだ！」

アリアはガバメントから日本刀に切り替えてファイアナに応戦しようとする。

けれども、それよりも早くファイアナはアリアの鳩尾を蹴り上げた。空中に浮かぶアリアを更に追撃し、回し蹴りをアリアの腹へと叩き

込む。

空中で衝撃を逃がす事ができないアリアはそのまま地面に叩きつけられる。

「これが貴女と私にある格の差と言ひモノです。因みに、最初のが毒ガスだった場合を含めるとこれで一度も死んでいる事になりますよ？」

「まだ、負けちゃいないわよ！私は強くならないといけないんだからうー！」

口から血を吐き出しながら立ち上がるアリアをフイアナは嘲笑う。

「強く？貴女がいくら足搔こうが、貴女の大切なモノは守れないわよ？だって、貴女が弱いから……あの女には相応しい最期になるでしょうね？娘は無残に失い、自分は永久に牢獄の中……惨めつたらありやしないと思いませんか？」

アリアはフイアナの挑発に完全に何も見えなくなってしまう。
周囲もフイアナも

「私はあんたとは違うわー私は守つて見せるー何も守れなかつたあんたと一緒にしないでー！」

「確かに私と貴女は違いますよ？けど、救えないのは同じです。貴女はその弱さ故に誰も守れず、自らの為に周りを殺す」

「黙りなさいー！」

「日本の諺にもあります、冤罪を着せられるようなバカな女の娘

もやつぱり、バカですね」

「黙りなさいって言つてるのよ！知つてるのよ！私！あんたが、半年前、自分の腹違いの妹を手にかけて、百五十人の児童を虐殺した大量殺人鬼だつてこと！そんな奴にだけは言われたくないわよ！」

アリアの言葉にフィアナの顔にはじめて動搖が現れた。
だが、それは最悪の方向へと向かう。

「あんたが助けたかったのはその事件の主犯格の一人！死んで当然よ！」

その言葉は引鉄だった。
フィアナから感情が消え去る。

「言いたいのはそれだけですか……何も知らない外野が偉そうに語つてんじゃねえよ！」

「えつ？」

その言葉と共に顎を打ち抜かれる。

銃弾の硝煙の匂いも無く、微動だりしていらないフィアナに何が起こつたかアリアは理解できなかつた。

「少し、私も本気になる事にします……貴女がムカつきますから」

そう呟くと、フィアナはアリアとの距離を詰める。

アリアも日本刀で応戦しようとするが、軽々とステップで躱されてしまう。

そして、流れのような動作でアリアはフィアナに投げられ、気付く

と馬乗りにされていった。

「貴女は私の知る中で、誰よりも劣っています。刀は四季星に、射撃は黒渕に……」

ファイアナは懐からパチンコ球を取り出すとアリアの隣へ落とした。そこで、始めて先程の衝撃がパチンコ球を弾いたモノだと気付く。

ファイアナは無言でアリアの右肩にMK23を当てるごとに容赦無く引鉄を引いた。

そして、次に左肩、右膝、左膝と関節部分を引鉄を絞つて行く。ゴム弾の為に銃弾は肉を貫く事は無いが、その衝撃は全てが打撃となつてアリアを襲う。

逃げ出そうにも馬乗りにされているアリアには逃げ場など無かつた。

「アリア！……ファイアナ、お前一何してんのだ！」

「ファイアナ…………さ、ん、嘘、ですよね？」

「…………」

「何してるんですか！」

背後から響いて来た声にファイアナは振り返る。

そこに居たのは、遠山キンジと中空知、ジャンヌ、そして、星伽粉雪だった。

アリア v s フィアナ（後書き）

私的にアリアを怒らせたらこうなると考えました。
因みにアリアが調べたのは粉雪を無事にジャンヌが連れ戻した後です。

粉雪の話がひっかかり調べた形……

次回は後編というより、アリア戦は終了しますからキンジ達との掛け合いと事件の後始末になります。

感想待つてます！

「止めるー、フイアナ！」

キンジの言葉にフイアナはMK23をホルスターにしまつとアリアの持っていたガバメントをアリアの頭に突きつける。そして、キンジの方に顔だけ向けるとキンジを睨み付ける。

「止める？ 意味が解らないのですが、私とあなたは敵ですよ？ なのに、なぜ銃を置く必要があるのですか？ 戦場で銃を捨てるなど愚か者のする行為ですよ？」

「そんなことしたら、戻れなくなるぞー、それで本当にいいのかー！」

キンジの言葉にフイアナは容赦なく、アリアに対して引鉄を引いた。

その音にキンジ達は顔面蒼白にするが、蘭豹だけは冷静にフイアナを觀察し、キンジ達の前に立ち飛び込むのを止めていた。

「どけよ！ こんなのは模擬戦でもないだろー！」

「アリアには当たってない。落ち着け！ あの程度の挑発にも気付けないのかー！」

蘭豹の言葉にフイアナは愉しげに笑い始めた。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ…… その事に気付けたのは蘭豹位ですか、本当に低レベルですね。まあ、Jランクでの程度なのですから貴方達などたかが知れていますか」

「フィアナ！　いい加減にしろー　さつさとアリアを放せ！」

「いい加減にしろ？だから、さつきから言つてるじゃないですか
あなたと私は敵同士、つまりは殺し合いをする関係です。それに、
私の立ち位置など貴方達がやつてている事の意味を考えればある程度
推測がつくのではありませんか？」

「どういつ意味だよ……」

キンジはその言葉にいやな汗が出始める。

頭の中に浮かぶのは最悪の可能性ばかりだ。

公安関係だから、それ相応のモノと考えていたがその予想おはる
かに上回る闇……

今のキンジ達には到底太刀打ちできないものだ。

「なら、その身に刻み付けて差し上げましょ。綺麗に見せかけた
この世界の裏で今、こうして生まれいづる憎しみの火種を封じ込め
たパンドラの箱を開けようとしている事を　そして、大切なモノ
はいつも自分の傍にあると信じて疑わないこと、それはいつも失うか
分からぬこと、奪うものは常に存在しているという事、簡単に呆
氣なく、一瞬で失つてしまふという事を！」

その言葉にキンジは動搖を隠せない。

ほかの生徒も同様にフィアナに対して嫌悪と恐怖の入り混じった
感情が渦巻いている。

そんな中で、ジャンヌは一人溜息を吐くとあの後の事を思い出し
ていた。

「 私なら彼らに自覚させることができるでしょう? 自分たちが行おうとしている事がどれだけ愚かな行為なのか……それによって、どれだけの被害を引き起こすのか」

「 だが、教授の寿命が近いのは周知の事実だ。それを止めることなど出来はしない。それに、奴らを抑えられるだけの組織は存在しない」

ジャンヌとしてはフィアナの意見に賛同はするもののそれを実行することに関しては反対の立場をとっていた。
もしも、その選択を行うとフィアナは本当に変える場所を失う事になるからだ。

そうなつてはこいつはもう戻つてはこない。
確信めいたものがそこにはあった。

「 多分、俺の知るあいつらなら確実に動くだろうな……裏の秩序を引いてきた人間のみで組織された暗殺者の穴倉ならな」

「 暗殺者の穴倉……北方の悪魔と呼ばれる暗殺結社を束ねるクランベルン……雪の魔女か」

暗殺者を束ね、常にイーウーとその他組織の敵に回ってきた奇人常に勝利を勝ち取ってきた鬼才

そして、何より教授と真正面から殺し合いをして引き分けた人間の一人

数々の異名を持つ表舞台には殆んど姿を見せない闇の世界に君臨するタダの人間

「やつらが、何をするというのだ？」

「普通に考えると、各組織の勢力図を塗り替えて弱体化させる。それにより、戦争が回避できなくても短期決戦による表への影響が少ない形へと抑え込む……もしくは、自らがイーウーの代わりになるか」

「無茶だな。戦力が違う過ぎる。超偵クラス以上の魔女クラスがごろごろいるんだぞ！ 私など比べるのがおこがましいレベルが！」

ジャンヌの言葉にフィアナは盛大に笑い始めた。

「さあな……自分で考える。ただ、アイツらは今回の起點になりつつあるアリアを確実に潰すぞ……神崎かなえもろともな」

「だから、釘を刺すのか？」

ジャンヌの問いにフィアナは笑つて答えた。

「はつ？ そんのはほんの数パーセントに決まっているじゃない……それ以上にここから先で私の目の前に立ちはだかる事があるようなら叩き潰すという意思表示をしないとね。覚悟もない人間を殺すほど、胸糞悪いモノはあるませんから

それに、私も今回の件で台風の田になる前に処分されるでしょう
ね……」

その眩あはジヤンヌの耳に届く事はなかつた。

「セレニまでよ。少しあり過ぎだわ」

カナはそう言つてフイアナの持つガバメントを下げる。
それに対してつまらなそうな顔をするとフイアナは興ざめと言わ
んばかりに落胆した。

「まあ、カナさんが言つなら仕方ありませんね。貴方には借りがあ
りますし、返さないで置くと後々、利子が付きそうですから」

そう呟くと氣絶しているアリアをキンジ達の方へ蹴り飛ばした。

「それで、彼女の様子はどうだったの？ 今来たところだから私は
確かめられなかつたのだけど……」

「落第ですね。希望の欠片もない。ただの愚かなバカ、あなたの話
が本当に継承したとしても使いこなせるかというと疑問が浮かびま
す。むしろ、持て余すのが落ちじゃないですか？」

辛辣な評価にカナは「やう」とだけ呟くと見えない弾丸を背後へと発砲する。

だが、その銃弾は目標に当たる事はなく、地面に一つの筋を残した。

「意外と早かつたな。四季星 遊真……こんな極東に何のようだ？」

「別に私どこの国には足を踏み入れたくはなかつたさ。特に、あの妹に会つ可能性がある場所には……だけど、これはあのお方の命ですから……」

やう言ひついで、四季星は脇に差していた刀のうちの一一本に手をかけた。

「本當なら、このような決着をあのお方も望んではいませんでしたが、こいつなつてしまつては仕方がありません。我が全力を持つて切り伏せましょ、……本当に至極殘念です。時が違えば、また違った結末が見れたでしょうに、今は特異点を許せる状況ではありませんから」

「やうか……はあ、カナさんはどいていて貰えますか？ 私の都合にあなたを巻き込むのも悪いですし……」

「公安の時にあなたには十分すぎるほど振り回されたのだけじ？」

その言葉にフイアナは苦笑いを浮かべる。

「その事を根に持つていたんですか……それなら、忠告だけしておきます。田の前の剣士をただの剣士と思わない」とです」

その言葉を合図に四季星は月影に手にかけ、フィアナへと走りこんだ。

裏の世界でも名の知れ渡る剣豪、四季星 遊真とクロエ フロー

リアの戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

選択（後書き）

質問がうつよつこれか、ひついて

ここでたよつに第三者になり、これから行動していくパターン（今よりも血生臭くなる予定）と、これからもなるべく原作沿い……アリア達視点じゃないので殆んどが脇役の一パターンを考えています。

一番心配なのは前回、アリアをぼほこにしたりしてゐたじだつたりするので、このまま暗い話で裏の世界を基本軸として話を進めていくべきか、表の世界に救いを残した感じで進めていくかで結構悩んでいるんですよね。

今の小説をどんな気持ちで読まれているのかも気になりますから……
てか、なぜかする打ち切り臭

打ち切る予定はありませんが~~~~~

今回の事に関しては出来るだけ感想がほしいなと思います。
感想の度合いで今後の方向性を練り直す予定ですから、よろしくお願いします。

介入

フィアナとカナ……

二対一と数では確実に有利なのだが、四季星にはそんなものは全く意味はなかつた。

カナの放つ見えない弾丸も全く通用しない。

「嘘でしょ！ 見えない弾丸が通用しないなんて！」

まるでピースメーカーから放たれる弾丸を覗いているかのように躊躇地震へと近付いて来る四季星に驚愕の表情を浮かべる。四季星はそんなカナに対して容赦なく刀を振り下ろした。

「なにしてる！」

フィアナは四季星の前に立ちはだかるとカナを突き飛ばした。その瞬間、フィアナは眩暈に襲われる。

息が荒くなり、視界が闇に閉ざされていく中で紙一重で刀を躱すと四季星から距離をとつた。

「どうした？ もう息が上がったのか？」

呼吸が速くなり、フィアナは自らの体に異常が起こっている事を理解する。

これ以上、四季星との戦いを続ければ確実にこちらが不利になるのを直觀するとフィアナは短期決戦の為に四季星の間合いへ突入する。

四季星の間合いとファイアナの間合いでは四季星の間合いの方が広い。

そうなると、どうやった所で四季星の方が先制されてしまつ、つまり、それを搔い潜らなければその時点で死という明確な終わりが待つてゐる。

間合いに踏み込んだ瞬間、ファイアナの目が完全に閉ざされてしまう。

そのいきなりの状況に方向感覚と失い、僅かに歩幅が乱れた。だが、それが逆にファイアナにとつては幸いとなる。

歩幅が乱れたことにより、四季星の刃が鼻先数ミリ前を通り過ぎたのだ。

もしも、歩幅が乱れなければ確実にその刃はファイアナの首を飛ばしていた。

しかし、ファイアナの幸運もそこで潰え、完全に体が動かなくなってしまう。

「早く立つて！」

カナは四季星を見えない銃弾で牽制しながら、ファイアナに叫ぶがファイアナは立つ気配が無い。

それも当然といえよう。

公安との戦闘時に打ち込んだ血液増産剤が変質していたのだ。その変質し毒性を持つた血がファイアナの体を徐々に汚染し、身体の自由を奪つていた。

「お前の悪運もここまでなのようだな……」

そう呟くと四季星は容赦なく、ファイアナへと刀を振り下ろす。

だが、何時まで経つてもフィアナの身体を刃が切り裂くことはなかつた。

「つたく、何だ？　この状況？」

四季星の刀とフィアナの身体の間を一本の槍が阻んでいた。

「リシェル！　今之内に治療しろ！」

「何の真似だ？　クレンズ？」

四季星は間へと介入してきた男を睨み付ける

だが、その殺氣を面倒気に流すと盛大に溜息を吐いた。

「つたく、バチカンとの交渉が終わって、中華野郎の妨害を乗り切つたと思つたらコレかよ……現状ではこいつにはやつて貰う事があるから殺すなどさ」

「やつて貰う事だと？」

四季星はクレンズの言葉に顔を顰めた。

そんな四季星に対して、クレンズは頭を搔き鳴ると槍を片付ける。

「簡単な仕事だよ……俺はアメリカに、あんたは中国に戦争を仕掛ける。確かに現状では公安の事件による波紋は残るがそれ以上にフローレアと事を構えるつもりはない。そうなった場合、その鎮静にかかる時間を考えれば、放置する方が得策……だが、それじゃあ納得がいかないだろうから、ここは一つゲームをしましょうだとさ」

「ゲームだと?」

その言葉に周りから音が消える。

「簡単だ。賭けるのは命、舞台は世界、内容は暗殺、レベルは不可能……つまり、これから戦争を仕掛ける教授の暗殺……」

その言葉にカナは耳を疑つた。

教授の暗殺ではない。

イーウーに戦争を仕掛けると平然と言ひてのけたからだ。

「笑わせるな……」

「笑わせるな？ 勝手に決め付けるなよ、まだ勝利条件を提示していないだろ？ 勝利条件は生還であり、暗殺の成功ではない。意味は分かるだろ？」

意味など唯一つかない。

つまり、他のメンバーを納得させるために提示した条件なのだ。
しかも、あのお方は生還する方に賭けている。

それならば、四季星がこれ以上、フィアナを殺そつとする意味合いはなかつた。

「ちょっと動かないでください！ 確かに、血清は打ちましたが完全に治癒したわけじゃないですよ！」

立ち上がる「う」とするフィアナはリショルは押さえ付けようとする。しかし、フィアナはリショルを押しのけふらふらな体に鞭を打ちながら立ち上がった。

（つたぐ、これじゃああの人読み通りって訳か……）

クレンズは軽く舌打ちするとフィアナを睨み付けた。

「そんな武装でこの人間兵器を相手にする気か？ お前の身体が全快状態ならまだしもその身体ではこいつの動きについていけないだろ？ 田も見えていないようだしな……」

だが、こうなっては引くような奴ではないことを知っているクレンズは呆れ果てて溜息を吐くと懐からナイフを取り出してフィアナに手渡した。

「やじたいなら勝手にやつてろ……ただし、勝負がついたら俺が止める。ここで死者なんてだしたら俺の負担が増えて可愛い妹が傷付くからな……」

そう告げると、フィアナの横を通り過ぎアリア達のいる方へ退避した。

「つたく、予想通りか……んで、これが神崎アリアって訳か？ た

だの餓鬼じゃないか

「なつ！ 誰が餓鬼よ！ 私は！」

「お前、アイツに命救われたな。もしも、アイツが先に本気でお前を自分より危険度が低いと四季星に評価させていなかつたらお前の首が飛んでたぞ？」

その言葉にアリアは言葉を詰まらせた。

「それにしても、こいつひどくやられたな……あいつが本氣でキレるなんて珍しいぞ？ 半年前の事を煽ったか？」

アリアはその言葉に顔を俯けてしまつ。

フィアナがあそこまで怒りを露わにするとは思つていなかつたらだ。

そんなアリアにクレンズは懐から飴を取り出すとそれを手渡す。

「あいつはお前よりも闇の深い場所にいるが、その経歴は短いんだよ……たつた、半年前に関わっちまつたのが運のつき……その先是闇に沈むばかりだ……まあ、その怪我は自業自得だな……少し懲りたんなら時と状況を考えて言葉を選べ……」

そう呟くと、アリアをリシェルに押し付けるとクレンズは何やら中空知や粉雪、ジャンヌと誰彼構わず絡み始める。

そんな兄の様子にリシェルは情けなくなり、涙を流しながらアリアの怪我の治療を始めた。

介入（後書き）

これから構想が全く浮かばないwww
このまま、四季星などの第三者組織として戦争を仕掛けるか、それ
とも個人として動くか……悩み中

新キャラのクレンズとリシェルですが兄妹

マイカクレンズとリシェルクレンズです。
詳細は必要になつたら紹介します。

最強と凡人と

「あの……大丈夫ですか?」

リシェルはアリアの傷を治療しながら兄の言葉を気にしているアリアに尋ねる。

自信無さ氣な気弱な雰囲気の中でもアリアに負わされていた怪我の治療を的確にこなしていく。

しかし、それは医学書に乗るような正規の治療法ではなく、その場にあるもので治療するというモノだった。

「あんた達はアイツの事をどう思つていいの?」

思わずアリアは口から洩れた言葉を撤回しようとするが、リシェルはにこやかに笑いながらこう答えた。

「クロエさんは次期後継の有力候補ですし、それに彼とは色々とありましたからね……私はバカだからよく分かりませんけど」

リシェルの言葉にアリアは呆れ果てるが、次に出てきた言葉にアリアはリシェルへの評価を撤回する。

「まあ、それでもクロエさんは貴方の未来の一つのようで全く違つた立ち位置にいると思いますよ?大切なモノを失ってはいますが、貴方のように他人を見下したりしませんから……前に、友達に聞いた事があるんです。なんで、彼に肩入れするのかって そしたら、『確かに戦力的に見たら平均……それと言つて戦闘能力やその他のスキルでも珍しいモノはこれと言つて持ち合わせていない。母親であるフローレアと違つて才能は無いと言えばそこまでだけ、その

才能を補うよう人に惹きつけるとは思わない？私や博愛、繚乱……本来なら敵であるべき人間までね』って言われてしまつて……私からすれば才能つてなんなかつて話なんですが、アリアさんとの違いつてその誰かを惹きつける魅力なんぢやないですか？」

その言葉にアリアはどこか納得してしまつた。

粉雪は戦力的に考えても微妙だが、中空知、ジャンヌ、理子、アリア自身も敵として去つた筈のファイアナを探していたのは確かだからだ。

もしも、アリアが敵にまわつて一体どれ程の人間が協力してくれるだろうか？

つまり、ファイアナにあつてアリアに無いモノは経験というモノだけではない。

人を惹きつけるといった組織やチームを束ねるつえで絶対に不可欠なモノもまたその一つなのだろう。

「ありがとう……あいつが怒つてた理由が少しあつた気がするわ……」

アリア自体がファイアナの過去ばかりに目を向け、その裏の裏まで見ようとはしなかつた。

最も大切なモノはその裏でどのような思いが駆け巡つていたかの筈なのだ。

守りたかつたモノを失つただけではなかつたのかもしれない。

クロエは閉じられた目を四季星に向けると大きく深呼吸する。

そして、ナイフを構えると四季星の方へと走り出す。

四季星の使つていい長刀がその長さ故に接近戦に弱いという事をつく為の接近だがそれを容易に許す筈が無い。

長刀が僅かに動くと、四季星の身体がブレた。

「あ、なるほど……これが感じるって奴か？」

そう弦ぐとまるで刀を構えている四季星に臆する所か更に足を速めた。

周りの人間も四季星から放たれる殺氣に誰もがクロエの行動を無謀だと考えた。

唯一、それを本質的に違うと掴めたのは戦っている四季星とマイカくらいだろう。

「面白い！ それがどれ程のモノか確かめよう。」

四季星の太刀筋は弧を描き、クロエへと襲い掛かる。
その斬撃はクロエへと叩き付けられると粉塵を巻き起こす。

「おつかないな……流石、最強の剣士っていうより、剣帝って奴か？」

マイカが笑つてその光景を眺める横で粉雪は口を開き絶句し、中空知は目の前の光景に気絶してしまつ。

もしも、当たっていたならあの攻撃はマイカでもタダでは済まないだろう。

四季星の恐ろしさは受けたとしても、技の重さが体に蓄積されるほど技量にある。

そして、それに合わせる形で縦横無尽に駆け巡る斬撃を振るわれたのでは殆んど隙という隙が無いのだ。

だが、それは当たらなかつたらの話である。

四季星はどれだけ強かろうが、どれだけ化物的な技術で刀を振るおうが所詮は人間……

一度に使える斬撃は必ず一本なのだ。

「これは面白くなつてきましたぞ……四季星の懐に入り込みやがった

マイカはそつそつながら楽しげに粉塵を見つめていた。

「仕留めそこないましたか……」

粉塵の中で手応えが無かつたことに躊躇された事を感じ取ると即座に長刀を鞘に納めた。

その長刀を地面に置くと腰の刀へと手を伸ばす。

そして、四季星は目を閉じると呼吸を整え、姿勢を低くする。

「ヤバだー！」

四季星はそう叫ぶと抜刀術により加速させた斬線を目の前の人影に放つ。

それに対しても人影もナイフでその刃を受ける。

だが、完全に接近しきれていない為に思うようにナイフの効力を発揮できず、その重い一撃にクロエは吹き飛ばされてしまった。

四季星はそれにさらに追撃をかけ、空いていたもう一方にも刀を握ると一刀流となつて数を増やしてクロエに襲いかかる。

その猛攻に対しても確にナイフで応戦し、刃と刃で火花が散るが蓄積されていくダメージは思った以上に大きく次第にクロエが追い詰められていく。

「さすがに一筋縄ではいきませんか……」

「私とてあの方の右腕としてそつ易々と誰かに首を取られる真似はしません……」

息が荒くなるクロエに対して四季星は笑つてそう返すと更に攻撃の速度を速めていく。

クロエもその猛襲に決意を固めると一步足を前に踏み出した。ナイフと刀が火花を散らせる中でクロエは更に四季星へと近付いていく。

その頬には風によつて切り裂かれたであろう切り傷から血が滴り落ちていた。

そんな中で四季星の刀がナイフに弾かれてほんの僅かだけ元の位置よりも外側に弾かれる。

時間にして数秒の時間稼ぎにしかならないが、これを逃すとこれ以上のチャンスは無いと判断したクロエはもう一方のナイフを受け

ると同時に勝負に出た。

「そこまでー。」

どこからともなく響いてきた声にクロエも四季星も互いの首を落とそうとしていた刃をぴたりと止める。

クロエのナイフから滴り落ちた血が一滴、地面に落ちた。
それはクロエが勝負に勝つことを意味していた。

四季星の首筋はナイフによって僅かに切り裂かれていたが、四季星の刀は間一髪で初撃の刀をナイフで受け止めたおかげでクロエの首には傷はあるものの刀によるものは全くない。

だが、それ以上にクロエの心を支配していたものがあった。
先程、聞こえた声である。

それは、ここが包囲されたことを意味しているからだ。
何故なら、先程の声は立花繚乱 四季星遊真の実の妹
だつたのだから……。

の声

最強と凡人と（後書き）

一応、クロエの勝ちですが、実質的には運が良かつただけです。

久しぶりの更新www

まあ、これでファイアナとして生きるかクロエとして闇に沈むのかの
決定的な分岐点になります。

感想待つてます

闇と光の境界線

「おーおー……マジで最悪の状況だな」

完全に包囲されている事を悟ると、マイカは軽く舌打ちをする。そして、懐から槍を取り出すをその切つ先を繚乱へと向けて厳戒態勢を取る。

そんなマイカの後ろでリシェルは荷物を片付けると開いた道から退散できるように準備を始める。

「飛んで火にいる夏の虫という奴ですね……国際手配されている最も危険と称される凶悪な人間が一人も表に現れたのだから……」

その言葉にカナは繚乱の狙いが四季星とマイカの二人だという事に気が付く。

それに気が付いたカナはフイアナを連れてこの場から離脱しようと黒剣の放った弾丸により阻まれてしまう。

「どうこうつもりだ！ 繚乱！ お前はこの場を血の海にするつもりか！」

これまで何も言わずに黙つて見ていた蘭豹が初めて苛立ち交じりに口を開いた。

四季星とマイカ、フローレアのような裏の世界でも名の知れ過ぎている連中を相手にするのに死者が出ないわけがない。

その上、数日前の公安半壊の事件を起こした張本人が目の前にいるのだ。

そのクラスの化物を三匹同時に相手にしたのならそれなりの犠牲を覚悟しなければならない。

蘭豹は自分の受け持つ生徒の安全を確保しなければならないから
という理由で、繚乱へと銃を向ける。

「頼むから、お前と殺し合にはしたくない……」
「ここは引いてくれ」

「わるいけど、ここを引く訳には行けないの……分かつて貰えない
かしら？私にも私のしなければならない仕事がある」

その言葉に蘭豹は引き金を引いた。

だが、その銃弾は黒渕の撃った弾丸により阻まれて繚乱の十数セ
ンチ左を通り抜ける。

「もしも、貴方がそちらに組するなら私としては貴方をここで排除
させて貰わなければならぬから……貴方の血がこの世界に波紋を
生む事だけは避けたいの……」

「波紋ね……興味ないし、関係ない。お前にどうじつ言われる筋合
いはねえよ！繚乱！」

「自分の言つている事の意味を分かつてゐるの？貴方には光を生きる
という選択肢もある”それを棒に振るつもり？”

繚乱の言葉をフィアナは鼻で笑うと殺気を込めた視線で繚乱を射
抜く。

その殺気に繚乱は自然と鉄線へと手が伸びた。

「棒に振る？なら、そんな選択肢なんて存在しないだろ！お前らが
飛ばされてから俺がどれだけ殺した！前の事件で俺はどれだけ殺し
た！俺の手はもう血に染まつてんだよ！それに、それに……ここで
止まつたら全部嘘になつちまうだろうが！」

「ファイアナの言葉に繚乱は一步後ろに引いてしまう。

それは、全て繚乱のミスだからだ。

あの時、容易にそうなるであろうことが想像出来ていたにもかかわらずそれから田を逸らした己の責任だからだ。

あの子を逆に引き渡す結果を招いてしまったのも他ならない繚乱であった。

「そうね……貴方の言いたい事は理解した。それでも、ここでの日々はどう……」

ファイアナは繚乱の言葉の最中に自らの銀髪に手を伸ばすとナイフで一気に切り取つた。

そして、ファイアナは繚乱に対して切つた髪を投げつけてこう告げる。

「俺はファイアナーシュトレーゼじゃない！あの女は既に死んだのさ！俺はクロエ＝フローレア！人殺しの末裔であり、俺もまた人殺しなんだ！光なんて必要ない！俺が求めるのは惨たらしい死を与えてくれる場所だけだ！俺に平穀に生きる権利なんてない！俺にお似合いなのは地獄よりも最悪な闇の世界で生きながらに死んでいくことだよ！」

「そうですか……なら、これ以上貴方が手を汚す前に一思いに殺めて差し上げましょう！」

繚乱はそう叫ぶとクロエへと駆け抜ける。

しかし、それを四季星が許す筈が無かつた。

「悪いが、貴様の相手は私だ！」

「今は貴方と戦つつもりはないのだけど……簡単には通してくれそうにはないわね……姉さん」

高速で鉄扇と刀がぶつかり火花を散らす中で黒渕は四季星へと狙いをつける。

それに気付いたマイカは慌てて槍で銃口を跳ね上げた。

「つぐ！邪魔な！」

「おいおい、狙撃屋がこんなに前線に出て来るか普通……まあ、いいか。そう簡単に取れると思つなよ？俺たちの首を！」

そうして、今にもこのグランドが戦場へと変わらうとした時、繚乱と四季星、マイカの携帯が同時に鳴り響いた。

マイカはその着信に全てが上手くいった事を知ると四季星へと田配せする。

そのまま配せに、四季星は頷くと量乱から距離を取り携帯の通話にせず、着信を切った。

「引き上げるぞ……あの方から撤収命令が出た。これから戦場を前に下らぬ戦争をするなだそだ」

「これから戦争ね……おれはリシェルが傷付かなければそれでいいが確かにこれからの舞台を考えるとこんな下らない極東の雑魚相手に負傷して乗り遅れるなんてバカらしいな」

「なにがいいたい！」

黒渕は意味不明な一人の言葉に銃口を向けて引き金を引こうとする

るが、それを繚乱が制止した。

「私達は戻りません……」

「ど、どうこの事ですかー敵を田の前にして逃亡なんてー！」

「上から命令よ……日本じゃなこ……国連からの通達……何かしらの密約が交わされて彼らのイ・カーとの交戦には田を喰る事と、それらの横やりは出来る限り控える……やつてくれたわね……けど、私たちがこれで黙っていると思わないで貰いたいわね。次逢った時、確実にあなた方を捉えて差し上げましょウ……」

そう言い残すと、公安は引き上げを開始する。

その隙に乘じて、カナはクロエを抱えると急いで離脱し、弟のキンジの部屋へと転がり込んだ。

闇と光の境界線（後書き）

感想待つてます

相容れない思い

「それでカナは本気でアリアを殺すつもりなのか！それに、なんでそいつがカナと一緒にいるんだよ…さつきのは一体なんなんだよ！」

「質問は一つずつにしてくれないかしら？それに、私だって全てを知っているわけではないのよ？ここに来て裏の世界に法を敷くロシアにアジトを構える暗殺結社が動くとは思っていなかつたから」

キンジは暗殺結社という言葉に耳を疑つた。

絶対に表舞台に姿を現さない言わば、裏社会の掃除屋である筈の人間がこうも表舞台に姿を現しているからだ。

そして、これ以上イーウーに関わらうモノなら必然的にぶつかる事となる。

しかし、どう考へても勝ち田などある筈が無かつた。

「その話はいい！なんでアリアを狙うのかだよ…答える義務くらいあるだろ！」

「第一の可能性よ……けど、その可能性はなさそうね……あの程度で翻弄されて負けるなんて……彼は万全ではなかつたけれど、アリアは万全だった筈よね？もしも、本番だつたら何度も死んでいたかしら？」

その言葉にキンジは何も言い返す事は出来なかつた。
だが、それに対しても一つの間にか起きていたクロエはこゝに呴く。

「可能性とか下らない御託よりも、問題はその先の事だろ？が…
世界はその先へと向けて動き始ている。時代のうねりは裏の世界だ

けでなく表へと波及して何らかの悪影響を与える。特にこれまで抑えられていた世界を支配するのを夢見るバカども辺りの所為でな……お前、自分の立場分かつてゐるのか？」

「そ、それは……」

キンジが言葉を濁した様子にクロエは身体に鞭を打つて起き上がるとキンジにこう告げる。

「もしも、ここから先に覚悟が無いなら踏み入るな……今までの戦いなんてぬいと思うような地獄が待つてゐるぞ？特にお前は中心にいる。そういう場所は狙われやすいからな……それに、俺はもしこれ以上関わるようななら容赦なくお前を殺す」

「本当に殺す気があつたなら、今の時点でアリア風に呟つなら風穴があいていたと思つがな」

「つて、なんでお前がここにいるんだよ……ジャンヌ」

公安との戦いの際に色々と口が滑ってしまった事を思い出したクロエの顔からは冷や汗が噴出し始める。

ジャンヌはそんな慌てふためくクロエの様子を楽しみながらクロエの左手を握ると注射針を刺し、点滴を始めた。

「お前が倒れたのでカナが私を呼び出されてな……それにしても、よくもまあ無茶ばかりしてるものだな……今だつて体が悲鳴を上げてるんじゃないのか？」

「」うちの世界で生きていくにはどんな状況でも生き残らなければいけないからな……負ければそれは死者、生き残ればそれは勝者で

次の戦いに臨む……判り易いシステムだと思つだろ？お前らは命に
どれだけの価値があると思つ？」

クロエの問いにキンジは当然の如くこいつ答えた。

「そんなもの、量れるわけないだろ！お前の命だつてかけがえのな
いモノの筈だ！」

その答えにクロエは大笑いをし始める。

ジャンヌとカナはその嗤いの意味を感じ取ると何も言えなくなつ
てしまつた。

「どうも模範解答ありがとう。とてもいい解答だな……お前は本当に
そんな世界があると思うのか？世の中どれだけの人間が搾取され
て殺されてると思う？たかが、紙切れの為に命を落としてると思う
？それが世界だよ！俺たちの命なんぞ紙切れ以下の存在なのさ！そ
んな紙切れ以下の存在が何かしようとするなら命を懸けないと何も
出来る筈が無いだろ……お前らみたいな世界の人間と一緒にすんじ
やねえよ！殺すぞ」

クロエはそれだけキンジに告げると立ち上がり、さつわと部屋を
後にしようとすると。

しかし、それをジャンヌが許す筈が無かつた。

「IJの程度の怪我なんぞ何でもない。この二つの顔見ると反吐が出
るー。」

「悪いが通すわけにはいかない。せめて、その点滴が終わるまでは
ここにいろ」

有無を言わせぬジャンヌの様子にクロエは渋々従うとソファーに横になり、目を閉じた。

「それじゃあ、そろそろアリアも帰って来るでしょうし私はお暇させて貰うわね。その点滴が終わったら連絡頂戴。近くのアジトの場所を教えるから」

「おい……お前は俺を敵地のど真ん中に置いてくつもりか?」

「あら? 仲間だなんて思ってないんでしょ? だって、貴方の中にいる線引きはたつた二つ何ですから」

その言葉に、何も言ひ返せなくなつたクロエを見てカナは楽しげに笑つた。

「それじゃあ、ジャンヌ後の事はお願ひね

カナはまっさきで、姿を消すと同時に部屋へと四つの足音が鳴り響いた。

その足音にすぐさま誰だかクロエは把握すると関わりないみつこタヌキ寝入りを開始する。

「……ただいまって、なんでここにつがこにいる訳?」

アリアの言葉に気付かれないように注射針を抜こうとするが、それをジャンヌによつて踏みつけられて止められてしまふ。

「痛いだらうが! 何しやがる! 向いつ側もびつやら顔を合わせるのがお気に召さないらしいからな……わざと過場してやるつて譲歩してやつてるんだらうが!」

「はあ？別にそんなこと言つてないわよ！それに、さつきは言い過ぎたつて謝りたかったし……」

「言い過ぎたつてアレは事実だろ？お前は間違つたこと言つてないし、世間一般ではそうなつてゐる。俺は人殺しでお前らが正義 さつき、繚乱だつて似たようなこと言つてただろ？俺たちは世間一般でいう所の犯罪者だつてさ」

まるで、先程の豹変が全て演技だつたかのような語り方にアリアは耳を疑つた。

「あんた……それ、本氣で言つてる訳？あんたのあの時の言葉は嘘だつたの？アンタのあの時の怒りも演技だつて言えるの？」

「何怒つてるんだよ……おれはお前らが言う悪人だ。口から平然とでまかせくらゐ吐けるや……そんなんで誤魔化されるんて本当にお前らつてバカだ……」

突然、クロエの頬に痛みが走つた。

それが粉雪によつて叩かれたものだと気が付くのに数刻の時間を要した。

「ふざけないでください！」

「いや、ふざけてなんてないだろ？俺は事実を言つたまでだろ。どこのふざけたのか教えてほしいくらいだね……」

「ふざけてるじゃないですか！怒つてないなんて嘘です！だつて、だつて、貴方はその人の為に」

「おいおいなんだなんだ？お前は人の心でも読めるのか？読めもないのに分かつたような口るのはよくないと思つた？それとも、それがお前の言つ占いか？」

粉雪を小馬鹿にするようにからかいながら横田で点滴の残量を確認する。

そして、まだ残量が半分近くある事を知ると小さく舌打ちをした。

「あ、あの……その、えつと、その……ね、あれ、なんていえばいいのかな？色々とあつたら何言つか考えてたのに」

完全に女装を解いた事でビーナスラインも男性と認識されいつになつたらしく、舌足らずな中空知になつてしまつた事にクロエは溜息を吐く。

そんな中空知の様子にジャンヌは溜息を吐くとクロエにインカムを手渡した。

『何から話せばいいのかな？フィアナが実は男の子だつてわかつた時は驚いたけど、私は友達だと思つてる。短い間だつたけど、色々と手助けしてくれたし私の趣味に何も言わず付き合つてくれたし、私が仕事抱えたときなんて何も言わずにその仕事を半分も片付けてくれて……感謝してもしきれないくらいなのに……じめんなさい……苦しみに気が付いてあげられなくて……』

『俺はお前なんかに理解してほしいなんてこれっぽっちも思つてない』

『分かつてゐる。けど、私は理解したいなつて思つてる。ううん、知りたいの……だって、フィアナの事が好きだし、男の子だつてわか

つてもその気持ちは『

最後まで聞き取る前にクロエはインカムをジャンヌへと投げ渡す。そして、最後の一滴が落ち切った点滴の注射針を引き抜くとそのまま何も言わずにその場を後にしようとする。

そんなクロエの腕を中空知は掴んだ。

「わた、わた、わ、わたしじゃ……ち、ちか、ちからにな、な、ならない、かな？」

「ならない……お前以上の奴が知り合いにいるからな……奴の情報収集能力に比べたらお前なんてまだまビヨッ子だ」

粉雪はその去ろうとする背中に対して、今だに持ち続けている淡水を渡そうと声をかけようとすると、その一言が出ずくにクロエに手渡す事が出来なかつた。

そして、粉雪の胸はなぜかチクリと痛むのだった。

「空が青いな……本当に俺には似合わないほど青すぎる」

クロエはアパートを出る直前に地面を向きそつまく。
そして、携帯を開くとある番号へと電話をかける。

「用意して貰いたい装備がある。今から大至急でだ」

『既に用意は出来ていますが、追加ですか?』

「まあ、一応はそつなるな……いくつか特殊な弾が必要になりそうでさ……非殺傷の麻酔タイプとゴム弾、超能力用もだ……」

『分かりました……至急用意させます。口径の指定はありますか?』

「ない……ああ、女性用の黒い戦闘服用意は出来ないか?スカートの中に手榴弾仕込んでさ……あとは、銀髪の付け髪……ばっさり切つたから今のままだと女装は不自然だしむ」

『わかりました』

クロエは電話を切る前に電話の相手に対してもう尋ねた。

「なあ、もしもある時に選択を誤らなければまた違った未来があったと思うか?」

『それは誰にも分かりません。人は神じやない……未来は分からない……だから、そんなエフを語る事そのモノが無意味です。です。やはり、彼らの事ですか?』

電話の相手の心配そうな声に乾いた笑みを浮かべる。

絶対に交わる事はない線だ。

生者は死者を理解出来ない。

同じようにクロエも彼らを理解出来ないだろう。

ただ、叶わぬ夢、星に手を伸ばすようなモノだ。

「いや、ただの気の迷いだよ……それだけだ」

クロエはそう呟くと相手の返答を待たずに電話を切る。
そして、カナへ連絡し居場所を聞くのだった。

相容れない思い（後書き）

感想待つてます

それぞれの思い

「早かったのね？」

部屋につくと、ソファードで寝ていたのかカナが顔を上げる。
それに対して、受け取った装備を適当に机に並べながらクロエはこう答えた。

「あいつらと話す事なんて何もないからな……もとより、敵と仲良くする義理は無いからな」

カナはクロエの言葉に静かにつなずくと、拳銃の整備を始めるクロエの様子を見つめる。

いつも携帯しているM686だけでなく、MK23モテキパキと手慣れた手つきで終えていく。
そして、拳銃の整備を終えるとM686を持ち、ハンマーを上げカナに向けた。

「何のつもりかしら？」

カナがクロエを睨み付ける。

そんな様子を気にせず、クロエはカナに対しても呟いた。

「次の巡り逢わせはアンタも敵だ。だから、先に言わせて貰う。次に戦場でお前の弟に遭つたら、俺は容赦無くアンタの弟に対しても引き金を引く」

クロエはそう告げると、ゆっくりと引金を引いた。
しかし、弾薬の入っていない為、弾はカナに対しては発砲されな

い。

カナはその行動の意味を敵対宣言だと受け取るとまっすぐにクロ
工を見つめた。

「そう……それは少し残念ね。貴方とは上手くやつていけそうだつ
たのに……キンジを殺すと言われたら、私としてもそれなりの対応
をさせて貰わないとならないわね」

カナとクロ工の間に緊張の糸が走る。

共に自らの武器へと手を伸ばし、何時でも相手の息の根を止めら
れるようにな……

互いに見つめ合いどれだけの時間が経つたのか分からな

クロ工はM686を下ろすと、持っていたそれを着ていた黒い戦
闘服へと収納していく。

そして、先程切った髪に銀髪の付け髪を施す。

カナは元通りになつていくクロ工を見て少しだけ心配になつてしまふ。

これから、敵同士になるとは言つても、密度の濃い時間を共有し
ているからだ。

公安との戦闘の傷も完全に癒えた訳でもないのに、教授を暗殺す

るという不可能な仕事をしなければならない。

そんな、クロエを見過ごせるほどカナは敵視出来なかつた。

「本当に、するつもりなの？ 教授暗殺を……」

カナの真剣な眼差しに一度は適当な返答でこの場を濁そうとした
クロエもその言葉を飲み込み、深く息を吸い込む。

「ああ。それが出来なければ死ぬだけだろ？ 僕が鉄砲玉になれば
次の舞台でそれはカードとなるし、もしも成功すれば次の戦争で優
勢な状況から始められる。俺が死んだ所で任務に支障は無い」

自分の事には一切触れず、その仕事の意味だけを語りつつとするク
ロエの襟首を思わず、カナは掴んでしまう。

そんなカナの両手をクロエは優しく払いのけるとゆっくりといつ
咳いた。

「それをアンタが言う資格は無いだろ？ 正義の為に弟を犠牲にし
たアンタが……まあ、それに俺にはアンタみたいな身内はいない。
一人、母親がいるにはいるが今、どこで何してんだかわからやしな
いしな……アンタみたいに誰かを悲しませることも無い。立つ鳥後
を濁さずつてね」

クロエはまるで自分の事が何でもないよう笑つて見せる。

仲間なんていない。先程、フィアナという名前は死んだ。

ここにいるのはクロエであり、フィアナではない。

あの場所に全てを置いてきた。過去の遺物である淡雪も何もかも

……

「貴方、死ぬつもりなの？」

思わず、カナの口から洩れた言葉にクロエは乾いた笑みで小さく首を横に振った。

「死にはしないさ……ただ、元の場所に戻るだけだからな」

人は何度も死ねるものではない。

精神は既に死んでいる。もう一人の自分も殺した。
ならば、なぜ死を恐れようか

クロエにとつて死は始まりに戻るだけなのだから……

しかし、その言葉に反論できるだけの材料をカナは持ち合わせていなかつた。

何を言つた所でクロエには決して届かない。

見てきた世界が違い過ぎる。

この決定的な隔たりが今の二人の間には確かに存在しているからだ。

「まあ、運よく生き残つても次は戦争が待つてゐる。早いか遅いかだけの違いだろ?」

クロエはそう告げると一人、屋外へと出て行く。

カナはその後ろ姿に何かを言おうとするが口から言葉が出て来ず、そのままクロエを行かせてしまった。

力ナの寝床を出たクロエは一人、喫茶店へと来ていた。

別段、暗殺任務を言い渡されてから何一つしたい事も思い浮かばない。

高揚感も無ければ絶望すらない。そこにあるのは、ようやく終わりなのかという安堵だけだった。

適当に空席を見つけると、コーヒーとケーキを頼む。

そして、湯気が立つコーヒーの暗い水面を見つめ時間を潰していった。

「相席いいかしら?」

「勝手にしてもうひとつ構いませんよ」

相席を願い出した女性は躊躇いなくクロエの前の席に座ると深いため息を吐く。

そんな相席の女性にクロエは呆れながらこいつ皮肉った。

「お暇そうですね。公安は」

「さつきまでは忙しかったんだが、上から動くなって言われてね…… そつなつちや動けないから遅めの昼食つて奴だよ。もう、夕食つて言つても間違いではないがな……」

クロエは時間を確認すると五時を回っていた。

頼んだコーヒーもすっかり冷め切つており、クロエは深い溜息を吐いてしまう。

そんなクロエの様子に繚乱はサンドイッチを頬張り、雑誌を眺めながらこいつ睨ぐ。

「生きてるのに死んでるような顔をしてるわね……死相が出てる訳でもないのに……」

「もうですか……死相は出ていませんか」

冷め切ったブラックを飲みながらクロエは残念そうな顔をする。そして、辺りにほかの公安メンバーが監視していないかを横目で確認し始めた。

「安心しなさい。ここであつたのは本当に偶然よ。だから、部下は一人も連れてないし、黒渕も雑務でいないわ」

クロエはそれでも辺りへの警戒を解く事なく、ブラックのコーヒーを飲み干すとさつさとケーキを平らげてしまう。

そして、もうここには用は無いと立ち上がりうどするが、そこで繚乱に腕を掴まれた。

「少しじぶらに付き合になさいよ。知らない関係ではないんだから……」

…

「何が楽しくて敵と顔を突き合わせて時間潰さないとならないんだよ。しかも、つこそこまで睨み合っていた奴と……」

東京武偵校敷地内で一触即発の事態にまでなった。
その敵対している中の一人がこう面と向かって座っている状況は確かにおかしい。

しかし、繚乱はそれを一笑すると無理やりクロエを席に座らせる。

「別にいいでしょ。なんなら私がおじつてあげましょうか?」

「おひつたら、後で返せとか言われそつだから断る。出来もしない約束はしない主義でね」

死ぬかもしれない状況で生きて帰るなど無責任な事はしたくない。いや、何も残しておきたくないのだ。

そんな中で対岸の銀行の様子がおかしい事にクロエは気が付いた。これからシャッターを閉め始めるのなら分かるが、既にシャッターが閉じられている。

その上、先程から何気なく見てていたのだがどう考えても出てきた人数と入った人数の辻褄が合わない。

何か事件の臭いがするとクロエの嗅覚が告げているが、そんなものは今のクロエには関係なかつた。

「対岸の銀行……」こんな時間に銀行強盗なのかしらね？ 大変ねー警察も」

「行かなくていいのか？ 銀行強盗を見逃す事になるかも知れないんだぞ？」

いつもなら、即座に腰を上げる繚乱が今回に限つて動く気配が無い。

それどころか、雑誌から田を離せず、いまだにサンドイッチを食つていた。

そんな繚乱の様子にクロエは呆れる立上り、喫茶店を出ようとする。

「私としては、あの粉雪つて子が貴方の心の傷を埋めてくれるつて思つてたんだけど、上手くはいかなかつたみたいね。まあ、相手は星伽だから、そう上手くはいかなかつたでしようけど少しだけ期待していたのよね……あの子にさ

「期待外れもいいところだつたな」

クロエはそう言い残すと喫茶店を後にしてしまう。そんなクロエの後姿を見つめながら、繚乱は呆れながら誰にも聞こえない声でこう呟く。

「意外と私はそうは思わないのよね？ だって、こうして貴方はまだ目の前で困っている人がいたら見捨てられないでしょ？ 少なからず、影響を及ぼしてるのは確かなのよ……完全に傷を癒せなかつた分、変に傷口が歪んでしまっているみたいだけどね……」

繚乱は先程までクロエの居た椅子を見つめながら独り言を呟くとようやく重い腰を上げる。

そして、机の上に雑誌を置くと懷に差した鉄扇へと手を伸ばした。

それぞれの思い（後書き）

感想待つてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560q/>

緋弾のアリア～血濡れた銀狼～

2011年11月15日19時12分発行